

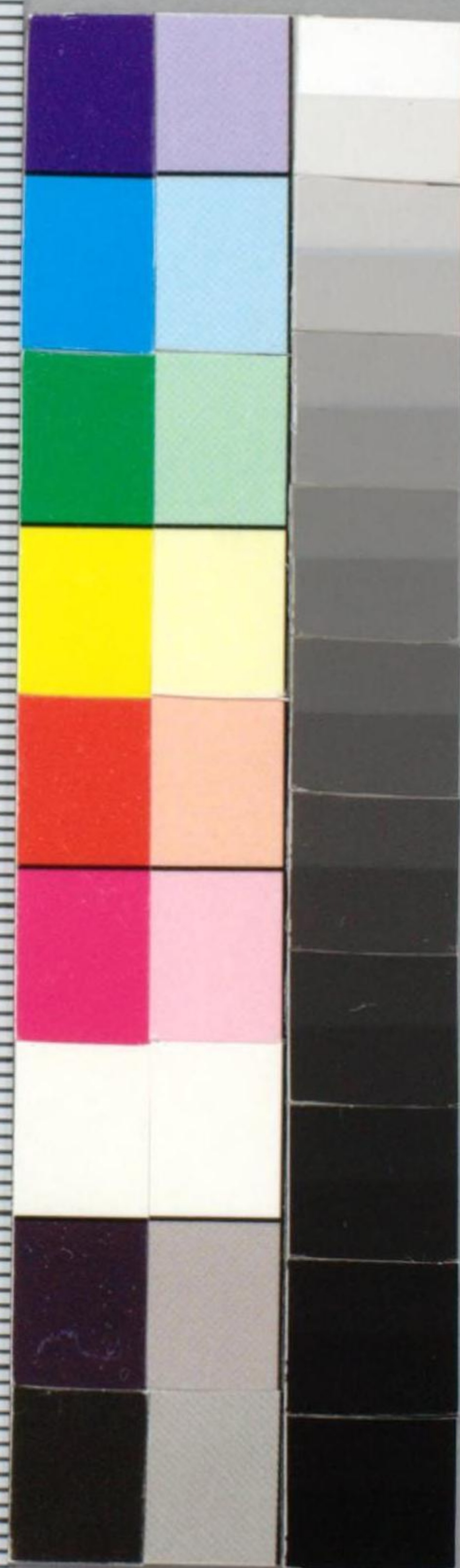
159
0248s



00332071

世相諷話

原長星著



小笠原長房著

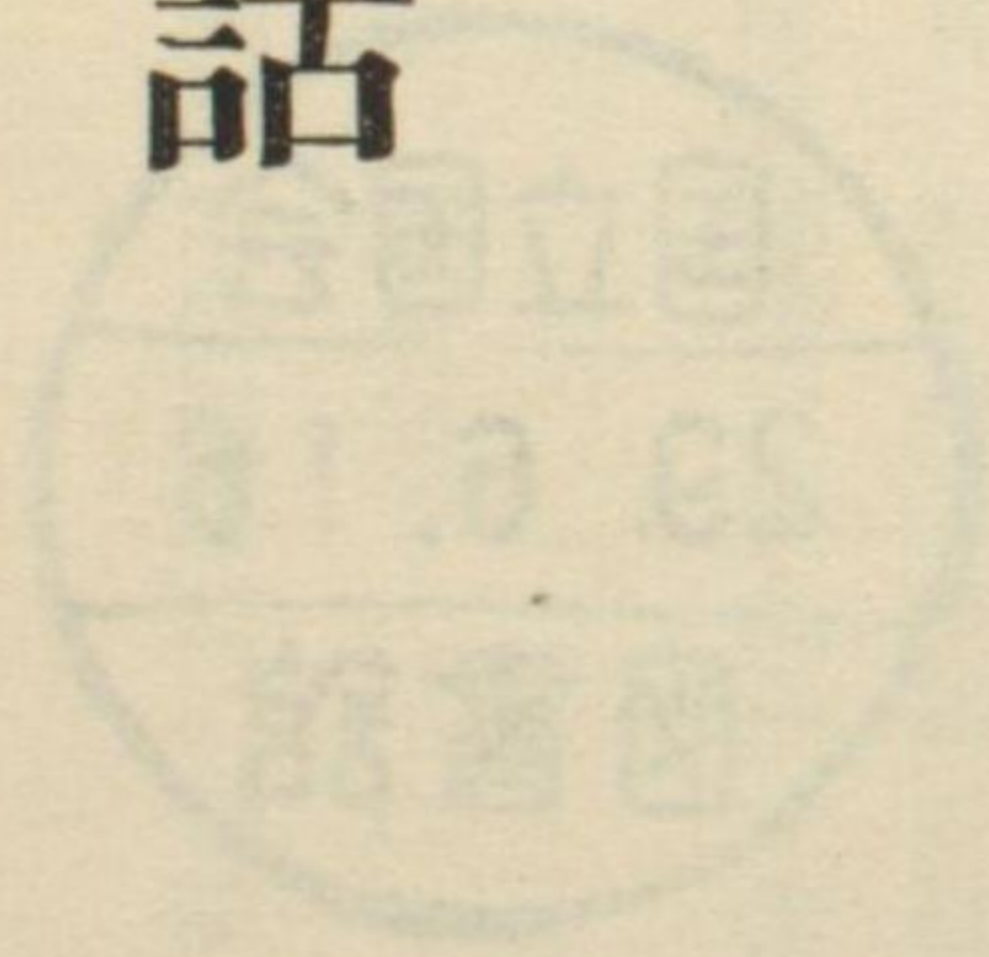
世相諷話

新島出版社

小笠原長星著

世相諷話

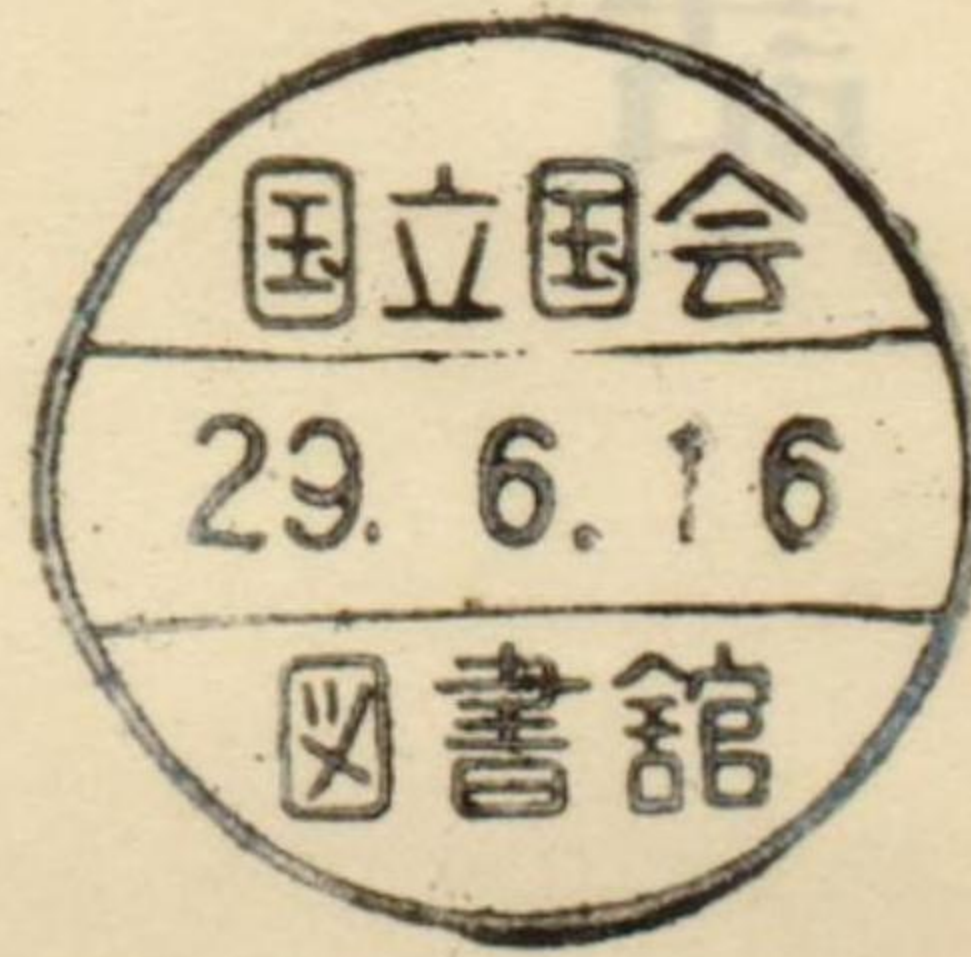
彌^ヤ榮^{サカ}出版社



170368



159
0248A



332071

自序

生々流轉、定めなきは人生の常態であつて、昨日の淵は今日の瀬と變る世相の推移は、凡俗の測り知る事の出來ぬ處で、桑田變じて蒼海となる譬の通り、有爲轉變、誠に一寸先は闇の世の中である。

殊に相手を見くびつて、無理押しした滿洲事變から支那事變、敵を知らず己れを知らずに、國運を堵して大博奕^{ばくち}を打つた無謀なる今次の戦争の結末まで、世の中の變遷は、極端から極端に至り、表と裏のドンデン返しを見せて居るのである。

勝つた勝つたと、宇頂天になつて、東亞の盟主などと自任した自惚を、やがてガダルカナルに盛り返され、マインヤルが占領され、硫黄島も沖繩も、他の手に渡り、本土は絶間のない空襲に大都市は殆ど焼き盡くされ、半身不隨の苦しまぎれに、あらゆる言論を壓迫し、國民の耳目を掩つて、出鱈目の大本營發表を絶對的に信頼させ、飲食衣服から住居まで「勝ち抜く爲め」と稱して國民に窮乏を耐え忍ばせ、生命財産を「大君に捧げ」させた揚句の果が、所謂本土決戦の一步前で、原子爆彈の威力を示されて屈服し、ホツダム宣言受諾の無條件降服、それから先は眞つ暗

の闇生活、凡ての希望と信義を失つた現代の世相は、筆にも口にも、書き盡くせず、語り盡くせぬ悲惨の状態である。 2

然し乍ら、人は元來社會的動物であつて、孤獨では生活出来ぬのである。何等かの形式で相倚り相扶けて、社會生活を營んで居るのであるから、闇の中でも誰かと手を握り合つて、先人の歩いた道を探り探り進みつゝある。善かれ悪かれ、人の振見て我が振を直し、人並に暮したいと念願し且努めて居るのである。

其處で、斯かる混頓の世相に直面しつゝも、闇の中から前途に光明を見出し、賢明な先人の足跡を辿り、人間らしい社會を再建するのが我等の道である。而して、我等の後を進む子孫後進の爲めに、より善き道を開拓して行くのが、我等の勤めである。

世相諷話は、筆者が昭和十年頃から、某地方新聞に、心血を濺いで執筆した隨筆中から拔萃したものである。現代の世相に照合して、聊かでも讀書士の参考に資するを得ば、望外の喜びである。

昭和廿二年初秋
長 星 識

目 次

自 序	一	人生感意氣	二五
日々新に想ふ	二三	毒にも薬にも	二六
優劣と適者生存	二四	毒薬と滋養薬	二七
強く生きる	二五	待つ心の修養	二七
文章と鏡	二六	待機の準備	二九
智識貴族主義	二七	貧苦と闘ふ	三〇
世に偉人なし	二八	金持に學ぶ	三一
矛盾を切る	二八	成功の秘訣	三三
諷刺の妙味	二九	柔は剛を制す	三三
肥柄杓の辯	二九	偽善と自新	三四
青年記者を戒む	三〇	喉元過ぐれば	三五
理想と現實	三三	七福と一善	三六
理想と實行	三四	大善と小善	三六
物の理と心の理	三四	緩急と効用	三九
玩味と消化	三五	花より團子	四〇

理論と妥協	四〇
最負の引倒し	四〇
逆効果の話	四二
根本的の覺悟	四三
小に仕ふる心	四四
志は行を伴ふ	四五
禽獸の道	四六
木曾川の人柱	四七
記憶力の限度	四八
日誌に就て	四九
聖なる愚人	五〇
與へ得る幸福	五一
過失と人間味	五二
幾度赦すか	五三
小兒と語る心持	五五
祈願と感應	五七
逆境の恩寵	五九

宗教と戒律	六二
理想境「彼岸」	六二
輪廻の理法	六三
因果應報説	六三
報謝と供養	六七
死者への追善	六八
孟蘭盆の法要	六九
化けて出る心理	七〇
不祀の鬼	七一
菩薩の行	七三
田螺の干物	七四
迷信か正信か	七四
西洋人と死	七五
地藏と閻魔	七七
牛に牽かれて	七八
運縁の不思議	七九
福神舞ひ込む	八〇

文學と宗教	八二
文學者と壽命	八三
流通物の不安定	八四
變遷への要意	八五
羊の歎き	八六
必要は生産の母	八七
國號の由來	八七
執れば憂し	八八
製糸と政治	八八
最後の仕上げ	八九
或誤診事件	九〇
船鼠の早計	九二
鼠の第六感	九二
利口馬鹿と馬鹿利口	九四
賢愚と損得	九六
男性と戀愛道德	九七
男性の愛情	九九

女の附從性	一〇〇
女給の夫	一〇二
結婚と優生學	一〇二
血液と黄金	一〇四
大奈翁と黄金	一〇五
生命か金か	一〇六
名譽と金と	一〇七
東郷元帥の書	一〇八
書も亦人なり	一〇九
中間階級	一〇九
韓非子を讀む	一一〇
粟食と米食	一一二
陳勝と吳廣	一一三
人物評論の難	一一四
眞實と其影像	一一六
英雄と人間味	一一九
實力と實行力	一二〇

一關亦一關	二二
匹夫志不可奪	二二三
志望は大なれ	二二四
希望と虚無	二二五
失敗と再起	二二七
天命を知る	二二九
富貴不淫貧賤樂	二三〇
死兒の齡	二三一
デイ河の粉屋	二三三
果實と人物	二三三
超死の氣魄	二三四
毅然たる氣魄	二三五
伊太利の俚諺	二二六
艱難と克服	二二六
西班牙の話	二二七
一病息災の説	二二九
同病相憐の情	二四〇

命の捨て處	一四一
厄年の迷信	一四二
職業的罪業	一四四
心構への話	一四六
心のゆとり	一四六
野中象山の設計	一四七
象山先生の遺徳	一四八
穀、樹、徳	一四八
諸戸翁の遺訓	一四九
日暮硯	一五〇
大津事件回顧	一五二
誰でも爲る事	一五三
隠亡根生	一五四
法人の人間味	一五五
嫌疑と反證	一五五
消極的拷問	一五九
前科者の悲哀	一六〇

背向きの辯論	一六一
法律と處世術	一六二
警官の第六感	一六四
罪名の製造	一六五
大官と刑罰	一六七
死屍に鞭打たす	一六八
時効の妙味	一六九
免れて耻なし	一七二
大岡裁判	一七二
復讐と正義	一七三
長所と短所	一七四
縁の下の力持	一七五
甘藷先生の墓	一七五
富士越の雲龍	一七七
生前か死後か	一七八
名将奇勝せず	一八〇
名譽の不運	一八一

裏切りと改過	一八一
順逆二門無し	一八二
光秀の叛骨	一八三
光秀と三成	一八五
美名の戒慎	一八六
大義親を滅す	一八七
武道の奥儀	一八八
焚書の新解釋	一八九
正義の對立	一八九
鬪争の人生	一九一
外柔内剛	一九三
狙上の鯉	一九三
弱者と報恩	一九四
兎の捧げ物	一九七
愚人と餅	一九八
獅子の共産法	一九九
幸運の指輪	二〇〇

英國王の故事	二二二
四月フール	二二三
民俗と季節	二二三
犬も喰はぬ	二二五
梅雨の恩恵	二二六
夏のさま	二二七
冬の再認識	二二九
天氣豫報	二二二
大震災の回顧	二二三
天災地變と爲政者	二二四
新婚者と性病	二二五
陳謝の方法	二二七
いの字都々逸	二二八
やくざの道	二二九
音を揚げる	二三〇
塞翁の馬	二三二
顔回の盜食	二三三
貧の盜み	二三二
賣る方買方	二三四
天井買はず	二三五
姑射山の老狐	二三六
秘密に就て	二三七
妻を畏るゝ男	二三九
何の五千石	二三三
「打つた鳥」の話	二三三
創業と守成	二三四
莊子と祀龜	二三五
父と子の問題	二三六
御祭禮の變遷	二三八
惠比須講考證	二三九
故郷へ錦	二四二
郷土と人物	二四二
信州人の特性	二四三
大阪人に學ぶ	二四三

彌彦山紀行	二四一
越後女の氣焰	二四七
越後は美人系	二四九
五智詣で	二五〇
名古屋所感	二五一
名古屋の三銀行	二五三
生活第一主義	二五四
藥草の効驗	二五五
太田窪の鰻屋	二五六
佛舍利に就て	二五七
鬼ヶ島異説	二五八
家室島の話	二五九
嘘の効用	二六〇
屈折の雅致	二六一
事業と一人の力	二六二
見透しとネバリ	二六四
運、鈍、根	二六六
捨て石の効力	二六八
事業主と用人法	二六九
外交員虎の巻	二七〇
水の五徳	二七三
酒と煙草	二七五
酒の六失	二七六
牧水の酒歌	二七八
温泉禮讚	二七九
著者略歴	二八〇

世
相
諷
話

日々新に想ふ

貝原益軒の語録に「日々に新にする者は、一日に一の工夫ありて、一年には三百六十五の工夫となり、十年に至らば、其長進する處測るべからず」とある。人間が他の動物と異り、萬物の靈長と稱して、生物界に君臨して居るのは、虎の如く猛き力あるが故でもなく、鳥の如く翼あるが故でもなく、又魚の如く水に潜るが故でもなく、只、脳髓を働かせて、苦心慘憺の結果、野獸を驅使し、飛鳥を擒へ、魚介を漁る術を工夫したが故である。世界の文明史を讀むと、國家と云はず、個人と云はず、偉大なる發達を遂げたものは、一度は必ず存亡の危局に遭ひ、工夫と努力の結果、辛ふじて幸運に恵まれたものである。兵法に「必勝の軍は、概ね必死の陣に據る」とあり名將が背水の陣に據つて、強敵を敗つた例は、要するに、必死の工夫と、必死の努力を以て、不利益な局面を打開したが爲である。窮すれば即ち通すと云ふ諺がある。けれども、窮した者が必ず悉く通すると云ふ譯ではない。平常何等の工夫なき爲め困窮した者でも、愈々艱難に直面し、

危急存亡の境に立至つた場合、必死の工夫を凝らせば、意外の打開策を案出して、局面を有利に轉回する事を待ると云ふ意味である。此故に、暖衣飽食の徒は、凡そ社會に役立たぬ存在である。何となれば、只先人の工夫に従ひ、只先人の努力の結晶を消費するのみで日々に新なる工夫に努めぬからである。

優劣と適者生存

進化論に謂ふ所の「適者」とは、必ずしも優秀なる者とは限らない。大都會に於ける大資本の百貨店は、斯界の優秀者であると同時に適者でもあるが、小都市に於ける小規模の呉服雜貨店は優秀者ではないが適者である。如何に優秀なる大百貨店でも、顧客の少ない小都市では立行かす經費倒れに終るから、此場合は不適者で、小都市には似寄りの呉服雜貨店の方が、顧客の點から生存に適するのである。

「破れ鍋に綴ぢ蓋」の譬通り、分相應の物が適者として存在する事になる。或一つだけがズバ抜

けて良いのは、不釣合で不格構でもある。

これが理想と現實との分界である。故に先づ周圍の事情に適合するか何うかを、考へて物事を計劃する事が、何より大切な事である。

強く生きる

生存競走の激しい時代に於ては、心を鬼にして、強く生きると云ふ事が何より處世の要件である。「あちら立てれば、こちらが立たず、兩方立てれば、身が立たぬ」と云ふ歌がある。あれも尤も、これも尤もと感服して居ては、自分の生きて行く餘地がなくなる。世間の義理も立て、自分の生て行く道も失はずに、相當の地位を保ち得る者は、現代の英雄と稱すべきである。

文章と鏡

鏡を見て、自己の醜貌を知ると同じく、文を作つて、自己の識見低きを知り、定めし世の物笑ひであらうと、衷心忸怩たる事がある。

文を作るは、憂ひを知るの基であると云ふが、我等の如く、淺學不肖の徒が、東奔西走の間に筆を執つて、文を作るのは、全く嗚呼の沙汰と云ふべく、時には拙文を讀んで脊らに冷汗を覺へる事さへある。然し乍ら、自ら愧ぢ、自ら遠慮して、沈黙を守れば、以て一身を安んずるかも知れぬが、自己の缺陷を發見して、修養向上する機會は得難いのである。鏡を見て、自己の醜貌を耻るのは、婦女子の常である。大丈夫なる者は、之を補ふに修養の道がある。今日の我は、識見低く、今日の我文章は、拙いであらうが、敢て自ら逃避せず、知らざるを知らずとして、日々に想ふて止まず、新なる工夫を凝して倦まざらば、他日の大成を期し得るであらう。希はくば、我識見をして高からしめ、我理智をして聰明ならしめ、我意思をして強からしめ、我情操をして盪

かならしめ、以て我文章を讀むに足るものに向せしめん事を。

智識貴族主義

貴族主義の殿堂は、凡ゆる方面に於て破却されたが、何時までも根強く堡壘を死守して居るのは、智識貴族主義である。智識が、人間存在の内面的高等なる活動である限り、之の優れた者を同胞の指導者とするのは、極めて合理的であり、人類社會に取つて、最も安全だと考へられる事が、智識貴族主義の肯定される根據である。然し、智識と云へば、概ね科學的智識を指すのであるが、科學的智者は技術の智識であつて、技術は人生の手段であるが目的でないから、科學的智識ある者が、人類同胞の指導者として、適當だとは斷定出來ぬ。此故に希臘の哲學者プラトール、アリストテレス等は、科學的智識の外に、藝術的の鑑賞力や、宗教的敬虔性や人格的教養ある哲人でなくては、理想的人類社會の指導者でないと記して居る。

世に偉人なし

歐米人半數以上の思想を支配したと云はれる思想家、ウエルズ氏の言に「世界に偉人と云ふものはない。人間の能力は大抵同じであるが、只努力に依つて五割位勝る事が出来るだけだ」とあるのは、味ふべき言葉である。

矛盾を切る

凡そ、批評的立場から此世相を眺めると、餘りに矛盾が眼立つて、卒直な心では黙視出来ず、何とか云つて見たい衝動に驅られるが、翻へつて自己の身邊を反省すれば、矢張り矛盾だらけの生活で、結局自己の生存を否定せぬ限り、他の矛盾に對しても寛大に「知る者は語らず」の態度を學ぶより仕方がないやうである。聖人でない限り、生活の矛盾は免れ難い人間味である。假へ

如何なる背徳者と雖も、演壇に立てば善を勧め惡を戒むるは當然の事であつて、其矛盾を指摘する如きは野暮の骨頂であらう。だから、古來の格言や俚諺には必ず相反した兩面があり、一方で「旅は道伴れ」と近寄れば、他方で「人を見たら泥棒と思へ」と警戒する。一方で「親は泣き寄り」と頼めば、他方で「親兄弟でも金錢は他人」と拒絶する。然し、矛盾の前に目をねむるにも限度があつて、其限界線を超へて一定の調和が破れる時に、矛盾は斷然切られるのである。

諷刺の妙味

パンヤンの名著天路歷程に、肥柄杓を持ち、うつむいて汚物を見つめて居る男の口繪がある。之は、世の中の暗い方面を見て、他人の放出する汚物にばかり専念して、それ以外の美しい人生を知らぬ憐れな男を、諷刺したものゝ由である。凡そ諷刺といふものは、多數の人が之を見て、皆自分の事の様に胸を打たれ、襟を正す處に妙味があるので、或特定の者が「さては俺の事か」と感ずるだけで、他の人は何の痛痒も感じない様なものは、單なるあてこすり又は厭がらせに過

肥柄杓の辯

何んな立派な人間でも、糞尿を放出せぬ譯に行かぬ。美人の屁も臭くない譯ではないから、只一發で三年の戀を醒すなどは、呆氣者の標本であるが、臭いものには蓋をして臭氣の發散を防ぐのも、社會道德の一つであるのに、臭い物にたかる蒼蠅の如く、他人の過誤や醜聞を、特に名士や美人のアラを探し出して、鬼の首でも取つたかの如く、喋々と吹聴する惡癖が、我等にはないであらうか。他人の悪い方面だけを探して、之を摘發吹聴するのは、肥柄杓を振り廻す様なもので、振り廻す當人は平氣でも、汚物を掻きまわされる方では、近所へ顔向けも出來ぬ事になり、頼みもせぬに紛々たる臭氣を嗅がされる者も、鼻持ならぬ迷惑を感じる事であらう。社會の汚物は肥柄杓で酌み取り、之を適當に處理する必要がある。然し成べく酌み取りは掃除夫に任すべきで、誰にでも肥柄杓を振り廻はされたのでは、社會は鼻持ちのならぬ臭氣に閉されて住心地の悪いものにならう。

いものにならう。

青年記者を戒む

現代ジャーナリズムの缺陷は、他紙より少しでも早く報導したいと焦る結果、事件の真相を、両面から觀察研究する餘融なく、表面皮相の見解を以て、速報に重きを置き過ぎる事と、讀者の注意を惹く爲め、誇大な形容を用ひ過ぎる點にある。直接利害關係のない讀者は、新聞記事など大して氣にも止めず、社會の一現象として讀流す程度であるから、多少事實が何うあらうと、報導の敏速な方を喜ぶ爲め、新聞記者の競争心を煽つて、そうした缺陷に導くのであるが、直接の利害關係者に取つては、重大なる影響を生ずる爲め、如何に大組織の新聞でも、所謂ジャーナリズム的缺陷の多い派手なものは、着實穩健なものより、信用を失ふ事が甚だしい様である。假へば、家賃滞納者に對して、家主が嚴重な督促をした爲め、何か問題を惹起した様な場合に於て青年記者の筆は、必ず偏見的に、借家人側に同情して、惡家主とか冷血家主とか、誇大な形容詞

を用ひて、皮相な記事を書くに定つて居る様である。然し乍ら、複雑な世相の實際を深く研究して、事件の因由を兩面的に觀察すれば、嚴重な督促をした家主が、必ずしも冷血漢でないと共に、滯納した借家人が必しも同情に値する弱者でない場合の方が、寧ろ多いのである。社會の實相は善人が必しも善事のみを行ふと限らず、悪人が常に悪事のみ爲すと限らぬ事は、今更云ふまでもないが、況んや善人を装つて、社會事業等に熱心な偽善者があり、一般からは悪人と思はれて居ても、内心純情の者もあるから、表面的の見解を以て、事件を豫斷してはならない。昔の名判官は「罪の疑はしきは之を罰せず」と曰つたが、現代のジャーナリズムは、疑はしい事を眞實らしく速報するから、問題の矢面に立つた者こそ災難である。

此事を胸中に置いて、問題に對し出来る限り冷靜に、事物を兩面から觀察して真相の探求に努め、現代ジャーナリズムの通弊たる誇大の形容を慎しむ様、我青年記者諸君の自重自戒を望む。

理想と現實

伊豆一國の領主になり度いと祈願した頼朝が、天下の征夷大將軍となり、仕官せば將に執金吾となるべく、妻を娶らば將に陰麗花を得べしと歌つた劉秀が、後漢の光武皇帝となつて、絶世の美姫陰麗花をも娶つた如きは、稀なる例外であつて、棒ほどの願ひが針ほども叶はず、理想と現實との隔たりが餘りに甚だしきを歎くのが、人生の常である。支那の古賢は「方二千町歩の土地と、若干の人口さへあれば、以て王土とするに足る」と云つたけれど、四百餘州の廣大な土地と數億の民は常に飢寒に泣き、内亂に困しんで居り、王道樂土の實現した話は聞かぬ。

理想と現實、人間は理想を追つて向上の道を辿り、現實の險難に阻まれて弊れるのである。然し歩一歩、理想の道を向上前進しつゝありと信ずる。

理想と實行

トルストイは、其全財産を投げ出して貧民に施し、自分は農夫の生活がしたいと思ひ乍らも、實際には何一つ施せなかつたと云ふ。だからと云つて、彼の思想が嘘偽だと云ふ者はない。それと同様に、假へ本人が實行しないにしても、將來誰か實現するであらう善い理想を唱へる事は人生に取つて徒事ではなく、凡そ先覺者と云はれる程の人物が、自ら理想を實現したのは稀有で大抵は其信者に依つて繼志され祖述されて後世を益するのであるから、理想と實行との不一致は必ずしも批議さるべき矛盾とのみ云へぬ。

物の理と心の理

村上浪六翁、現代の世相を觀じて曰く「物の理には明るいが心の理に暗く、人を凌ぐ氣は強い

が世と戦ふ勇氣に乏しく、權利は主張するが義務は履行せず、眼前の世智に長けて生涯の覺悟がなく、口先の世辭は甘いから感謝する誠意はない」と。

玩味と消化

讀んだものを、其儘記憶して居るのは、喰べたものが、其儘腹にあるのと同じく、身體の爲に有害であると思ふ。況んや、讀んだものを、其儘發表するのは、喰べたものを、嘔吐すると同じく、鼻持ならぬ臭氣の伴ふを免れぬ。玩味と消化が、讀書にも必要な事は、食物と同様である。

人生感意氣

唐詩に「人生意氣に感ず。功名誰か復た論ぜん」と云ふ句がある。此詩は、魏徵が太宗の知遇に感じて、君の爲なら名譽も利益も顧みず、水火の中も厭はないと云ふ感激の心を歌つたのであ

るが、數量を超越して居る處に、意義深いものがある。斯うした感激の純情は、段々と失はれて、行き目前の打算のみで取引きされる現代の世相は、餘りに物淋しいではないか。

毒にも薬にも

「毒にも薬にもならぬ」と云ふのは、物の役に立たぬ謂である。平常は、交際しよい友人でも、何か問題が起つて、藁一本にでも縋りたい時、幾ら信頼しても何の役にも立たぬ者があり、亦平常は氣が措けて、油断ならぬと思つて敬遠して居たのが、問題が起つて世にも人にも疎まれる時、義侠心から奔走して、望外の役に立つて呉れる者もある。科學的見地から云へば、毒と薬との差は、要するに分量の問題であつて、天恵の梅雨も、過ぐれば不測の損害を齎す。故に利あるを知つて害あるを思はぬは危ふく、害あるを思ひて利あるを知らぬは無益なる朴念仁である。人と交はるには、善い悪いの外に、俠氣と熱情の有無を知る事が必要である。

毒薬と滋養薬

猫いらすや青酸加里等の毒薬は僅か二十錢がとこあれば、數人の命を奪ふ事も出来るが、朝鮮人參其他の滋養薬は、數十圓がとこ服用しても、却々効驗が認められぬけれど、さりとして、滋養薬を無益なりとは云へまい。悪い結果は、急激に現はれるが、善い結果と云ふものは、徐々に且漸進的に、恰も薄い紙を一枚々々剥ぐ様にしか、現はれぬものとされて居る。

待つ心の修養

筆者は、少年時代から氣短かで何事も急速を尙び、明日の百より今日の五十と云つた風の手つ取り早い事を好む性質である。思ひ立つた日が吉日と、熟慮も遠慮もせず、直ぐ着手し斷行し來つたので、随分色々の事をしたけれど、大部分は失敗であつた。多少成功した事もあるが、他

人より餘計な苦勞を嘗めた割合に、自分の身には有かなかつた。中年に及んで大失敗をし、家族にも迷惑を掛け、親戚や友人にも不義理をして、始めて自分の非を悟り、以來自分の缺點を改め様と修養に努めて居るが、生來の性質は何うにもならず、相變らず毎日失敗を繰返して居る。頃日、或書に「待つ力」と云ふ修養談があつた。農民が、穀物の收穫を有するまでには、土を耕し種を蒔き、肥料を施し、草を取り、害虫を驅除するなど、様々な苦勞を積み、月日が経つて、穀物が成熟するのを待つのである。桃栗三年、柿八年と、諺にもある通り、果樹を植へて、果實を獲るには、永い永い歳月を待たねばならぬ。然るに机の上の議論で仕事をする我等が取つたか見たかの短時日に、相當の効果を擧げようと焦つた處で、そう簡易に成功する筈がない。啼かされば、殺して終へ杜鵑の信長は、力負けして倒れ、秀吉は智慧と努力で啼かしては見たが、結局啼くまで待つた家康が最後の成功を獨占したではないか。「待つ心」の修養、それが出來てからでない、眞の成功は駄目らしい。

待機の準備

機會の神は、前額に毛が生へて居るが、後頭は禿て居ると、西洋の諺にある。故に、機會は到來した時、直に掴まぬと、後から幾ら追駈けても捕へる事は出來ぬ。只氣永に待つだけでは、柵から牡丹餅は落ちて來まいが、焦つて機會を追駈けるより、次の機會を「待つ心」の修養に努めて、待機の準備を整へる方が、成功の近道である。「待つ」と云ふ事は、何か目當にする事があつて、それを待つのであつて、只漠然と幸運の到來を待つと云ふ意味ではない。筆者の如く、思ひ立つたを吉日として、熟慮せずに、遮二無二とその實現に焦り、不利益な狀況をも顧みずに押進むのが失敗の原因であるから、逸る心を押静め、徐に好機の到來を「待つ」事が好いのである。孫子の兵法に「來らざるを待む勿れ。待つあるを待む」とある。それは、敵が攻めて來ないだらうと油斷せずに、敵が攻めて來たら目に物見せて遣らうと、充分準備して、敵を待つ餘融を待めと云ふ意味であつて、所謂待機の姿勢を指したのである。要慎深い徳川家康も「事の將に成

らんとするや、大膽不敵なるを要す」と曰つて居る。それは充分の準備を整へて、機會の到來を待つた上「もう大丈夫だ」と見透してからの事である。

貧苦と闘ふ

貧苦と闘ふと云ふ語を、我等は今まで誤解して居たらしい。貧乏に馴れて、多少の不義理をしても、貧者の特權なる如き考へ方をして居りはしなかつたか？そして、金を得れば、無雜作に濫費し、結局金に誘惑される様な窮迫の立場を、自ら招く事をしなかつたか？眞實の意味に於ける「貧苦との闘ひ」はそんな邪道ではない。耳目口腹の慾を制して、不急の費用を節約し、平常の日に非常の要用を考へ、いざと云ふ場合には、威武も屈する能はず、富貴も淫する能はざるの恒心を示し得るのでなくば、以て清貧を語る資格はない。

金持に學ぶ

私有財産制度が、社會に容認さるる限り、何人が好むと好まざるとに關はらず、金持の勢力を無視する譯に行かぬ。金持にも、種々の型があつて、一概には云へぬが、大體に共通の行き方は金を粗末に費はぬ事、換言すれば、けちな點に於て、皆似たり寄つたりの特性を有するものである。金持が、資産を成した原因は、殆ど例外なく、金を粗末にせず蓄積したからで、卒直に云へばけちにしたから、金を蓄める事が出来たのである。故に、自ら稼いで金を蓄積した者が、けちであるのは勿論の事であるし、其子孫も、遺傳的に、又家風の影響から、矢張りけちん坊の特性を繼承するのは、當然の事であつて、若し之に反する子孫が出来たら、それこそ川柳の「賣家と唐様に書く三代目」で金持の株は持ち耐へられなくなる。金持が、社會から重んぜられるのは金を持つて居るからで、其金を蓄めた原因はけちにしたからであるのに、社會が金持のけちである事を批難するのは、矛盾も又甚だしいと、云はねばならぬ。我等は、金持のけちを批難する替

りに寧ろ之に學ぶべき必要があると思ふ。實際に於て、貧乏を口癖にする我等が、小金を懐中にすると、斯の時とばかり、あれも買ひたい之も欲しいと、忽ち費消して終ふのであるが、金持は決して斯様に輕卒な金の費ひ方をせず、欲しい物があつても辛棒して、よくよく心要が迫つてからでない、金を手離さぬのである。筆者の如きは、此浪費者の標本とも云ふべき者で、時には多額の金を掴んだ事もあるが、金は天下の融通物とばかり、小才を恃んで金を粗末にした爲め、いざ必要と云え場合には、常に誰かの厄介にならざるを得ぬ。誠に情ない事であると、今更乍ら自己の愚かさを悟つた次第である。

成功の秘訣

世界の新聞王と云はれたノースクリップ卿が、まだ駈け出しの新聞記者時代、靴の裏に鉄を打つ事を發明して、數百萬弗を儲けたトレーク氏を訪問し、成功の秘訣を質した處「自分は靴の事以外何も考へた事がない。靴の事を寝ても覺めても考へたのが、成功の秘訣である」と答へたの

を聞き、翻然として悟る所あり、以來新聞の事ばかり考へて、遂に新聞王とまで云はれる様になつたと。各種の事業に關係し、花々しく活動して成功した人もあるが、何處となく浮薄の感を免れず、一人一業を専らにして、第一人者となつた人の堅實さに如かぬ。

柔は剛を制す

「人若し右の頬を打たば、左の頬をも示せ。一里の賦役を強ゆる者あらば、彼と共に二里行け」と曰ふ聖書の句は、餘りにも有名であるが、それは無益の忍従に似て實は「柔克剛を制する」効果的方法ではないか。在原の業平が、毎晩情人の許へ通ふのを、夫人は些かも嫉妬せず快よく見送るので、反つて夫人の心情を疑ひ、或夜窺に窺ひ見ると琴歌に托して夫の身を案じて居るしほらしさに、流石の業平も自ら恥ぢて素行を改めた由である。

よく引かれる例で、電車で足を踏まれた事から大喧嘩になり、遂に扉の外へ突落されて命まで無くした話がある。これなどは始め柔らかく應待すれば何でもなく濟む事で、足を踏まれて痛

くても、命にかゝはる程の問題ではない。柔克く剛を制すと云ふ言葉を、くれぐれも心すべきである。

偽善と自新

茶根譚に「君子にして善を詐る者は、小人にして惡を擅にする者と異らず。君子にして節を改むる者は、小人の自ら新にする者に及ばず」とある。

「自分は俯仰天地に耻ぢず、後暗い事は何もないから、新聞でも警察でも、怖るゝ處はない」など云ふ人がある。

何も新聞や警察を怖るゝ必要はないが、俯仰天地に耻ぢずとか、後暗い事は何もないとか、立派な口のきける人間は、偽善者か、然らずんば破廉耻漢以外に、ある筈はないと思ふ。

我等は人間である。人間はデリケートな感情を持つて居る。此感情は、常に惡魔の誘惑に遇ひ善を爲さんと欲するも、敢て爲し能はず、惡を爲さざらんと欲するも遂に防ぎ得ず。常に後悔が

絶へぬのである。只、自ら省みて過去を悔ひ改め、將來を新にせんと努むる事に依り、辛ふじて、向上進歩の道を辿り得るのみである。

他から指摘されるれば、黙つても居られまいが、夜半獨り寢の床上に轉々反側し乍ら、自己の良心に問へば、天地に耻ぢずなど、云へる我等では、決してない。

喉元過ぐれば

喉元過ぐれば、熱さを忘るゝと云ふ諺の通り、人間は、不快な事や苦しかった事は、直ぐ忘れて愉快な事や楽しかった事は、いつまでも記憶する習癖を持つて居る。假へば、わさびを喰へて涙の出る程辛い思ひをしても、それは直ぐ忘れて終ひ、食後の快よい感覺だけを思つて、亦喰へたがると同じく、夏の暑い時分には、冬の寒さに凍へた苦痛は忘れて、炬燵で讀書する楽しさやスキー遊びの愉快さを思ひ出して、早く冬が来れば好いと思ひ、冬になれば、炎暑の苦熱は忘れて緑蔭で麥酒を飲む快味や、海水浴の楽しさなど思ひ出し、早く夏になれば好いなアと思ふ。こ

れ即ち「喉元過ぎて熱さ忘るゝ」人間の習癖である。此習癖は、人間に希望を與へ、人間の心を
明朗ならしめて居ると共に、人間を性懲なきものとし、幾度も幾度も同じ失敗を繰返させて居
る。然し、人間に斯かる習癖がなく、いつまでも苦痛の思ひ出を忘れ得ぬなら、人間は非常に臆
病になり、今日の如き進歩はして居るまいと思はれる。人間が、性懲もなく同じ失敗を繰返す
のは、決して讃めた事ではないが、失敗しても失敗しても、その苦痛を忘れて、勇往邁進する處
に、新なる進歩の道が開け、成功の彼岸に到達する機会が與へられるのである。同じ意味に於て
酷い目に遇はされた場合、いつまでも他を恨むのは、苦痛を永引かす丈で、何の利益にもならぬ
事である。吳王夫差が、父を越王に討たれて、恨骨髓に徹し、復讐するまで薪の上に寝て、遂に
恨を報じた處、今度は越王勾踐が、會稽山で戦敗した耻を雪ぐ爲め、苦い膽を嘗て復讐を志し、
又々吳王を討つて恨を晴らしたが、斯様に復讐し合つて居ては、人生は明朗さを失ひ、陰慘なも
のとなるであらう。眼を以て眼、齒を以て齒と云ふ風の復讐心を排して、相手の罪を赦し、敵を
愛する宗教心が生れて人生は明朗になり、社會は交際の範圍が廣くなつた。仇に報ゆるに仇を以
てするより、仇に報ゆるに恩を以てするのが、人間の偉大さを表現するものであつて、野蕃人と

文明人との差は、實に此點に在るのである。恨を忘れ、苦痛を忘れ、不愉快な記憶を拭ひ去る事
は、自分自身の幸福であると共に、實に立派な社會的美徳でもある。

喉元過ぐれば、熱さを忘るゝと云ふ諺は、人間の健忘性を戒め、失敗を幾度も繰返さぬ様にと
教訓したものであるが、我等は、之を逆に解して、人間の明朗性を謳歌したいと思ふ。

思ひ出はなべて懐し少き日に轉びし坂も今はなつかし 長星

七福と一善

或禪僧の偈に、七福神に題すとして左の如き一文があつた。「世に福を求むるは難く、辛勞努
力して一福も得べからず。況や七福をや。蓋し得難きを望む人情の空想に外ならず。何んぞ積善
の餘慶に如かん。夫れ陰徳必ずしも之を期せず、只一善を行ひて、罪障消滅の佛果を乞はんと欲
するのみ」と。

「七福は紙に描いたる繪そらごと、身の爲になる飯は一せん」

大善と小善

越前の永平寺へ、大阪の商人が参詣して貫主の高僧に遇ひ「極樂往生の近道はおまへんか」と質問した。貫主は咳一咳して「諸善を行ひ、諸悪を作す勿れ」と曰ふと商人は馬鹿にされたと思ひ「それ位の事なら貴僧に聞かなくて小供でも知つてまんが」と云つた。高僧は、此増上慢の商人を憐むやうに「幼童も之を知り、長老も之を行ひ得ぬ」と訓戒した。小さな事をして、無駄だからせぬ。今に大きな事をするに云ふ者がある。けれども小さな事さへせぬ者に、何で大きな事が出来るものか、と云はれよう。實際問題として、よく聞く事だが、「世の中には數へ切れぬ程多數の貧困者がある。それを一人や二人位助けて見た處で何になるか。個人の力で救済し切れぬものではないから、根本的の救貧制度を講じなくては駄目だ」と云ふ者がある。尤もな議論であるが、大抵は吝嗇の徒が寄附拒絶の定り文句とする。貯蓄をするのに、一時に多額は出来ぬが塵も積れば山となるの諺通り、小額宛なら出来るのと同じく、大善は望むべくして行ひ難いから

せめて小善でも行ふと云ふ心掛けが肝要であらう。

緩急と効用

長煩ひで賣喰ひの揚句、妻子を残して死んだ者の葬送をする爲め貧民長屋の連中が、僅か宛香奠を持ち寄つたが足りぬので、世話方二三人が家主の處へ寄附を乞ひに行くと、家主が曰く「お前達並の寄附も出来まいから、思ひ切つて澤山遣らう。だが今迄三ヶ月分の家賃が滞つて居るから、現金では出さぬ。滞納家賃一ヶ月分入つた事にして置く……」と。これでは、折角の寄附も焦眉の急に迫つて必要な葬送費用の役に立たぬ。熊公八公ならずとも「此因業家主め何吐きやがる」と啖呵の一つ位切り度くならう。貧しい者が、最愛の娘を藝妓や娼妓に賣つたりするのも、諺に曰ふ「背に腹は替られぬ」からで、窮迫した者には、明日の百よりも今日の五十が有難い。寄る邊なき渡世人が、一宿一飯の恩に酬ゆる爲め命を投げ出すのも、斯うした心理状態に因るのである。困つた経験のない者には、概して此思ひ遣りが薄いから、稍もすると理屈づくめの不人

情に陥り易い。

花より團子

畑の中に、一本の枯れかけた果樹があつた。もう殆ど果實は實らぬが、春になると心ばかりの花を咲かせて小鳥の歌を誘ひ、夏には僅かばかりの葉が茂つて渡り鳥の翼を休めさせて居た。

或日畑の持主が、何の役にも立たぬと云ふので、此憐れな老樹を切り倒さうとした。小鳥共は驚き悲んで、今後出来るだけ美しい歌を唄つて、持主の耳を楽しませるから、此樹を伐らないで呉れと懇願したが、無情な持主は承知せず斧で幹を一撃した。

處が、幹は空洞になつて居た。其中に蜜蜂の巢があつて、澤山の蜜があり、意外の實益を得る事になつたので、樹は切り倒されずに済んだ。

此寓話は、資本家と云ふものが花より團子の實益主義でなければ誘へぬと云ふ事の諷刺である。

理論と妥協

大體に於て、英國人は實利的であり、妥協的である。故に實利的妥協的の立憲政治、即ち多數決に従ふ議會政治が發達した。佛蘭西人は、感情的な理論家が多く、革命當時の志士は「自由か然らずば死」と叫び、亦「假へ世界は滅ぶとも、正義を徹底せしめよ」と主張した。我等日本人は、佛蘭西人ほどに理論的ではないが、英國人の如く實利的でないから、一部の實業家以外は、概ね妥協性に乏しい様である。故に議會政治に失敗した。殊に我信州人は理屈っぽいと云はれ、相當の人物でも、實行し難い純理論を主張する者が多い。然し、人間が生きて行く上には理屈通りに行かぬから、理論だけ立派で實行が伴はず、中途半端な人間が出來上る事になる。

最負の引倒し

他人を讃めたり、辯護する事は、貶したり、攻撃する事よりも六ヶしいものである。下手に露

骨な讃め方すると、反つて一般の反感をそより、讃められた相手に迷惑を及ぼす虞れがあり、下手に悪どい辯護をすると反つて他を激發して、辯護された者の不利益を招く虞れがあつて、之を最眞の引倒しと云ふ。女子は衣服の美を讃め、小人は瑕疵にさへ詔ねるが、良友は陽に曲を矯めて陰に短を補ひ、以て大過ならしめ様と努める。

逆効果の話

選挙の演説に、反對候補の人身攻撃をすれば、自己の得票が減少すると云はれるが、味方の新聞が餘り賞讃するのも、所謂「最眞の引倒し」で反感を催させ易い。子が父母を讃えるのは、元より孝行の道であるが、それを社會に發表する場合は、餘程考へた上でせぬと識者にひん暨せよう。孝經に「身體髮膚を毀傷せぬを孝の始めとし、功成り名遂げて後父母の名を顯揚するを孝の終りとする」とあるが、それは小楠公の賢母に於けるが如きを曰ひ、未だ社會的功業のない子が、自ら先考の遺徳を讃へる如きは概ね不肖の輩とされ、孝經の意味から推せば逆効果と見られ

る。實力のある者が、謙遜の態度で他に下れば、益々尊敬されて皆に推し上げられるが、反對に實力を笠に被て威張れば、逆効果で心服されまい。斯んな事は、解り切つて居るが、それでも世間は廣く、自他ともに日々に失敗の實例を見る。

根本的の覺悟

石山合戦の本願寺門徒や、島原騒動の切文丹宗徒が、意外に頑強であつたのは、信仰に依つて生死の覺悟が出来て居た爲である。安政の大獄に連座した勤王志士の辭世に「斯かるときさぞや命の惜しからめ、かねてなき身と思ひ知らずば」と云ふ歌があつた。それほどの覺悟があつてこそ、時の政權に反抗して、維新の大業を成就し得たのである。事の正邪は別問題として、近來の社會革新家が、檢擧されて直ぐ轉向するのは、根本的の覺悟が出来て居らぬからであらう。日蓮上人が、如何なる迫害にも耐へたのは、「法華經の爲に此身を捧ぐるは、黄金と糞土を換ゆるが如し」と曰ひ、不惜身命の覺悟を定めて居たからである。水にも火にも怖れなき信念、艱難にも

撓まず、迫害にも屈せぬ覺悟、先づそれを定めてからでなくては、人生何事をか成し得んやである。
41

小に仕ふる心

孟子に「大を以て小に事ふ。天を樂しむるは、小を以て大に事ふ。天を畏るなり。天を樂しむる者は天下を保ち、天を畏る者は國を保つ」とあるが、力量大なる者が力量小なる者に奉仕するに何等の不平もなく、恰かも母親が子供達に使はると同じ親切さで快く仕へるのは、孟子の所謂天を樂しむ者であつて、斯かる人物には、如何なる地位を與へても立派に勤めるのである。假へば工學士の肩書を持ちながら、一職工として勞務に服した鮎川氏が、後に大會社の社長となり、偉大なる經營者と尊敬されるに至つた如きである。芝居で云へば、名題俳優は下郎の役をしても大名より光つて見へる。従つて名優には役不足はない譯である。

次に、小を以て大に事ふると云ふのは、力量小なる者が力量大なる者に服従する。假へば店員

となり職工となつて、忠實に働き不相應な野心を起さずに本分を守る。斯かる人物は、他日一方の首腦者となつて、安樂に生活出来る。即ち天を畏れ、上に服従する者である。

然るに、世間往々にして自ら揣らざる者が多く、實力があれば、更に大を求めて小に事ふるを不足とし、實力もない辭に、分不相應の野心を起して失敗する。自分が苦勞して失敗するばかりでなく、周圍の者や取引先にも迷惑を掛ける。失敗の中には斯かる人物が多い。西洋では斯様な人物をドン・キホーテと稱して相手にせぬのである。

志は行を伴ふ

二宮尊徳翁の訓話に「朝夕善を思ふと雖も善事を爲さざれば善人と云ひ難き事、晝夜惡を思ふと雖も、惡を爲さざれば惡人と云ひ難きと同じ」とある。貸金の催促に行つて、假へ僅少でも拂つて呉れれば不満足乍ら債務者の誠意を認めるが、口先ばかりで些とも拂はねば、不誠意と斷定する外はない。平常世話になつて、常に感謝の念を懷いて居る先に、何か不幸が発生した場合、

早速駈けつけて見舞ふのは、何よりの誠意であるが、其際手ぶらで行くより、分想應の見舞品を携へて行く方が、一層誠意ありと認められる。「こんな物を贈つては、反つて失禮ではないか」とも思はれるが、志さへ伴へは金額は論せず。假へば病氣見舞に草花一本持つて行つても、葬式に線香一把持つて行つても、手ぶらよりは好い。然し乍ら、何か依頼する際に、音物を持参するのは心ざまが見へ透いて面白くない。のみならず先方の迷惑になる場合もあるから差控ゆべきである。

禽獸の道

二宮徳壽翁の訓話に「今日の物を明日に譲り、今年の物を來年に譲るの道を勤めざるは、人にして人に非ず、宵越の錢を持たぬと云ふ今日主義は、禽獸の道にして、人の道に非ず」とある。成程御尤もなる教訓であるが、新聞社の如く、今日の物を明日に譲る處か、今日の物を今日喰つて足らず、明日の物まで今日喰はねば、生きて行けぬと云ふ。禽獸のにもない現實生活がある。

儉約宗を奉ずる者は、消極主義の經濟策を遵守し、今日の物を明日に譲り、親の物を子に譲る事に重きを置くが、親戚朋友の爲に譲り、郷黨の爲に譲り、國家の爲に譲る事は、念頭に置かぬらしい。然し、尊徳翁は「眼前は他に譲るが如く見ゆると雖も、押しやりたる水の返々來るの道理にて、畢竟我が身上を維持するの道なり」と、積極的に共存共樂の經濟策を説いて居るのである。

木曾川の人柱

徳川幕府當時、木曾川堤防工事を、薩摩藩とする事になり、工事の監督者として、藩士數十名を派して、約二年間に涉り、數十萬兩の大金を費して築堤したが、工事が完成せんとする時、霖雨の爲め出水して堤防を押し流したので、更に工事を新にして、數年後に漸く完成し、幕府の檢分も済んで引渡しを完了した。其後、薩藩の工事監督者は、全員残らず切腹して、最初の工事が失敗した責任を明らかにした。

昔から、橋梁堤防等の大工事には、清盛の經ヶ島築造を始め、所謂人柱の傳説は珍らしくないが、木曾川堤防工事の場合は、それ等の迷信的傳説とは異り、當代の役人方に爪の垢でも煎じて飲ませ度い程の、責任感を發露したのであつた。

權力の行使には、必ず重き責任が伴はねばならぬ。故に責任が負ひ切れぬ場合は、事前に多數と協議して諒解を求むべきである。假へ善意の處置にしる、苟くも權力を用ひて事に臨み、若し其の結果が悪かつた場合は、尠く共、切腹して責任を取る位の覺悟があつて然るべしと思ふ。單に辭職や轉任位でお茶を濁すべきでないと思ふ。

記憶力の限度

雜誌改造四月號に、三宅雪嶺博士の「山本權兵衛」と題する文中、大正十二年九月一日の大震災を、九月十三日と記してある。雪嶺翁は、博覽強記を以て知られ、その得意とする英雄の傳記を語んや、恰も囊中の物を探る如く引例されると、側近者の驚嘆する處であるが、それ程の雪

嶺翁でさへも、記憶力の限度があると見へ彼の有名な關東大震災火災の時日を誤記されて居る。筆者は、學生時代大隈伯に私淑して強記を誇り、講義をノートに記さず、丹念に筆記した濟輩より優秀な成績を得て彼等を冷笑したものであるが、社會に出るからは庶務を記憶し切れず、記録に頼る事の安全なるを悟つた。刑法學者として有名だつた故大庭茂馬博士は、記憶力が非常に薄弱であつた爲め、他人の一度讀むのを數度讀み、他人の數倍勉強した結果、内外の學位を得られたが、博士の著書は、何んな頭腦の悪い者が讀んでも、解り易い様に書かれてある。記憶力の強いと云ふ事は、得な場合もあるが、それに慣れて限度あるを思はず、記憶力に頼る事は時に重大なる錯誤あるを免れず、寧ろ記憶力薄弱なる者が、記録に頼る事の大過なきに如かぬ。

日誌に就て

拔山蓋世の英雄項羽は「劍戟は一人を敵とする技に過ぎず、筆は姓名を書すれば足る」と曰つたが、大隈重信侯も筆を執らず、大臣としての副書と裁判所で證人として署名以外、殆んど筆跡

はない由である。其替り、侯の博覧強記は有名なものであつたが、早稻田の學生はそれを真似て筆無精な者が多く、筆者も「我輩の傳記は後世史家に書かせる」など豪語し、日記を誌さなかつたものである。それでも比較的記憶力が強かつた爲め、別段不便は感じなかつた。然るに、昭和八年の大患以來、著るしく記憶が減退し、日記を誌さぬ爲の不利益が、ひしひしと感じられたので、昭和九年の元旦から誌し始め、滿三年間繼續して其便益を痛感して居る。年頭に當つて、新しい日記帳を傍に、舊い日記帳の頁を繰つて見ると、單に便宜なばかりでなく反省の資料にもなり、何故もつと早くから誌さなかつたかと今更後悔されるのである。

「記憶に倚らず記録に頼れ」とは千古の金言である。

聖なる愚人

トルストイが、田舎道を馬車で町へ向つて行く途中、大きな荷を背負つて歩いて居る農夫に遇つたので、馬車へ乗せてやつた。農夫は大喜びで乗つたが、荷を背負つた儘座して居るので、荷

を卸したら何うかと云つた。處が、農夫は「いゝえ、わしが乗せて貰ふだけでも勿體なうごわすのに、荷まで乗せて貰つたでは馬に濟みません」と答へた。此農夫の愚直さを笑ふ前に、我等は考へねばならぬ。人間と云ふものは、恩恵に狎れ易く、一つの便宜を與へて貰ふとそれを當然の既得權と心得、更に他の要求までする。所謂醜を得て蜀を望み、要求が容れられぬ場合には、反抗心を起す者さへある。然るに此愚なる農夫は、馬車に乗つても、荷を背負つて居れば、それだけ馬が樂だらうと思ふほど智慧のない人間であるが、此愚直なる心こそ、聖なるものに通ずるのであるまいか。

與へ得る幸福

地方の富豪で、代表的の公職に就て居た人が、何だ彼だと他から合力されるを厭つて「これでは遣り切れぬ」と滯して居た。其時部下であつた筆者は「與ふる者は受くる者より幸ひなりと云ふではありませんか。人間他から合力をされる位でなくては生甲斐がありませんよ」と云つたも

のである。其後此人は事業に蹉跌して、殆ど無資産になつた處、昨日まで門前市を爲した合力者も絶へ、昔出入した配下も寄りつかなくなつたが、再び幾分盛り返して生活の安定を得たので、此頃は「矢張人間は他人を援助出来る位でなくては駄目だ」と、與へ得る者の幸福を悟つたと見へ、つくづく迷懷したのを聞いた。同じ學校を出た者でも、重役になる者もあり、使用人になる者もある。而して、重役になる者より使用人になる者に秀才が多いのを見ても、重役になつた者は祖先の遺徳と、社會の恩恵を感謝すべきであつて、自己の能力又は幸運を過信してはならぬ。元より、經濟生活をする者は、出費を慎まねばならぬが、能率を思はず、出しさへせねば好いとし又は少額にしさへすれば好い様に考へるのは、一文惜みの百失ひであつて、眞の經濟人とは云へぬ。聖フランシスは、合力を乞ふ者に對して、自分の持物を半分別けして與へたと云ふが、それほどにしても、自分より貧しい者が町に多いのを歎いたと云ふ。與へるに限りがあり、受くるに限りがないとすれば、寧ろ與へざるに如かずと思はれるが、與へ得る事の喜びを知らぬ者は、生甲斐を知らぬ者と云ふべく、且現在の社會制度に於ては、與へずに濟ますと云ふ譯に、行かぬ場合が多いのである。若し然りとすれば、與ふる立場の者は、寄捨を能率的に商量すると共に、

與へ得る喜びと幸福とを感謝すべく、受くる立場の者は、不遜なる望蜀の念を捨て、與へられた喜びと恩恵とを感謝すべく、兩者融合する處に、人情美が發露して、社會の平和が保たれる。
「與ふるも受くるも同じ喜びを分ち合ひてぞ安けからまし」長星

過失と人間味

人間であるからには、何人でも若干の過失は免れぬが、反省自戒して、之を改むるに吝ならずば他日の大成を期する事が出来る。病氣をした事のない者、貧乏の經驗がない者は、概して同情が薄く、人間味に乏しい。それと同じく、餘り潔癖で、過失を犯さぬ事に心懸け「自分には何の過失もない。誰からも批難を受ける覚えはない」と自負する様な人間は、概して器局が狭少で物の役に立たぬものである。過失を過失とせず、反省自戒をせぬ者は、勿論人間の層であるが過失を過失とし、自己の缺點を缺點と知つて、反省懺悔する人間は神の心に叶ふ者で、古來そうした人間の内から、聖者や大人物が現はれた例が多い。或人が耶蘇に向つて「過失は幾度まで許すべ

きかと尋ねた處「七度を七十倍まで赦せ」と答へた由である。斯かる寛大な心が神の御旨に叶ふのである。自己を罪人なりと悟つてこそ、改過遷善の心も起るし、他人の過失を容す寛大な態度にもなれるのである。「我等に對して罪を犯す者を我赦す如く、我等の罪を赦し給へ」との祈りは、實に人間味の豊かな祈願である。

「過ちを悔ひ改むる心こそ、神の國への道しるべなれ長星」

幾度赦すか

諸葛孔明は、漢に背いた南夷の酋長を捕へて、説諭の上服従を誓はせて放免したが、間もなく背いたので、又捕へて説諭の上放ち、斯くする事七度に及んで、遂に南夷を心服せしめた。耶蘇は、或人が「過ちは幾度迄赦すべきか」と尋ねたに對し「七度を七十度まで赦せ」と答へた。孔明は英雄中の聖なる者であり耶蘇の神の子であつて、凡人が之に倣ふのは容易でないが、他人の過ちを幾度も赦し得る寛大な者が聽て人心を支配し得るのである。漢の高祖が、天下を一統した

後群臣を集めて「朕が天下を得た譯と、項羽が破れた譯は、何う云ふ理由であるか」と問ふた。或者は「陛下は攻略した土地を部下に分ち與へ給ふたが、項羽は有功の將を殺し、有能の臣を疑ひ攻略した地を部下に與へないから人心に背かれた。之が得失の差であります」と答へた。高祖は「汝等は一を知つて二を知らぬ。思ふに、謀籌を帷幕に運うして勝を千里の外に決する事は張良に如かず、國を治め民を愛し糧道を撃へる事は蕭何に優らず、百萬の軍を聯ねて戦へば勝ち、攻むれば取る戰略は韓信に及ばぬ。而して、之等の人傑を用ひ、その長を採り短を赦して充分活動させたので、天下は朕の掌裡に歸した。然るに項羽は、拔山蓋世の勇者であつたが、一人の賢臣茫増をも疑つて用ひず、遂に朕の爲に亡ぼされた。即ち人君たる者は、寛大の心を以て、克く人を觀、人を擧げ用ひねばならぬ」と述べた。人間は、誰でも過失あるを免れぬが、一旦の過失を以て、有能の士を社會から葬つてはならぬ。這般の選舉で、多數の名士が囹圄に呻吟して居り中には再犯の爲め當局の心證を害し、識者から見放されて居る者もあるが、罪を惡んで人を惡まず、過ちを改むれば、再び社會に迎へて活動させる雅量を示して欲しい。

小兒と語る心持

耶蘇は小兒を愛し、小兒の如き心でなくては、神の國に入るを得ぬと曰つた。大人が聞いて、詰らぬと思ふ話を、小兒は喜んで聴く。同じ話を繰返し繰返し話しても、其都度興味を以つて聴いて呉れる。若し「そんな話なら、僕知つてらあ。もつと異つた話を話してお呉れよ」といふ兒があつたら、それは小兒の純真さを失つて居る兒であらう。小兒を愛した耶蘇の教訓が記録されてある聖書には、荒唐無稽と思はれるお伽話みたいな事が澤山書いてある。學問のある人が讀めば、下らぬ事だと思ふ點が澤山ある。然し、耶蘇が相手にした人間は、學者やパリサイ人ではなく、純真な小兒の如き無智無學の農民や漁夫たちであつた。聖書が世界の隅々まで行渡り、多勢の人間に讀まれて居る理由は、六ヶしい理屈が書いてある爲ではなく、小兒の如き無智無學の人間にも解る様に、それ等の人が合點出来る話を書いてあるからだ。佛教の教典は、誰にも讀める譯でなく、お經を讀むのが商賣の僧侶にも、其意味が解らぬ程、六ヶしいのである。而して、

一般俗衆に信ぜられて居るのは、その六ヶしい哲學的の教典でなく、實はお伽話みたいな方便の比喩話ばかりである。そこで、筆者の云はんと欲する處は、大衆を相手に語る場合には、小兒と語る心持で、下らぬ話でも下らぬと思はずに、相手に合點が出来る様に話すべきである——と感じた儘を記す。

祈願と感應

聖書には「求めよ、さらば與へられん。門を叩けよ、さらば開かれん。汝等の内、其子パンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。汝等は惡き者ながら、善き賜を其子等に與ふるを知る況して天に在す汝等の父は求むる者に善き物を賜はらざらんや」とあるが、無より有を生ぜずとは物理の法則であつて、幾ら熱心に祈つた處で、故なく空中樓閣的の望みが叶ふ筈がない——と、若い時代には誰しも云ふであらう。然し、段々歳をとつて錯雜した人生に處する經驗を積むに従つて常識的の理屈や科學の法則を超越した神祕な運命が、人生の大事を支配する事を悟

り其運命を好轉する爲に、神祕な力に對し祈願する氣持ちになるものである。之は、必ずしも愚夫愚婦の迷信とは云へぬ。現に日露戰役當時の滿洲軍總參謀長兒玉大將のやうな智識經驗の完備した偉い人でさへ重大な困難に際しては合掌祈願を捧げずに居れなかつたと云ふし、聯合艦隊の名參謀秋山中佐の如き卓絶した智者でも、人力以外の神祕に信賴した由であり、斯かる例は枚擧に遑ないが、若し祈願に對して何等の感應もないとすれば夫れ等の偉い人達が無益の迷信に陥る筈はないから、必ず何等かの感應があつたものと信じて好いであらう。

我國で、一番多く祀られて居る神社は、諏訪明神であると云はれ、最も多い佛閣は觀音堂であると云はれて居る。觀音堂とは、妙法蓮華經普門品第廿五に説いてある觀世音菩薩を祀つたもので此菩薩を信仰して觀音力を念する者は、火中に墜落しても火に焼かれず、水中に漂流しても水に溺れず、賊徒に圍繞されても害を受けず、呪咀毒藥等の害も受けず、惡獸に遇つても疾走せしめ其他困厄無量の苦が身に迫つても忽ち解決して、福德圓滿の功德を受けると説いてある。一休和尚は、若い頃觀音經を讀んで「荒唐無稽の迷信ぢや」と一笑に附されたが、晩年になつてから此經文を尊信され、朝夕念誦されたと云ひ、日蓮上人が龍の口に法難に斬首の刀が折れて處刑を

免れ得たのも「念彼觀音力、刀尋段々壞」とある觀音經の功德だと云はれて居る。

眼疾ある者には、太陽が二つに見へる事もあり、亦「幽靈の正體見たり枯尾花」と句にもある通り大抵の不思議は臆者の疑心暗鬼に過ぎまい。故に孔子は怪力亂神を説かず、菅原道眞は「心だに誠の道に叶ひなば、祈らぬとても神や護らん」と曰つたが、さりとして、世の中に理外の理が絶対にないと斷言は出來ぬ。要は祈願者の一心如何にありと信ずる。

逆境の恩寵

人間は、餘り境遇が好くて、缺くる處がないと、兎角傲慢になり易く、人情に薄い者が多いようである。財産があつても、身體が弱いとか、何か缺くる處のある者は、所謂同病相憐むの情有あり、他人に對して思ひ遣りが深い。使徒パウロは「我恩寵足れり。蓋し我能力には限りがあり限りある自力を頼む者より、我能力の弱きを知る者が、神の恩寵を多く受くる」と語つて居るのである。

西洋の諺に「幸運は單獨で訪れるが、不幸は友を連れて来る」とある通り、好い事は滅多に重復せぬが、悪い事は次から次へと重ねて起るものである。悪いと承知の上で行ひ、酬ひを受ける事は仕方ないが、運の悪い時には、好かれると思つてした事も悪結果を招き、或は豫期せざりし災難が起つたりするので、終には何うして好いか分らなくなり、自暴自棄に陥り易いものである。斯かる際、自暴自棄に陥れば、再び回復する事が容易でなく、人生の廢物となるが、靜かに運命を觀じて、信ずる處の神佛に祈り、世相の推移を待てば、時に禍が轉じて福となる事があり、以前と異つた方面で、甦生の喜びを見る事もあるから、逆運の時には、焦らす慌てずに、精神修養に努めるのが何よりである。逆境の經驗なき人間は、温室の花と同じく、荒い風に遇へば直ぐ萎れるが、逆境を耐忍んで、轉禍爲福の幸運を得た者は、恰も雪に耐れた梅が、色も香も潔い花を開いた様に見事で、所講苦勞人と稱せられて、世間から尊敬されるのである。天が將に大任を斯人に降さんとするや、先づ艱難辛苦を與へて、其心身を鍊磨せしむると、古語にあるが、古來歴史上の大人物は、概ね逆境の經驗者である。織田信長の如きは天性の偉人で苦勞を知らぬから、我儘であつた爲め、遂に途中で倒れたが、苦勞人の秀吉は、成功するに従つて益々大任に耐へた。

逆運の者は、天道是か非かなど云つて天を恨むが、天日にも晴曇があり、個人に付き切つて居れぬから、逆運の時は克難耐忍の修養に努めて、天日の循環を待つより仕方ないのである。若し神佛在さずんば即ち止む。世に神佛在さば、至誠は必ず顯揚せん事を信じ、我等は艱苦に喘ぎ乍らも、尙逆境に倒れざる恩寵を感謝しつゝ、理想境の彼岸へ進み行かんと欲する。

宗教と戒律

佛教には、種々の戒律があつて僧侶は出家と稱し、現世的一切の慾望を斷念する修養を必要としたのであるが、此禁斷は、一向宗の門徒に俺つて先づ廢され、今では「葷酒山門に入るを許さず」の禪寺にさへ、庫裏の軒に大黒さんの紅褌を干し兼ねぬのである。

故に、佛教信者は、法事の膳に生臭さへ供へねば、石塔に赤字の戒名を記した信女が亦胎もうと、單に世間の口が煩い丈で、佛罰を蒙るものとは考へて居らぬらしい。

然るに、基督教徒は、聖書の何頁にも「汝等酒を呑み煙草を喫ふ勿れ」と書いてないに關せず

禁酒禁煙はクリスチャンたる特權の如くさへ考へられて居る。

或團體が洋行した際、巴里での晩餐會に只一人飲酒せぬ者に對し主催者が怪んで質した處「基督教だから」と答へたので、主催者は「我々佛蘭西人は先祖代々の基督教徒だが、御覽の通り皆飲酒して居る」と呵々大笑した由である。

只、英國からメーフラワー號で新大陸へ移住した清教徒の一派は禁慾を嚴重に守つた。而して我國の耶蘇教は、此米國から傳來した爲め、戒律が嚴重なものであらう。這般、人事録に「基督教信者にして」と、筆者の事が記してあるのを見た一知人が「へえ、そうでしたか」と感歎之を久しうするので、前記の話を語つて其迷妄を解いた。呵々。

理想境彼岸

人間には理想があつて、此理想實現の爲め、艱苦缺乏を耐忍んで努力しつゝあるのである。即ち、不斷の辛抱努力は、理想の彼岸へ到達する爲である。理想の彼岸とは、人間が翔望渴仰する

目的の境地を實現する事である。永い冬の間、風雪に虚げられ乍らも、頓て花咲き鳥歌ふ暖い春が訪れると思へばこそ、人々の心は豊かである。眞夏の炎暑に喘ぎ乍らも、頓て天高く氣爽かな秋が來ると思へばこそ、人々は腋下自ら涼風を生ずる思ひで、自然の迫害を辛抱するのである。而して、春三月の中甸ともなれば、寒氣漸く去つて、溫和な氣候になるので「やれやれ、理想の彼岸に到達した」と云ふ氣がするから、之を氣候の彼岸と云ふ。又、佛教徒が理想とする涅槃に入る修養會、即ち彼岸會を修し、畏くも皇室に於かせられて、皇祖皇宗の神靈を祀らせ給ひ、國民も物故者の追悼會を營むなど、此週間に相應しき行事である。さて、今年の春は、漸く彼岸に到達したが、我等の理想は前途遼遠であつて、尙幾多風雪の難を耐忍ばねばならぬ事であらう。

輪廻の理法

佛教では、三世輪廻と稱して、因果の法則を根本思想とし、過去現在及び未來の三世が、轉々輪廻する事、恰も車輪の廻るが如くであると説いて居る。

之に就て、那先比丘經は、那先比丘と彌蘭王と問答の形式で、此思想を單的に云ひ現はし、我等の自問自答に資する處がある。

彌蘭王「何故に一切の人々は等しくないか。何故に人間に長命と短命と、多病と小病とがあるか。何故に生れ乍ら富者と貧者があり、何故に高貴と下賤があり、何故に頭腦の明敏と暗愚があるか」

此質問は、人間誰でも懐く處の人生に對する疑問であつて、彌蘭王は、我等の問はんと慾する處を問ふて居る。

那先比丘は、此問に答へずして「何故に一切の果實は等しくないか。酸いものと、甘いものと、辛いものと、甘いものとあるのは何故であるか」と反問した。

彌蘭王「それは種子が異ふからである。種が異へば樹も異ひ、其樹の結ぶ果實も異ふ。」

比丘「種から、根や莖や葉や果實を生じ、斯くて種子を得る。而して此種子から、根、莖、葉及び果實を生じて、種子を得る。同じ事が限りなく繰返される如く人間も轉々再生するのである」

彌蘭王「再生した我は、同一の我か。それとも異つた我か」

比丘「子供であつた我も、成人した我も同一の我である。前世の我も、現世の我も、未來の我も、同一の我である。夜通し燃へて居る燈火が、宵に見る時と、夜半に見る時と、曉明に見る時と、焰が異つて見へても、實は同じものであるのと同様である」。此問答に依つて、善因善果、惡因惡果、積善の家に餘慶あり、積惡の家に餘殃多しと云ふ佛說輪廻の理法が、首肯されるのである。

因果應報說

佛教では「積善の家に餘慶あり積惡の家に餘殃あり」と説き、儒教では「天は善者に酬ゆるに福を以てし、不善者に酬ゆるに禍を以てす」と説いて居るが、孔子の弟子が此説に疑惑を懷いて「子は徳を積み義を憶ひ、善を行ふこと久しきに關せず、何故斯く困窮されるのですか」と問ふた。孔子は、之に答へて「仁者必ずしも世間に信用されるとは限らず、時には其反對の場合もあ

る。故に伯夷叔齊は餓死した。智者亦然り、故に比干は誅を諫めて殺された。忠臣も亦然り、故に閔龍逢は桀を諫めて殺された。其他千歳の後に英名を傳へられる博學深謀の士も時に遇はずに困窮した者が多く、不遇は獨り孔丘ばかりでない」と論じた。「估らんかな、賣らん哉。吾は對價を待つ者なり」とは、孔子の言であるが、單なる現世榮華に飽くだけなら、盜竊にも行へた。孔子は、もつと高い値でなくては賣らぬと矜持して、清貧の窮乏に耐へたのである。

因果應報説では、前世、現世、來世の三世に渡らないと、完全な説明がつかぬ。即ち「現世の好遇は前世の善因果報であり、現世の善因は來世で善果が報ひられるから、前世惡因の結果として現世では不遇でも、自暴自棄に陥らずに善因を積めば必ず來世で善果を結ぶ。其反對に現世で惡因を積めば、例へ現世の懲戒は免れても、來世に恐ろしい惡果が報ゆる」と説くのである。此思想を基礎にして、運命定業の觀念が生じ、人間は生れ乍らにして、賢愚強弱貧富榮枯の運命が定まつて居る、と信ぜられる事になつたのである。例へば、米倉の鼠は米を喰ふが粟倉の鼠は如何に強くも粟しか喰へぬ。人間も其通りで、富家に生るれば、低能者でも安樂に生活出来るが、貧家の子弟は、如何に優秀でも生活難に喘ぎ、啄木の歌にもある通り「働けど働けどひとり我生

活、樂にならざりちつと手を見る」の歎を免れ難い。けれども、斯かる半面的觀念は理論としての價值がなく、學者の一笑に附せられて居るが、只理屈だけで割切れぬ不可思議な運命に苛め抜かれた世人の多くは、心の一隅に於て、常に迷信的運命觀を否定し得ないやうである。

報謝と供養

同行二人、と書いた菅の小笠に笈を背負ふた七八歳の少女が、門口に立つていたいけな聲を張り上げ「順禮に御報謝！」と訪ふ。これは「阿波の鳴門」の芝居で見える情景であるが、茲で御報謝と云ふのは「佛思に對し感謝の爲め若干の米錢を供養して下さい」と云ふ意味である。佛語に謂ふ供養とは「佛に導し財と行とを供へ崇めて攝養する所ある」を稱し報恩心（感謝する精神）功德心（萬物愛護の精神）及び慈悲心（弱者を憐れみ慈む精神）の三心から成立して居る。故に報謝の念を離れた施しは單なる慈善であつて、勞役を厭ふ怠惰者を養ふと云ふ非難を受ける事にもなり、或は名聞や功利心の爲にするとの非難を受ける事にもなり易いのである。報謝の爲め、

愛護の爲め、慈悲の爲にする供養は、與へる者にも義務を果した後のやうな、爽快な感じを起させ、受けた者の心にも卑屈な感じは起させず、共に宏大無邊の功德を受ける。故に七歳や八歳の幼い順禮でも、當然の權利なるかの如く「御報謝」を勸進し得るのであり、亦報謝の念を物質にまで及ぼして、針供養糸供養の催しも意義を生ずるのである。

「燈火のをぐらき下に亡き母は短き糸もつなき給ひし」信綱

死者への追善

我國古來の習俗では、冠婚葬の三禮を重んじ、身分相應の祝祭を執り行ふのであるが、近來、生活改善と稱して、之を簡略する者があり、中には、親の葬式さへ満足にせず、世間に後指をさゝれても意に介せぬ者のあるのは、果して生活改善の本旨に叶ふものであらうか。疑ひなきを得ぬ。

曾て、有名な政治家の葬儀に際して、某週刊新聞社員が、廣告の勧誘に行つた處、にべもなく

拒絶されたので、故人か生前に受けて居た非難を、事新しく掲げた爲め遺族を憤慨せしめ、重大問題を惹起した事がある。

之などは、理非如何は別として死者の追善と云ふ意味で、快く喜捨した方が、無難であつたと云はれて居る。

田舎では、豪家の婚禮に際して村中に挨拶する習慣があり、之を簡略した爲め、消防の筒先で水をブチ込まれた例もあるが、葬式の際は、特に追善供養の意味で、貧しい者を恤す事は、富家の遺族として強ち無意味でないと思ふ。

人間生前に、もつと善事を行ひ度いと思ひ乍らも、心に任せぬ場合が多い。故に、遺産を繼承する者は、故人の遺志を體して、能ふ限りの追善をするのが、何よりもの供養であると思ふ。

盂蘭盆の法要

お釋迦さまの高弟で、如是我聞のお經を書いた目蓮尊者の母親が何うした譯か地獄に墜ちて苦

難を受けて居るのを、孝心深き尊者が見て、贖罪の爲め追善の大供養を行ひ、衆僧を招いて懇な
法要を營んだ。此功德に依つて、母親は罪を赦され、極樂往生を遂げたと云ふ佛教の傳説から、
孟蘭盆會の民俗が印度に生じ、それが我國に傳はつて、正月と並稱される重要行事になつた。昔
から慣行では七月十三日の晩、門火を焚いて精靈を迎へ、十五日まで毎日讀經供養を行つて冥福
を祈り、十六日の未明に種々の供物と共に葶殼製の船に載せて西方淨土へ送る事になつて居る。
陰曆が廢止されてから、東京は陽曆の七月に行ひ、信州は一ヶ月遅れの陽曆八月に行ひ、中國九
州方面では依然陰曆七月に行ふ等、各地區々になつたのと、明治以來の教育が智育に偏して、古
來からの民俗風習を迷信的だと輕蔑する思想を生じた爲め、孟蘭盆法要も五節句其他の歳事と同
様に、漸次衰退の傾向を辿りつゝ、斯くては祖先崇拜の淳風美俗の涵養に重大なる影響を及
ぼすであらうと識者の憂慮する處である。

化けて出る心理

女子と小人は養ひ難く、之を近づぐれば則ち押れ、之を遠ざくれば則ち恨む。叱れば泣くし、

殺せば化けて出る……と云はれて居る。

強い者は、非業に死んでも、滅多には化けて出ぬが、女子小人の弱者は、化けて出る。それは
思ふ存分に、實力が發揮出來ぬからであらう。況んや弱い者が、欺し討ちされたりすれば、死ん
でも死に切れぬ怨恨が遺るのも無理はない。故に強者と弱者との争ひには、強者は堂々の態度で
弱者に充分の機會を與へる襟度を示し、然る上で、優勝劣敗の結果に至つたのなら、弱者と雖も
化けて出る程の怨恨は遺るまい。

不祀の鬼

我國で鬼と云へば、地獄繪圖にある通り、頭に角を二本生やして虎の皮の褌なんか締め、鐵
の棒を持った兇惡な姿を思ふが、支那で云ふ鬼は、死して祀られざる人間の惡靈であつて、詭曲
舟辨慶に出て來る平の知盛の幽靈の如きものを云ふらしい。

人間が死んで、其靈は何處へ行くか。佛教に地獄極樂があり、基督教に天國と地獄があり、其

他宗教に依つて種々の形式や比喩で説かれては居るが、科學的智識を有する現代人の誰にでも、
信せられると云ふ譯に行かぬ。

さりとて、斯ほどの我等人間が蠟燭の火が消へた様に、古自動車のエンジンが毀れた様な、そ
んな果敢ない消滅をするとは、何うしても考へられぬ。

三世輪廻の理法に依つても、子孫が連綿と續くのでなければ、種子と樹木、卵と鶏の遁還論法
的轉々再生の説明はつかぬ。

故に、支那人の所謂祀られざる靈魂が鬼となると云ふ觀念も、滿更荒唐無稽ではないと思ふ。

即ち人間の肉體は亡んでも、其靈魂は、子孫と共に永遠の生を享け、其遺業に依つて不朽の名
を傳へるが、子孫なく功業なき者は所謂不祀の鬼と云ふべきである。されば、力ある者は、全人
類を子孫として不朽の名を傳ふべく、力弱き者も、直系の子孫を養つて靈魂の祀りを絶やさぬ事
である。

菩薩の行

國家の爲め、人類の爲め、華々しく戦つて、天皇陛下萬歳を叫び乍ら討死する。何と云ふ勇まし
さであらう。然し、特務兵に召されて、敵陣の方角さへ分らぬ後方で、彈丸や食糧を運ぶのも、
近代戦に於ては最も必要な重責であつて、一軍の安危を擔ふ功勞は、第一線勤務の決死隊と同じ
事である。觀世音菩薩は、佛身であり乍ら衆生を親します方便の爲め、佛の次に位する菩薩身を
現じて、人間の苦惱を濟度し給ふと云ふ。故に此菩薩を信仰する者が、一番多い所以である。

「俺程の人物が、あんな連中と肩を並べられるか」など云ふのは淺ましい凡夫の煩惱で、所謂獨
り善がりの利己主義者である。椽の下の方持ちに甘んずる程の人物は、或意味に於て菩薩行を履
修する悟道者とも云へる。

田螺の干物

或有徳者が死んで、極樂淨土へ行き、諸所見物すると、一つの堂内に、木耳が山の様に積んであるので、案内の菩薩に「之は何うするのですか」と尋ねた。

菩薩は咳一咳して「之は木耳ではない。善事を聽いて感心しても身に之を行はなかつた者が、死後身體は地獄へ墮ち、耳だけ極樂に來たのである。又傍に數の子の様なものがあるのは、口に善事を説き乍ら、身に惡事を行つた者の舌である」と説いた（鳩翁道話）。我等の如く、眼に聖典を讀み、筆に道德を記し乍ら、身體は常に不良を行ふ者が死んだら、田螺の干物みたいな眼球と、萎びた右の手首だけ極樂へ行く事であらう。

迷信か正信か

「心だに誠の道に叶ひなば、祈らぬとても神や護らむ」の古歌は菅公の作と傳へられるが、若し

此の歌の通りなら、菅公ほどの忠誠な偉人が、冤罪を蒙つて流刑に處られるのを、正しい神佛の加護が其生前になぜなかつたか。而して其死後に於て、天滿自在天神と祭祀されたのは、其靈魂が雷神になつて、藤原時平の一黨を電撃したからだ、巷説に傳へられる通りならば、迷信の潜在意識が正信を超える威力を認めまい。孔子は「怪力亂神を説かず」と曰ひ、現在の富貴は浮雲の如しと説いたが、それは聖人君子の心であつて、後の百よりも今の五十を望む凡俗に取つては、生前に於て御利益の多かりそうな迷信に傾くのも、免れ難い次第である。思ふに、如何なる正統の宗教と雖も、若手の迷信を伴はぬものはあるまい。例へば基督教の聖書を見ても、耶蘇降誕の始めから死後の復活及び使徒の傳道に至るまで皆悉く奇蹟づくめであり、佛教にしても、靈妙不可思議の方便が説かれて居る。若し之れなくんば、如何なる名僧智識と雖も、衆生の信服は困難であつたらう。

西洋人と死

西洋のお伽話に、或村が謀叛に與じた廢で、誰か代表者を犯人として出さねばならぬ時、平常

死に度いくと口癖に云つて居る老人の處へ、村長が行つて「村の爲だから」と頼むと、其人は吃驚して「飛んでもない。私の死に度いと云ふのは、壽命が来て天國へ行き度いので、殺され度いと云ふのではない」と斷つた。其處で村中を頼んで廻つたが、誰一人志願者はなかつた。とある。西洋人には、死を神の罰とする思想があり、自殺を神への冒瀆と考へ、演劇でも死の場面はカツトする位だから、維新當時泉州堺で土佐藩士の死刑を強要した佛蘭西領事官に、妙國寺で廿餘名が切腹する現場へ立會はせた處、四五名切腹するのを見て座に居た堪らず逃げ出したので、残りの十餘名は助命されたと云ふ事もある。日本にも「命あつての物種」とか「死んで花實が咲くものか」とか「死め者貧乏」などの俚諺があつて、そう猥りに死に度がる譯ではないが、西洋人の如く極端に死を忌み恐れはせぬ様である。

日本人と死

近松の心中ものに「來世ば蓮の半座を分けて」と現世で添へぬ相愛の男女が、來世へ急ぐと云ふ心理を描いて居る通り、日本人は死の恐怖を超越して、寧ろ之れを讚美さへもして居るが、此思想は佛教の無常觀、極樂往生の信仰に影響を受けて居ると云はれる。さて、茲まで考へると、

人間の靈魂は不滅か否かの問題になるが筆者は、斷乎として靈魂不滅説を信する者である。人間の魂が、蠟燭の火の如く燃へて居る間だけのもので、吹き消されると同時に寂滅するものとするば、それこそ生きて居る間は出来るだけの快樂を追求し、後は野となれ山となれだが、それでは餘りに情ないではないか。尤も、極樂からの通信も、地獄から歸つて來た者もないが、靈魂の不滅を信じ、未來の光明を望みつゝ死ぬる者は、則ち極樂往生であり、後も先もなく、行きあたりばつたり倒れる者は、犬や猫と同じ斃死であり、現世の妄執斷ち難く、死んでも死に切れぬやうな者は、則ち地獄の苦難である。

地藏と閻魔

地藏菩薩は、道端に立つて大衆を化導し給ひ、賽の河原に於ては、惡鬼に苛責される兒童を救護なし給ふ慈悲圓滿の佛様である。閻魔大王は、地獄世界を支配し給ひ、亡者の刑罰を裁判し給ふだけに、一見恐怖を催さしめる嚇念の形相物凄いお姿である。「借りる時の地藏顔、返す時の

閻魔顔」は未だ好い方。甚だしきは「借りたのは貰つたものと思ひます。現金ならば外で買ひます」と云ふ横着者が多いから「借す時の閻魔顔、返して貰ふ時の地藏顔」でなくてはならぬ。或狂歌師が、寺院の境内へ花見に行き、住職から席を借りたが、歸る時黙つて縁側に置いて行つたので、住職が禮儀を知らぬ奴だとブツブツ云ひ乍ら見ると、傍に短冊が置いてある。そして「ここにこと借りる時には地藏顔、返す時には一寸縁まで」と狂歌一首を認めてあつたそう。

牛に牽かれて

「牛に牽かれて善光寺詣り」の傳説は、餘りにも名高く、此傳説に誘はれて、善光寺詣りする者も尠くないであらう。凡て、動機誘引と云ふものは、そよ吹く風に秋の枯葉が散る如く、大きな役目をするものである。牛に牽かれての傳説は、今なら新聞の三面記事に過ぎず、一笑に附されるかも知れぬが、昔の宗教傳導者は、之を牽強附會して宣傳の材料にした處に、頭腦の好さと苦心の跡が窺はれる。それに比べて、拱手安居する現世の僧侶は、何と云ふ無能で不熱心な罰當り

であらう。佛教が衰退して、邪教がはびこるのも無理はないと思ふ。筆者の舊作「牛に牽かれて善光寺詣り、ぬしに牽かれて此苦勞」の都々逸は、二三の案内記に採録されて居るが、新年の賀状にも「布引の牛に牽かれて善き光り、己がこころにてらしてぞ觀む」と記し、善光寺様お膝下の住民たる佛恩報謝の意味で、聊か觀光宣傳のお手傳ひをしたが、僧侶を始め市民一同心を合せ、機會ある毎に良き案内役を努めたいものである。

運縁の不思議

人間と云ふものは、大切な事ほど意の儘にならず、不可思議な運命に翻弄されるものだ。第一に、斯んな子供が欲しいと思つても、勝手に生む譯に行かず、生き度くても死に、死に度くても死ねぬ場合があるやうに、大切な生死の問題は運命任せである。次に、縁であるが、これも双六の賽と同じく、思ふやうに行かぬもので、一方から申込みを受けて調査に日を費し、漸く承諾すると先様では待ち切れず、他へ婚約が撃つたと云ふ話もあり、目出度く四海波を謳つても、圓く

納まらぬ事があり、破れ銅に綴ち蓋で結構永持ちするのもあつて、運と縁の不思議さは、人力で測り難い。故に、帝王の権力を以てしても、賽の目は思ふに任せず、只逆運を避け幸福を望み、諦めと希望とを交錯させて、天意のままに世を渡るのが、人生の常である。

福神舞ひ込む

歳末の三十一日に、木彫美術界の大家吉田芳明先生から、はがきで「手製の福もちを送つた。何卒御笑味下さい」と云ふ案内と共に一つの木箱が到来した。芳明先生の作品なら、一寸したものでも數十金数百金で取引きされて居るが、幾ら大家のお手製とは云へ、大福もちとは心得ぬと審かり乍ら、箱を開けると、成程食料品を入れる竹籠があつた。

さては風味の佳い大福もちを作つたから味はへとの御好意かと思ひ乍ら、取出して見ると餘りに軽く、竹籠の中には、詰めもので包装した桐箱が出た。「占めたつ。木彫の大福もちに違ひない」と、胸を踊らせ乍ら、桐箱を開けると、紅白の絹服紗に包んだ木彫の大黒天像が出た。飴の

中からおたやん、處ではなく大福もちの包みから大黒天が飛び出したので、これはこれとはばかり早速斯道の愛好家に見て貰ふと、時價三百圓を下らず、捨て賣りにしても、百五十圓はカンカンだとの話。全く夢見る心地で、思はず頬つぺたを捻つて見た事である。何と諸君。之が大晦日の話ですぞ。夏外套を公設質屋へ持込んで餅代を工面しようと云ふ世話場の最中へ、思ひ掛けぬ福の神が舞ひ込んだので、貧乏神が跣足で裏口から飛び出すと云ふ騒ぎになつた曾我廼家の悲喜劇其まゝの状景を御想像下さい。

文學と宗教

社會生活の望みを失つた薄幸の人間に對する慰めが二つある。其一つは文學で、想像力の強い青年子女に取つて憧れの世界を髮髻せしむる小説や詩は、現在の境遇的苦惱を忘るゝに、何よりの魔酔藥である。然し、文學には希望が乏しい。それは夢の世界に咲いた花であり現實を離れた空想の幻影に過ぎぬから、ほんの一時の慰めである。宗教も、左翼理論家の云ふ通り矢張り一種

の魔酔薬かも知れぬがそれには永生の希望がある。淺學非才の我等如きが、文學と宗教を比較し之に大膽な獨斷を加へる意思是毛頭ないが、夢多き少年時代、文學書を耽讀した爲め中學で落第した事さへあり、其後一時は敬虔なる耶蘇教徒であつた筆者は、自己の乏しい體驗から、只今讀んだ或薄幸な娘の心境告白を通して、甚だ概念的ながら、聊か所感を記して見た。廣い意味から見れば、宗教も亦文學の一部であつて、佛教は釋迦及び其弟子等の創作であり、基督教は耶蘇及び其使徒の創作であるかも知れぬが、然し、之を信する者は、如何なる罪人であらうと、如何なる薄幸な不具者であらうと必ず希望と光明が興へられる事に依つて、ゲーテ、シルレル、其他如何なる大文豪の創作より、更に大ひなる慰安を、人類にもたらす處の大創作であると思ふ。亦、或種の文學は、信仰を誘導する場合がある。筆者が耶蘇教を信するに至つた導引も、徳富蘆花の「自然と人生」であつた。「さまよへる者よ、立ち歸りて父なるみ神のみ前に伏し、誠の悔をば云ひ現はせ」と云ふ讚美歌に依つて、幾多の迷へる靈が救濟され、亦英米では「花よりも愛でし我兒よ」の歌を聽き、放浪の旅から母の懷へ戻る子が多い由で、心の琴線に觸るゝ文學詩歌は宗教への善き導師となるのである。

文學者と壽命

讀賣新聞「一日一題」に、式場博士の「文學者と壽命」と題する一文は、首肯すべき卓説である。三十餘歳で夭折した樗牛博士を始め、明治、大正、昭和を通じて文壇有爲の士が早世の原因は、元より一概には云へぬけれど、式場博士の指摘した如く、日常生活が不規則で非健康的で、稍もすれば感情の赴く儘に、放縱に流れ易い爲かと思はれる。従來、文學者と云へば、天才的素質を要すると考へられた。従つて青年時代に名を成さねば見込みがないとされた。故に文學志望者は歩一步前進する事を思はず、何か名作を發表して一舉に名を知られようと焦る者が多く、勢ひ生活が不規則に流れ易くなる。然し、社會組織の固定した時代には、天才と雖も歩一步づゝ堅實に進まねばならぬ。況や天才ならぬ通常人に於てをやだ。最近「風の中の子供」や「子供の四季」等の作品中、坪田讓治と云ふ名か文壇に知られて來たが、同君は筆者が早稻田の豫科に入學した頃の上級生であつたのに、仲々卒業せず、悠々として肺病を養ひ乍ら在學し、八年掛りで漸

く卒業したが、其後も永い間名が聞えず五十餘歳になつて、始めて文名を謳はれるに至つた。文壇に斯かる例は稀有の由であるが、これからの時代は矢張歩一步宛堅實に進む者が勝つであらう。

流通物の不安定

明治初期の混亂期に、美術品は鑑賞家がなくして價值を失つた時代があつた。其當時、有名の畫家が描いた繪畫等も二足三文に評價されて、金屏風の如きは其金箔を得る爲め焼却して金を回收したと傳へられる。

又、今度の支那事變から大東亞戰爭に際しても、金銀の製品や、銅鐵までも回收された爲め、美術的價值ある物も、其材料が戰爭に必要な資材となつた爲め、滅茶苦茶にされた。本來金銀銅鐵を以て細工するのは、一面に於て永久保全の意味が含まれて居るのだが、此場合には、反つて逆効果を生じた結果になる。

墓地の裝飾品の如きも、保全の爲め銅鐵等が用ひてであると、反つて盜難等に遭つて失はれ易

い。故に永久保全の目的からなら、不融通性の物を用ひた方が安全である。

金製品は腐蝕せず、永久保全に適するが、流通性がある爲め、直ぐ地金に還元されて、其形態を失ひ易い。これは金製品だから、つぶしにしても何程の價值があると云つて、鑑定眼なき者の間にも取引され、結局つぶしの値段で賣買される事が多い。故に萬一の要意ならば、他に貯蓄等の方法を講じた方が良く、永久保全の目的なら、別の素材を用ふるが賢明であり、又單に光澤を愛するだけなら、米國人の如く鍍金を用ふるに如かぬ。

變遷への要意

生々流轉の世相は、桑田變じて蒼海の譬があり、殊に變遷の激しい非常時に於ては、特に心の要意を怠つてはならぬ。先年、徳川義親侯が墓地を整理した處、大納言宗春卿母堂の棺に一枚の平石が置かれ、其石に左の如き假名文字が刻まれてあつた。

「このしたは、はかなり。よろしやせらるべし」

當時、尾州家と云へば、徳川御三家の一つで飛ぶ鳥も落す勢ひであつたらうが、流石に籠屋大納言と呼ばれた程の苦勞人宗春卿は、將來時世の變遷を考慮して、母堂の遺骨が心なき人々の土足に踏躪されぬやうに、斯くはいみじくも要意したのであらう。時運に乗る者が、立派な邸宅を建て、子孫永遠の住居と定めても何代続くか。筆者は田所町を通る毎に、舊信銀頭取の大邸宅の跡を見て、箕子麥愁の歎を禁じ得ない。(信銀は破産状態となり、頭取は長野市を去つた)

羊の歎き

羊が、神様の許へ行つて「私共には何故武器を興へて下さらぬのですか。角はあつても裝飾みたいなもので、鬭争の役に立たぬし、牙はあつても草しか喰べられませんので、狼や蛇にさへ脅かされねばなりません」と歎き訴へた。神様が「然らば汝に狼の鋭い牙と、蛇の猛毒とを興へよう」と仰せられたので、羊は慄へ上つて驚き「いゝえ、狼や蛇のように皆から恐れ嫌はれるのは彼等に脅かされるよりも厭な事です」と武器を貰ふ事を断念した。神様は之を憐み、武器なき羊

の平和を人間に命じて保護せしめ給ふのであると。

必要は生産の母

ウォーターマンと云ふ万年筆は、インクの出工合が好いので特許を得て居る高級品であるが、それは米國の保險外交員ウォーターマン君が、万年筆のインクで大切な書類を汚した爲め、よき万年筆を求めたが得られぬので、自ら苦心の弊果發明したものである。英國のホブキンス君は、ペン先の腐れ易いのに困り、金ペンの先にイリヂウムを附着する事を發明して、先づ自己の必要を充たし、而して人類同胞に便益を供し乍ら莫大な金儲けをした。必要は發明の母と云ふが、凡て求めざるに與へられる事は極めて稀で、求めて而して工夫したものには必ず與へられて居る。

國號の由來

我國號は、天照皇大神の神勅に、豊葦瑞穂國とあるを始めとし、大倭又は秋津鳥などと稱され

其他大八島、敷島等數限りなくあるが、日本の語源は、萬葉集卷三に「日本の倭之國」とある冠詞に始まり、繼體天皇廿五年の條に「日本天皇」と百濟本紀に記されたのが、文書中最古のものである由。因に、英語のジャパンは、蒙古の忽必烈の軍事顧問たりしマルコポーロが、支那語の日本即ちジーベンを音譯した轉訛である。

執れば憂し

「執れば憂し執らねばものゝ數ならず、棄つべきものは弓矢なりけり」と古歌にある通り、選挙に携はれば、勝負の常として勢ひの赴く處、時に累を身邊に及ぼすの虞れなしとせず、さりとて危ふきに近寄らずと逃避すれば、同志から重んぜられず、政黨人たる亦難い哉である。

製糸と政治

せいしとせいぢとは濁音一字の異みであるが、共に國家的仕事であつて、多額の金を要し、榮枯

盛衰の著るしさを表示する。製糸工場の廢屋は、鬼の死骸と同じく處分に困り、政治家の落伍者は用ひ處がないに困ると云はれ、地方に宏大な土塀を圍らした構へで、ガランとした荒ら家があれば、問ふまでもなく、製糸家か政治家の末路を偲ばれるが、高利貸しの放蕩息子が投機と女狂ひで父祖積惡の遺産を蕩盡したのとは異り、地方の爲め國家の爲め、何か貢獻する處あつたのを、多とすべきである。萌へ出るも枯るゝも同じ野傍の草の、いづれか秋に運はゝ果つべきと歌はれる中にも、槿花一朝の榮は夕に餘韻を止めず、櫻花旬日の壽は散りて風情を残し、無常流轉の人生と云ひ乍ら、黄梁一炊の夢の中にも、醜芳邪正の區別は確然と認められる。

最後の仕上げ

新聞にした處で、適確な材料を調査して、經驗ある記者が才筆を振り、校正及び印刷も滞りなく完了しても、配達を怠れば紙屑に過ぎぬと同じく、何事も最後の仕上げが肝要である。百里の道は九十里が半であるから、急ぐべからずと曰つた家康でさへ、天下取りの仕上げ振りは餘り好

い手際ではなかつた。即ち、小牧山で勝ち、關ヶ原で勝つて大勢を決したが老齡の爲死後の事を案じて、大佛殿奉納の鐘の銘位の事に因縁を附け、寡婦孤兒を大阪城に攻め亡ぼした爲め三百年後の今日まで、國民的の指彈を受けて居る。小川元鐵相、内田前鐵相等は、政治家として最高の理想たる大臣となり、小川氏の如きは首相候補とまで目され乍ら、今一步と云ふ處で失敗したのは、百里の道を行くに、九十九里で倒れたと同様であり、郷里の高等學校建設資金に百萬圓寄附した内田氏が、十萬か二十萬の收賄で檢舉されたのは、人參飲んで首縊る類で、最後の仕上げが如何に困難なるかを例示するものである。

或誤診事件

某地で女學生が運動中足の脛を痛めた處、體操の教師が素人療法で手荒い事をした爲め一層痛めてから、外科病院へ擔ぎ込んだ。甲外科醫の診察では、脛の骨が二本折れて居るが、三週間すれば歩行出来るとして手當して、二週間後に退院、自宅から通はせた。其時、患者の同級生の父で

ある乙外科醫が診察して「接骨の際に一本斜に折れた骨が喰ひ違つて居るので、此儘にして置く」と跛足になるから、切開手術を要する」と語つた。患者の父は大いに驚いて第三の外科醫に診察を乞ふた。三度目に診察した丙外科醫は「脛の骨二本の内一本は折れて居らぬ。小さい方の一本は折れたが不思議に甘く接續して居る。此儘七週間安靜にして置け」と云つたので、甲乙外科醫の診断を告げた處、丙外科醫は「之は僕の推論ではない。レントゲン寫眞に依る診察だから間違ひない。甲乙醫のレントゲンは安物の劣等品であるが、本院のは高價なる優秀品で確だ」と語つた。更に、患者の父が「甲醫の診察では三週間で癒るとの事でしたが先生は七週間と仰しやいますか」と尋ねた處、丙醫は數冊の醫書を示して「何の本にも、七週間安靜を要すると書いてある。三週間位で歩行して、若し躓きでもすれば大變な事になる。甲醫が三週間と云ふ根據は何處にあるか。醫學書を見せて貰つたら好からう」と語つたので、今度は甲醫に三週間説の根據を見せて貰ひ度いと申込んで醫書を見せて貰つた處、何の書にも七週間安靜を要するとあつた。之に對する甲醫の辨解は「は、僕は三週間位で充分と思つて居たが、七週間の覺へ違ひだつたね。矢張り時には本も讀まんといかんねはつはつ……」何と云ふ無責任な態度であらうか。他人の

生命身體を預る醫師にも斯かる人がある。其處で、患者の父曰く「醫師も三年に一度位再試験の必要があると思ふね。今度の様な事は滅多にないかも知れんが、斯ふ云ふ例もあつたと云ふ事を新聞に書いて社會へ警告して呉れ給へ」と。此話は、決して長野市の事ではないが、某地で最近あつた實話であつて、然も甲醫は醫學博士の肩書を有し、乙醫は醫學士、丙醫も醫學博士、患者の父は帝大出身の社會的地位ある紳士と云つた顔振れだから、當事者の名譽を重じて氏名は遠慮して置くが、出鱈目の話ではない。

船鼠の早計

西洋の寓話に左の如き話がある。「或ボロ船の底に巢喰つてゐた鼠の一群があつた。或港の近くで暴風に遇ひ、般底に水が浸入して鼠の巢を濡らしたので、鼠共は吃驚して騒いだが、船長は浸水を防ぐ模様がな。こんな事では此船が沈没するに違ひないと、氣の早い鼠達は船を見切つて海中へ飛び込み、陸地を目掛けて泳ぎ出したが浪の爲に溺死した。然し船は沈没せずに無事で

港へ着いた。此寓話の教訓は、辛抱のない短見者を戒めたものである。船の作法は、海水が第二甲板を没せば、短艇に乗り移るか、浮袋を身に附けて海中に飛び込む事になつてゐる。然し、慌て者は浸水と同時に逃げ出すし、愚者は沈没するまでウロウロしてゐる。只、熟練せる水夫は、海水が第二甲板を没して、船を救助する見込みがなくなつてから、始めて悠々と船を去る。信州人の缺點は、事業が不振に陥ると直ぐ見切りを附けて、逸早く立退く癖である。辛抱心なき者に成功者は稀である。古河市兵衛翁が、成功の秘決として「運、鈍、根」と云つたのは、這般の教訓と一致してゐる。

鼠の第六感

或海員の談に、考朽の貨物船に乗つた處、鼠が多くて困つたので猫を貰つて來て捕せた。其後船が港に着いた際、澤山の鼠が船から海中へ飛び込み、陸地へ泳ぎ上るのを見て、猫を飼つた故だらうと語り合つて居ると、老功の水夫だけは「鼠が逃げ出したのは猫のせいぢやないぞ。今

に此船に何かなければ善いが」と獨語した。此言が讖を成して、船は出帆後暴風に遇ひ、其時鼠と一緒に下船した者以外は、猫と共に沈没して魚腹を肥した由である。鼠の如き小動物にも、本能的に危険を豫測し得る鋭敏な第六感があるのに、萬物の靈長を誇稱する人間が、反つて鈍感なのは何故であらうか。

利口馬鹿と馬鹿利口

支那の三國時代に、魏の曹操を赤壁の水戦で敗り、江南に吳國を興した孫權の二代目亮は、戰國に珍しいほど聰明な皇帝であつた。或時、侍臣に命じて蜜を持つて來させた處、鼠の糞が入つて居たので、大膳職の役人を呼んで調査した結果、剛直な役人を罪に陥す爲め、侍臣か途中で鼠の糞を蜜の中に入れた事が判つた。けれども横着な侍臣は白狀せぬので、亮は鼠の糞を二つに割つて見せ「若し始めから蜜に入つて居たものなら中まで濡れて居る筈だが、此糞は外だけ濡れて中は渴いて居るではないか」と詰問して、遂に侍臣の惡計を白狀させた。それ程聰明な亮である

が、帝王としての徳が薄く、餘り利口ぶるので心服されず、在位數年ならずして部下の將兵に叛かれ、帝位を保つ事が出来なかつた。世の中には、之に似た利口者が隨分ある。家柄も相當だし學歴もあり、世人から期待される地位を占めて仕事も出来るのに、内外の評判が悪く、上司が引立てようとすれば、誰かゞ邪魔をする。別段何處が良くないと云ふ譯でもないのに、周圍から反感を持たれる。それは餘り利口ぶつて、拔目なく立廻らうとするからであり、好漢惜むらくは兵法を知らず——と云はれる。斯かる人物が所謂利口馬鹿の標本であらう。

三國時代に、曹操の食客をして居た劉備玄徳は、腹の黒い曹操に「天下の英雄は貴君と僕との二人だらう」と云はれて、若し曹操がそんな風に見て居るならば危い事だと感じ、わざと臆病者を装つて油斷させ、曹操の許を逃げ出して自立したが、孔明を軍師に迎へるのに三顧の禮を盡し、徳を施して關羽張飛等の豪傑を幕下に集め、天下を三分して蜀漢皇帝と仰がれるに至つた。徳川幕府が、外様大名を取潰す政策を取つた際、加賀の前田侯が鼻毛を伸して愚を装ひ、百萬石を安んじたのは有名であるが、西洋にも四月一日に馬鹿の眞似をする風習があるのは、ゴサムの村民が誅罰を免れる爲め、愚行を演じて役人を呆れさせ、相手に出来ぬと赦されたに始まる

由である。

賢愚と損得

漢の高祖が「策謀を帷幕の内に運らし勝を千里の外に決するは張良に如かず、人民を愛撫し糧道を豊富にするは蕭何に及ばず。大軍を連ねて戦へば勝ち攻むれば取る兵法は韓信に及ばぬ」と自己の非力を悟り乍ら、之等の英雄を用ひて天下を一統したのは、實に寛宏なる王者の徳である。聰明にして拔目なき人は、何をさせてもテキパキやるが、重箱の隅を楊子でせよるやうで、小さな仕事の役に立つても、世間の事は一個人の力で動かせず、全面的の成敗は社會の推移に支配される。故に寛宏なる厚德の人物でないといふ大事業の經營は出来ぬ。古語に「智は及ぶべく、愚は及ぶべからず」とあり、馬鹿になつて損害を蒙る事もあらうが、利口ぶつて失ふ處より尠少ならば結局利口馬鹿の賢は、馬鹿利口の愚に如かぬ。

男性の戀愛道德

菊池寛は、當代一流の文豪とは云へ、其素行に就て兎角の評が絶へず、殊に曾ては麻雀賭博の一味として其筋の手數を煩はした程の人間で、道德を説くのは心臓が強過ぎると思はれるかも知れぬが、御當人もその點は心得たもので「僕は煩惱具足の凡夫であり、人に道德を説き得る資格はない。只凡夫である事を信じて居るから、常に凡夫の守り得る道德を主張として來た。僕の言説に、採るべき點がありとすれば、其點であらう」と序して居る。「人間は、多くの惡徳を持つと共に、多くの美徳も、亦自ら備へて居る。惡美相殺して少しでも美が残れば、一個の人として生存する權利があると思ふ。神と惡魔との中間に在りて、神に少しでも近き處に、人間の面目があるのであらう。僕の道德は、實行し易き凡夫の道德だ。強い自制心や克己心を要する聖賢の教へではない」と序文にある通り其著「新道德讀本」は、普通の教養を有する社會人の實踐し得る道で、之に準じて大過なく、然も偽善的臭味が伴はぬ處に、共鳴を感じさせる。

人情の機微に通ずる小説家だけあつて、戀愛に關する所見には、深く敬服すべきものがある。就中「多くの不心得な男性は、若き女性、殊に職業婦人などを、戀愛獵、情事獵に於ける獲物か何かの様に心得て女性を狙ひ、なるべく手輕に手に入れ、成べく安價な代償で、女性の凡てを奪はうとして居る」と云ひ「圓タクを出来るだけ安く乗つて自慢する様に、出来るだけ僅かな代償で、女性を自分のものにしよ」と云ふ男性が、世の中に充ち満ちて居る」と警告して居るのは、世相の表裏に通ずる至言である。「凡そ男性とは、女性を劬はり女性に物を與へるのが、其本質でなければならぬ」と云ひ、更に「その變愛情事に於て、相手の女性を幸福にしてやれる自信がなければ、相手に接近すべきでないと思ふ」と云つて、男性に男らしい戀愛道德を要求して居る。

「相手を不幸にしてはならない。此自信なくして女性に働きかけるのは、一種の盜人心理である。弱い女性に對して「甘くやつた」など放言したり考へたりする事は男性の恥辱でなければならぬ」と説いて居るのは、放縱にして卑劣なる蕩兒に對して、心臓を抉るが如く鋭い戒めの言葉である。流石は、當代文壇の大御所と云はれる菊池寛の著述だけに、一讀の價值充分なる事を推

奨する。

男性の愛情

菊池寛の小説「男性の愛情」に左の如き筋の物語りがある。或奮闘的の男性が、美人の妻を望んで娶り、物質的には何不自由なく暮させ、他の男性との交渉も自由に放任して毫も嫉妬がましい態度をせぬ。妻は最初兩親の爲に物質的事情で結婚を承諾したのであつたが、段々と夫に愛情を感じ始める。然し夫は一度も甘たるい言葉をかけず、金は充分與へるが手土産に半襟一つ買つて來た事もないので、夫の愛を疑つて色々と試みるが更に効果は見へぬ。其内彼女が大病で人事不省の際、彼は妻に輸血して「これ以上血を取つては危険です」と、醫師から注意されても「愛する妻の爲には命も要らぬ」と答へたが、その言葉は人事不省の妻には聽へなかつた。夫が妻に對し、父が子に對する愛情は「云はないでも解つてる」と思はれるが、妻や子の立場からは矢張り優しく話して貰ひたい——それが人情の自然であらう。

女の附従性

女と云ふものは、先天的に強者又は優者に附従する性能を持つて居る。而して、無智な女ほど此性能に支配され易いのである。動物の世界では、弱い劣種な牡は、一生雌を得る事が出来ぬ。假へば温突獸の牡は、強い奴は一匹で百匹からの雌を従へるのに、弱い奴は一匹の雌も相手にする事が出来ぬし、一夫一婦の獅子でさへ、雌は強者に従ふのである。阿弗利加の砂漠で、雌を従へた雄獅子と、他の雄獅子が出遇つて鬪争したが、血戦の後相手が勝つたので、傍で見つて居た雌獅子は、斃れた夫を見捨て、勝つた雄の後から、尾を垂れて従つた——と物蔭で見つて居た旅人の報告にある。優勝劣敗、適者生存は生物界の法則であつて、弱い奴は、自己の生存能力もなく、種族を保存する能力もないのである。

332071

女給の夫

近來、失業者の就職が容易でなくなつた爲め、女房が女給稼ぎをして、一家の生活を支へて居る者が東京には大分ある。最初は、純眞な女であつても、カフェーやバーの雰圍氣に同化して段々自墮落になる。そこへ誘惑の手が、四方八方から引張るのだから、終には意久地のない亭主に愛想が盡き、情夫の許へ奔ると云ふのが、十中八九までである。昔から、女髮結の亭主は、怠け者と定つて居たが、女給の亭主は、最愛の女房を他人の玩弄にさせて置けるだけあつて、概して怠け者の意久地なしが多い様である。仲には、毎晩迎へに行く者もあるし、嫉妬の結果、夫婦喧嘩の絶間ない者もあるが、例へ紙屑買をしても、男が働いて、妻には仕立物や洗濯の内職をさせる程度なら兎に角、浮氣稼業をさせ乍ら、焼餅焼くなどは、心得違ひと云ふべきである。未開人には、女房や娘に淫賣を稼がせ、亭主や親が客引や番人をする者もあるが、日本人には、流石にそれ程の破廉恥漢は居ない様である。尤も、時には、夫婦共謀の美人局はあるが、それは餘程の

悪黨か莫逆者であらう。人間男と生れたからには、鶯ら就職難時代と云ひ乍ら、最愛の妻に他人の機嫌を取らせて、其疵護に依つて生きて行くなど、卑怯な浅ましい便宜に頼るべからず。左様の場合には、寧ろ男らしく夫婦別れして、自由の立場で、再生を期すべきである。但し、女教員や女子事務員其他、正業の共稼ぎは、決して男の不名譽ではない。

結婚と優生學

民族の血統を清純にし、精神的にも肉體的にも、優秀な子孫を設ける爲め、科學的研究に基いて、悪疾の遺傳を剪除する優生學の運動が、我國にも採用されて、其の法律が近く實施される事になり、厚生省に優生課が設けられて、之を管掌する事になつて居るが、所謂子孫百年の長計であるから、政府の行政や法律の力だけに依頼せず、國民全體が子孫の將來を考慮して、各自が之に協力し、且自制するのぞなければ、實効は期し難い。假へば、悪質遺傳の斷種にしても、傳染病取締りにしても、如何に法規だけ嚴格に勵行した處で、當事者が勝手氣儘な行動を取れば、實

績は擧らぬのである。故に優生學は、文明國に限つて効果を奏し、野蕃國に於ては行はれ難いのである。

優生學と云ふのは、つまり結婚の科學的研究と云つても好いほどである。良き夫婦から良き子孫が生れるのは、瓜の蔓には瓜がなり、茄子の蔓には、茄子がなるのと同じ原理である。故に嫁取り婿取りに當つては、先づ相手の人格性行や、體質容貌は勿論の事、父母祖父母兄弟姉妹伯叔の三族に涉つて、調査の結果其の血統や家柄等が、重大な參考に供せられるのである。メンデルの遺傳法則に依れば、父母の特質は直接の子に遺傳が現はれないで、一代隔てた孫に現はれる由であるから、當人が健全であつても、油斷は出來ぬ。父母兩系の三代に遡及して、精密に調査せねば完全な結論は得られぬのである。

戀愛結婚に於ては、當人同志で相手を克く認め合つた結果、一緒になるのだから、これ程正確な安全な結婚はない筈であるが、世間往々にして、不幸に終る實例が多いのは何故であるかと云へば、一つには身分の懸隔等であらうが、周圍の事情が不適當だと解つた頃合には、當人同志が架入りして居て、最早抜き差し出來なくなつて居るから、結婚後に不幸を招來する危険率が多い

譯である。

雜誌主婦の友に尾崎士郎君が書いて居る故近衛文麿公の小傳に、公が大學生時代に省線電車に同乗した家も名も知らぬ女學生を見染めて戀慕した處、それが毛利子爵家の令嬢であつて、無事近衛公爵夫人に迎へられて、幸福圓滿な家庭を營んで居るとあるが、斯かる偶然の適合は極めて珍稀であつて、大抵は悲劇的ロマンスに終る場合が多いのである。

されば、第一印象に於て戀慕の念を生じた場合には、必ず第二の手段として、相手の身元を充分調査した上で、資格條件が適當な場合に限つて、始めて戀愛關係の進行を計り、遂に結婚の目的を克ち得るのが、眞の戀愛の勝利者であり、人生の勝利者であつて、ひと眼見た時好きになつただけで、猪突猛進して、周圍の事情を無視した戀愛結婚の結果は、概ね不幸を招き、優生學の目的にも合致せぬ場合が多い事を留意すべきである。

血液と黄金

平時に於て、黄金が人間の血液同様に考へられて居る事は、沙翁の戯曲ペニスの商人に、猶太

人が貨金の代償として債務者の血液を要求する場合にも暗示されて居り其他種々の實例が見聞される。戦時に於ては黄金と血液との關係は一層具象化されて、戦線で血を流すのも、銃後で獻金を要請されるのも、共に國民として國家への重大な御奉公とされ、血液と黄金とは、切つても切れぬ因縁が結ばれて居る。「朕は國家なり」と誇つた路易十四世は、財政窮乏の爲め瑞西の傭兵に給料を拂はず、傭兵の將軍から督促を受けた際「我佛蘭西が今まで瑞西に拂つた兵隊の給料を計算すると、巴里から瑞西へ黄金の道が造れる」と曰つた。傭兵の將軍は之に答へて「瑞西の兵隊が今まで佛蘭西の爲に流した血液を量ると、瑞西から巴里までの川が出来ませう」と曰つたので、流石の専制君主も閉口したとある。

大奈翁と黄金

「不可能なる語は、余の字引に無い」と豪語して、連戦連勝、全歐洲を席捲した大奈翁に、或人が戦争に必要な準備は何であるかと尋ねた處「第一に金」と答へた。次で第二から第十六まで尋

ねたが只「金々」とのみ答へた。それほど、黄金の價値を重大視した大奈翁も、露西亞遠征に失敗して退却の途中、携行の軍用金が邪魔になるので放棄させた。之を見た兵隊が争つて拾ひ、皆持てるだけ懐中したが、やがて寒さと飢と疲勞とで行軍に耐へ兼ねるに至り折角拾つた黄金を又雪中へ投棄した由である。此史實は、黄金が人生の必需品でない事の例證として、重金主義の誤謬指摘に用ひられた。而して理論上に於ては、黄金が血液より尊い譯はないと決定されて居る。それにも關せず、實際上に於ける生活の壓迫は、血液と黄金を交換する悲劇を繰返させて居る。

生命か金か

忠臣藏の芝居でする與市兵衛と定九郎の場合の如く、生命が大切か金が大切かと云ふ問題は、いつでも算盤では割り切れず、幾多の悲劇を生んで居る。

金がない爲めに、必要な養生も出來ずに、見す見す助かる生命を失ふ例がある反面に、金を山と積んでも動からぬ生命もある。

朝日平吾といふ浮浪者が、社會事業をやると稱して寄附金を求めて歩き、安田善次郎翁を訪問した。無論玄關拂ひを喰つたが、數回頑張つて面會した。然し翁は人も知る勤儉貯蓄の信奉者で無駄な金を出せぬと拒絶した爲め、平吾は兇刃を振つて翁に迫つた。流石の翁も驚いて「金さへ遣れば殺さぬでも宜からう」と叫んだが、時既に遅く、翁は兇刃に倒された。翁の資産は數億圓を算し、其内僅か五千か一萬も遣つたら、殺されずに濟んだであらうと稱されたが、命懸けで金を大切にした處に、安田翁の面目があつた——と見べきであらう。

名譽と金と

無條件で、金錢の犠牲を惜まぬ人はある。命を投げ出す人もあるけれども、名譽を犠牲にする人が稀なのは、犠牲心の強い人ほど、名譽心が強いからであると思ふ。

名譽を惜まぬ人は、大抵金錢を好む習癖を有して居る。

知人某氏の談に「僕が世話した者の内、貴下の爲なら命を惜まぬと云つて呉れる男が數人居た

ので、或時不名譽な失策を引受けて貰ひたいと頼んだ處、皆云ひ合せたように、婉曲に拒絶した。其處で別の男に金銭で交渉した處、快よく引受けて呉れた」と、蓋し人情の半面を語るものである。

東郷元帥の書

曾て、小笠原長生子爵に遇つた際、東郷元帥の書に就て色々の話を承はつた。「元帥が薨去されてから、鑑定の謝絶状だけ二千通以上出しました。大抵は駄目だからです。仲には私の鑑定まで偽造したのがありまして、先日某富豪が千餘圓で買ったと云ふのを持参しましたが駄目でした。何とかありませんかと云ひますから、焼棄てなさいと忠告しましたよ」と語られた。唯物主義の西洋人でも、カーライルに英雄崇拜論があり、名士の署名を珍重する風習を有するが、我日本人は、尊敬する人物の書を珍重する事名畫と同様で、殊に東郷元帥の書は希望者が多く、市價千餘圓と稱せられる爲め、偽筆の数が十萬點以上もあると云ふ。

凡ての有價値な書畫は、必ず偽造される。印章も又然りであるが、只玉石に名工の彫刻した印章だけは、偽造が困難であると云ふ。

書も亦人なり

文は人なりと云ふが、書も亦人の性格を表現するので、偽筆は如何に巧妙に模してあつても、眞筆と比ぶれば、争ひ難き氣品の差が認められ、印章も亦、名工が玉石に彫刻したものは、模造しても鑑別出来る由である。

中間階級

早大教授徳永重康博士の説に依ると、關東大震災の際、東京市の下町方面に被害が甚だしかつたのは、地質學的に見て、近代層の地下が直ぐ古代層で、中間層がない爲であり、山の手方面に

被害が少かつたのは、近代層と古代層との間に、七八尺の赤土で出来た中間層がある爲であつた由。佛蘭西革命の原因も、露西亞革命の原因も、社會組織に中間層が少く、上層と下層との懸隔が甚だしかつた爲であると云はれ、英國民が革命的變動を喜ばぬのは、中間階級が優勢である爲だと云はれて居る。近時、我國に於ては、中間階級の生活が困難になり、漸次没落の傾向を有して居るが、政府の施設其他を見ても、之が維持に努むるより、之が廢滅を促進する傾向の方が多い様であつて、甚だ寒心に耐へぬものがある。

韓非子を読む

韓非子の文は、曾て文章軌範で「說難」を読み、該博豊富なる引例と、理路整然、論旨明確なる達文とに魅力を感じたが、漢學の素養淺き悲しさは、他の五十餘篇を讀破する迄なく、残念に思つて居た處、這般吉田義成氏の譯解せる著書を得て、小閑の間に讀み了る事が出来た。韓非子の學は、辯說巧智の空理空論を排斥し、名と實とを併行せしむる事に重きを置き、所謂形名

法術の學と稱されて、根本思想は老子の「人君能く道を體して虚無恬淡なれば、民自ら正しく、物自ら化す」と云ふに基き「人君たる者は、自己の感情を示さず法令を整へて國民を統制し、之を勵行して賞罰を明かにすべし」と主張して居る。即ち今日の法治至上主義者である。孔子や孟子は、人性を善なりと見て、徳を以て世を治め、人間の本性である善性の發揮を説いたが、韓非子は荀子に師事して、人間は本來利己的なりと、利己の一面を以て世間の實相と視る性惡論者であつた。故に民を導くに法を嚴に定め、賞罰に依つて律するを必要なりとしたのである。従つて韓非子は、人生を視るにその暗黒面より出發し、父子の親も、夫婦の愛も、本來の利己心に比して頼むに足らずとしたのは、當時の世相が然らしめたのであるにしても、聊か偏見たるを免れず後世學者から非難を受くる所以であるが、大體に於て西洋のミルやペンタムの功利主義哲學に通ずる點があり、近世の國家が、法治主義に立脚せるに見ても、非凡なる先覺者たる事を知るべきである。或漢學者は「孔孟の書は机上に置いて誦すべく、韓非の文は机下に置いて讀むべし」と云つたが、國家非常時に際しては、假へ上策でないにしても、名實並び行ふの法術が必要かと思はれる。

粟食と米食

東洋で始めての大帝國を建てた秦の始皇帝の大宰相季斯は、荀子の弟子で、刑名法術の學に通じた俊才であるが、求職するに當つて思へらく「米倉の鼠は米に飽くが、粟倉の鼠は粟しか喰へぬ。それと同じく、大國の方が、小國よりも將來の見込みがある」と、評判の良くなかつた秦に仕官し、始皇に用ひられて棘腕を振ひ、希望通り榮華に飽く身分に出世した。

然し、榮華は浮べる雲の如く、さしも強大を誇つた帝國も、始皇の崩御と共に崩れ始めたが、季斯は同僚趙高と權力争ひの結果、其讒に依り、二世皇帝の逆鱗に觸れて、腰斬の極刑に處せられ、三族まで誅せらるゝに至つた。

粟を喰ふよりも、米を喰ふ方が好みに極つて居るが、不義の富に飽いて、三族を絶やすのも何うかと思ふ。

孔子は、仕官を薦むる者に對して「估らん哉」。我は價を待つ者なり」と答へた。即ち、出

世を欲しない譯ではないが「道に外れた事は御免蒙る」と云つて、生涯不遇に甘んじたのである。

陳勝と吳廣

壓制を極めた始皇が崩じて、秦の天下は民衆の怨府となり、其儘では濟まぬと思はれた時、眞先に叛亂を起したのは、陳勝と吳廣の二人であつた。彼等は間もなく討伐された。秦の天下を亡す先驅を爲したのは、陳勝と吳廣であり、根幹を打倒したのは、拔山蓋世の英雄項羽であつたが、其跡へ漢室四百年の基礎を定めたのは、穩健厚德の人劉邦であつた。先見の明ある者が見れば、室内には可燃燒瓦斯が充滿して、一本の燐寸で點火すれば、忽ち燎原に燃へ擴がる様に思へるが、實際は仲々そう行かず、最初の點火は、周圍を驚かして、惰眠を覺醒する警鐘の役はするが、結局消し止められて、先驅者は、陳勝や吳廣と同じ運命に終り易いものである。二、二六事件の指揮者某大尉が、自殺する際「今日まで頑張つても各地から策應せぬ處を見れば、我事既に終れり

矣」と嗟歎した由が傳へられて居る。時勢の認識を誤つて、偷安姑息の其日暮しを能事とする惰睡者も悪いが、鶏の擬聲を聽いて、天既に明るくと速断しては、慌て者の謗を免れぬであらう。

人物評論の難

人物評論の事を、漢語で月旦と云ふのは、孔子が月の旦日に人物評論をしたからで、英語では之をフース・ヒー（彼は誰だ）、又はフース・フリー（誰夫れは誰だ）と題する。

凡そ、文章を書く者に取つて、何が困難だと云つても、人物評論の難に知くものはあるまい。人物評論の難は、我判断を以て人の性行閱歷を記す事の困難ではない。又我文章を以て、能く論旨を明瞭にする事の困難でもない。而して又、自ら何の憚る處もなく縦横自在に論評し、思ふ處を云ひ盡すの困難でもない（韓非子）

然らば、何が困難かと云へば、人間が生きて居る限り、其行動は思想感情に依つて支配され、思想感情は、日々新にして、又日に新なる爲である。

古語に「士別れて後三日なれば則ち刮目して見るべし」と云ひ、句にも「世の中は三日見ぬ間の櫻かな」と云ふのは、流轉の世相に順應して、人の精神は環境に依つて支配される事を指すのである。

此故に「棺を蔽ふて定評あり」と云ふのであつて、過去の閱歷や偶々露出せる性行の片鱗を見て、其人の全貌を語るのは、群盲象を評するの類に過ぎぬであらう。

「あの丘が聖人かやと村の者」幼時手鼻をかみ乍ら悪戯をしたであらう孔丘が、聖人になつたと云つても、村の者には合點が行かぬのも無理でなく、三十歳頃までは大工であつた耶蘇が、神の子と稱して奇蹟を行へば「此男はマリアと云ふ村娘の私生子だよ」と村の者が云ふのも當然である。

豫言者は故郷に容れられず、大學者も小學教師からは子供扱ひにされ、成上りの富豪は郷黨に卑められる。それは皆、未完成時代の過去を知る者の陥り易い輕侮感に基くのである。

人物を論評するには、嘗に過去の性行や閱歷を詳にするだけでなく、其現在は何論、遠き將來性まで見透さねば、以て全貌を語る譯に行かぬが、將來は本人にさへ分らぬ事であり、神ならぬ

他人が見誤るのは當然であらう。

更に、過去の性行閑歴と雖も、他人が見た事と、實際と違ふ場合があり、又立場の相違に依つて、考へ方も異ふので、棺を蔽ふての定評が、眞實と異なる場合も、往々にしてあるのである。

神の如き文章家の韓退之でさへ、人物評論や歴史は書かず「孔子が不遇に死し、左丘明が盲となり、司馬遷が刑誅されたのは、人物を褒貶した罰である。聖人大學者にして然り。況んや不學の徒が敢て之をなせば、天刑人罰を免れぬ」と云ふ文を草して居る。

明治時代に、人物評論家として名のあつた横山健堂（黒頭巾二氏）、鵜崎鷺城氏等の末路は如何？現代の評論家中、天刑人罰を蒙つた例は枚擧に遑ないが、最近地方の新聞記者中、僚友を妄評した爲め衆怨の的となり、遂に悲鳴を揚げさせられた者があるなど、天刑は知らず、人罰の怖るべきを如實に例示して、滔々たる評論界に警告を與へた。我等も一層自戒せねばならぬと思ふ。

眞實と其影像

人間と云ふものは、眞實を知りたがる癖に、さて眞實の姿を、ありの儘で見せられると、餘程

の達人でない限り、吃驚恐怖して、耳目を掩ふのである。假へば戀人に就て凡ての眞實を知りたがつて居る男女も、相手の赤裸々な姿を見せられたら、十中八九まで、幻滅の悲哀を感じて、三年の戀情も一時に醒め果てるであらう。故に或哲學者は「人間が眞實を求めると云ふのは、眞實の影を求め、其の足跡を追ふて居るに過ぎぬ。其の證據には、眞理をありの儘に語つた者は、ソクラテスでも基督でも、皆死刑に處された。今日傳道を許されて居る宗教は、眞理を述べて居るのではなく、眞理の足跡を辿つて居るからだ」と喝破したが、全く其の通りだと思ふ。

凡て物事を、ありの儘に曝露すれば、縁談でも、商談でも、交際でも、纏まるより破れる場合が多いから、俗に仲人口と稱して、双方を適宜に紛飾する媒介者が、纏め役として必要とされるのである。

ほんとうの事だからとて、何から何まで小兒の無邪氣さで語る人がある。けれども斯かる人は世間に愛されずに、實務方面から敬遠されるであらう。故に裁判所の命令で、證人として法廷に立つた場合の外、滅多にペラ／＼語らぬのが、賢明な處世策とされる。

假へ、解り切つた事柄でも、多少の粉飾を加へて話されると、釣り込まれて見返す事になる。

重罪犯人の裁判でも、權威ある辯護士が熱誠をこめて辯護すれば、判事の心證を動かして、處刑を輕減される實例の多いのは、人情の然らしむる處であらう。

唯注意すべきは、人間は本來虚偽不實を憎み、眞理に憧憬し、眞實を追求する性情を有すると云ふ事である。但し人間の追求する眞實は、眞理の實體に非ずして、粉飾された眞實の影像に過ぎぬのである。

之を商取引に應用すれば「賣物に花を飾れ」と云ふ標語こそ、凡俗の心理に適合した要諦であらう。

或哲學者が、左の如き譬え話で現代の大學教授を諷刺して居た。

大學教授が、武裝物々しく狩獵に出かけて、頻りに獅子の足跡を探求した。其處へ一人の柚人が來つて、此山奥に獅子の棲んで居る洞窟があるから、案内しようとして申し出た處、教授は色を失つて「いやそれには及ばぬ。私の探して居るのは、獅子の足跡だけで、獅子ではないから」と答へた由である。

英雄と人間味

英雄と云ふのは、普通人の爲し能はざる處を、克く爲し能ふ處の強い意志の所有者であるが、徹頭徹尾強い意思のみを示して、人間らしい弱さを見せぬ者もあるし、強い反面に於て、弱い人情を示す者もある。日本武尊が、碓氷峠で、東國を望み見て、上總の海に投身された愛妃を想ひ「吾妻はや——」と詠歎されたのは、歴史に有名であり、峠に記念碑もあるが尤も現在記念碑のある場所からは東國處か谷底も見へぬから、有志の改築を望み度いが兎に角、少年時代から剛氣で、單身はるく九州へ下つて、強豪熊蘇猛を寢室で刺し殺し、日本一の武勇者と賞讃され其後も勅命で各地を征伐された英雄の胸中にも、亡き妻を慕ふて追憶の涙を流す人間味の豊かさを見るのである。源頼朝が、長女大姫の愛婿と定めた木曾義仲の長男清水冠者を殺したり、功勞ある弟義經の妾靜御前の生んだ赤ん坊まで殺した無慈悲さは、如何にも人情を没却した處置で、子孫が三代で絶へたのも天罰であらう。同族相討ち、血で血を洗ひ乍ら、亡滅した源氏と異り、

同じ亡滅の道を通り乍らも、同族相扶け、最後の壇の浦まで、女房子供を同伴した平家一門に、血もあり涙もある日本人らしさを見る。日露戦争の満洲軍總參謀長兒玉大將が、戦略に行詰ると野外に出て神に祈つたと云ふ話や、聯合艦隊の名參謀秋山中佐が、大本教の信者であつたと云ふ話は、英雄も亦人間なりの感を懐かしめる。人情を没却して、一つの目的に全能力を傾倒すれば或は英雄の事業を爲し得るかも知れぬ。けれども、人間味を失はずして、英雄と稱されるのは、容易な事ではないらしい。

實力と實行力

實力とは、社會生活に有意義と認められる力、即ち、體力、智識經驗、財産、信用、地位等を謂ふのであつて、如何なる力が大切であるかは、社會生活の推移と共に變動する。假へば英國では「あの人は何んな人格か」と聞き、獨逸では「何んな學校を卒業したか」と聞き、佛蘭西では「何んな試験に合格したか」と聞き、米國では「何程の財産を有するか」と聞く由であるが、同

じ米國でも、紐育では財産を重んじ、ボストンでは學歴を重んずると云ひ、我國でも東京と大阪とでは異ふといふ風に一概には断定し難い。俗に、有力とか無力とかいふが、それは比較的の問題で、凡そ人間として、全然の無力者は、理論上あり得ない事である。只、其持てる力を、如何に行使するかに依り、實力の發揮、即ち實行力の問題が生ずるのである。幾ら財産があつても、社會的に活用せず、徒に死藏するが如き人物は、實力があつても實行力はない、と云はねばならぬ。又高等教育を受けた智能者でも、遊惰の日を送つて、ブラ／＼して居るが如き人物は、低能者同様である。

一關亦一關

徳川家康が「人の一生は重き荷を負ふて遠き道を往くが如し」と曰つたのは、流石に苦勞人の言である。人生には、幾多の難關がある。その一關を超越れば、亦次の一關がある。行路難は、人生の常態と思はねばならぬ。日暮れて道は遠くとも、撓まず屈せず、歩一歩と進み行けば、何

時かは目的地に到達するであらう。捨つる神あれば、亦拾ふ神もあるのが人生である。世相如何に險惡でも、健康で働く者が、餓死した話は聞かぬ。

「山越へて亦山越へて峠かな 長星」

匹夫志不可奪

筆者の家に、筆跡の見事な左の如き書幅があつた。

「孔子曰三軍可奪帥匹夫不可奪志」何海鳴と署名捺印してある。

何海鳴とは何人か。多分支那の書家であらうと思つて居た處、此程或雜誌に彼の事が書いてあつた。

何海鳴は、日本へ亡命して居た支那の政治家で、頭山翁や犬養翁と親交があり、第一次の革命に武昌で旗揚げした黃興將軍の參謀となつて働いた人である。

これだけ分つたので、字も立派章句もよいから、表装させたのが今日出來て來た。

其章句に孔子曰く「三軍帥を奪ふべきも匹夫志を奪ふべからず」とあるが、全く人間の一心は、恐ろしいものである。

南海土佐に、八幡山と稱する草相摸の上手な男が居たが、何うせ相摸を取るなら、天下の大力士にならうと志して、最眞の人々に相談した處、何分此男は身長五尺二寸しかない矮身小軀だから、草相摸は上手でも、職業的力士には駄目だらうと、誰も相談に乗つて呉れる者がなかつた。

然し、彼は決して失望せず、實力さへあれば、小男と雖も大男に勝てぬ譯はないと感じて、實力の修練に努めた、

彼は、村社朝蜂神社に「四斗樽に小石一杯入れて、それを両手で差上げる丈の實力を授け給へ」と祈願し、先づ最初の晩には空樽に小石一つを入れて両手で差上げ、以後毎晩小石一つ宛を殖やして、其樽を頭上高く差上げる修練に努めた結果、遂には、小石を一杯に詰めた四斗樽を、樂々と差上げる事が出来る様になつた。

斯くして、此實力を土産に東京へ出た彼は、職業相摸へ弟子入りした上、以前と變らぬ熱心さで技術を修練した結果、五尺二寸しかない小男の八幡山が、天下の大關となる事が出來た。

千里の道も一歩からと云ひ、一足飛びに偉くはなれぬが、八幡山の如く、毎日小石一つ宛殖やして修練すれば、遂に四斗樽に一杯入れた石を持ち上げる實力も養へるのである。

ナポレオンが「不能の文字は愚人の字書にあるのみ」と豪語したのも、精神一到何事か成らざらんと云ふ確信を有した故であらう。

志望は大なれ

新渡部稻造、内村鑑三、志賀重昂の諸先生を始め、幾多の人材を輩出した札幌農学校の創業功勞者クラーク博士が、學園を去るに臨んで、生徒達に遺したのは「少年等よ。野心的であれ」の一語であつた。人間は、身の程を知つて、萬事謙遜に振舞ふのも、世渡りの祕訣であるが、志望を大きく持つて、精勵努力する事は、社會の進歩に貢獻する道である。故永井柳太郎氏は、筆者の恩師であるが、蛟龍未だ池中にありし頃から、其志操に於て、其氣魄に於て、斷然濟輩を壓するの概があつた。永井先生は、社會政策と植民政策との講座を擔任して居られたが試験の際

は、黑板に「男子の事に當るや、須く正々堂々たるべし。堂々と闘つて勝つ能はずんば、寧ろ名譽の敗者となれ」と大書して試験の監視はされなかつた。先生の學生時代には、同級の大山郁夫氏が、拔群の成績を占めて居た爲め、先生は頭角を現はし得なかつたが、政界に出てからは、中橋徳五郎氏と角逐して、一度は惜敗したが、議會の壇上で「西にレーニン東に原首相」と叫んで一擧に盛名を馳せ、同時に政界へ出た大山氏は外國へ逃避したが、氏は夙に大臣の印綬を帯びた人間は矢張り志望を大きく持つて精勵努力すべきであると、勝氣な小大隈的風貌を思ひ泛べつゝ感慨を禁じ得ぬのである。

希望と虚無

少年の頃は、お正月や御祭禮が楽しくて、其日の來るのが待遠しかつたものである。

今から考へると、其頃の希望極はめて單純で、それを悉く叶へて貰つても、大した事ではなかにが、然し、小さな胸中に様々の夢を懷いて、未だ見ぬ世界を憧憬する心の楽しさは、誰にも

覺えがある事と思ふ。

中年時代までは、世の荒浪を泳ぐのに一生懸命で、知らず／＼に年を取るが、ふとした拍子で「こんな事をして居て、一體何うなると云ふのだ——」と、釋迦が出家した時の様な無常觀——みたいな虚無的感に襲はれる事がある。

假へば、此拙文を執筆するにも張り切つた氣持で書く場合は、云はんと欲する事を云ひ得る幸福を思ひ、何んな苦勞をしても、人生に生甲斐を感じるのであるが、時には「こんな詰らんものを書いて何になるか。黙つて居れば、自分の愚を世間に知らさないで済むではないか」と思ふ事さへある。

虚無思想を以て、人生を論理的に追求すれば「人間とは、要するに食物に過ぎぬ」と云ふ結論に到達する由である。

此思想は、精神を幽玄の境地に導くが、人をして社會生活の煩を厭はしめ、其情熱及び闘志を失はしむるに至るのである。

支那で、竹林の七賢人等の隱遁生活が流行したのは、老子の虚無思想の影響であつて、社會の

爲め弊害が多いので、孔孟の道德では此思想を極力排斥して居る。

希望を懐く者、即ち夢多き者は現實的情熱的で、性格も明朗ではあるが、思想的には低級と見られ、野心的と見られ、鬪争的と見られ易い様である。何事にも、一利一害は免れぬが何事も萬全は求め難いから、信州の方言に所謂「中位」好い加減の意味で仕方ないとすべきである。

失敗と再起

有爲轉變は世の常で、事業家に成敗は付きものである。儲ける者のある反面に、損をする者の絶へぬのは兎町ばかりではない。

戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取ると云はれた常勝將軍でも、時に運拙くして駿逝かず、一敗復起つ能はざる痛手を蒙つて倒れる例があり、勝つたり敗けたりして差引敗けた數の方が多し者でも、最後の戦に大勝して不動の地位を確定する例がある。其處で人生は七轉び八起きと稱されるのである。

要は、失敗しても再起の餘力を存するか否かの問題である。再起する餘力さへあれば、失敗は尊い経験となり、他日成功した場合の効果を倍加するのである。

何人と雖も、絶対に失敗をせぬと云ふ保證は出来まい。故に何事か始めるに當つては、成功の見透しと共に、萬一失敗した場合の對策も考へて見る必要があらう。

講談社々長故野間清治氏は、中學教諭から身を起して雜誌王と云はれた程の大成功者であるが、氏と雖もトシ／＼拍子に成功した譯でなく、常人なら再び起つ能はざる位の失敗がないではなかつた。只氏の失敗した場合の對策は、何時までも不愉快な跡を追ふ事をせず、新考案と新努力に依つて之を償ふのであつた。元より斯様な手際は特殊な天稟がなくては出来ぬかも知れぬが以て他山の石とすべき好模範と云ふべきである。

大抵な者は、失敗を苦に病んで意氣阻喪するか、又は失敗を隠蔽せんが爲めに柄にもない強がりや豪語して世人の同情を失ひ、一の失敗を掩はんが爲めに他の失敗を招いて自ら墓穴を掘り、遂には自滅の一途を驀進するに至るのである。

知らざるを知らずとするは、之れ如れるなりと云ひ、自らの非を非なりと悟るは、之れ正しき

なりと謂ふ。此意味に於て、失敗の苦き經驗こそ成功の母と云ふべく、四面楚歌の聲を聞きつゝ徐ろに再起の對策を練る程の人物でなくては、眞の成功は贏ち得ぬであらう。

天命を知る

孔子が「十五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして不惑、五十にして天命を知る」と云つた天命とは、天の使命と云ふ意味に解すべきであらう。

古語に「天の將に大任を斯人に下さんとするや、先づ艱難辛苦を興へて、其身心を練磨せしむ」とあるが、此大任と云ふ語の意味も、孔子の天命と同じ意味で、必ずしも王侯將相の印綬に限らず、人生に有意義な仕事で「社會の爲め何事か貢獻し得る仕事」と云ふ程の意味に解すべきであらう。

筆者の少年時代に、中學世界と云ふ雑誌があつた。大町桂月先生が主宰し「王侯將者豈種あらんや、凡そ英雄豪傑又は一能に優れたるの士は、必ずや矜持して自ら高く標す。其力量と一致せ

ざる自惚は傍ら痛きも、之に伴ひて勉むれば必ずや凡俗に超絶せん」と云つた名文で、夢多かりし明治時代の青少年を鼓舞激勵された。今でも「醉生夢死の徒は、枯木冷灰の如し」と云ふ句を覺へて居るが、筆者も其感化を受けて、當時は功名心を燃やしたもので、笈を負ふて上京し、隈伯門下として早大に學び、日本石油會社に就職するまでは功名心の刺激があつたが、一會社員として社會の現實に直面して、理想との隔たりを痛感し、世の中は思ふに任せぬものと云ふ經驗をして、天命を知る年齢になり、茲に始めて天命の眞意義を解し、悠々自適するの境地に達したのである。

「貧しかれど心豊かに暮すなり、憂き世の道も歩み馴るれば長星」

富貴不淫貧賤樂

藤田東湖は、程明道の詩中の「富貴不淫貧賤樂、男兒到此是英雄」といふ句を書して、座右の銘とした由で、筆者も此句を愛して毎朝獨誦して居た處、或朝故海老名彈正氏（基督教界の名士）

の未亡人が「亡夫も始終愛誦して居ました」と語られた。

筆者は、此句の内「貧賤に樂しむ」と云ふ點は、何うやら實行して來たが「富貴に淫せず」と云ふ點は、不幸にして富貴にならなかつたから、實踐の經驗を持たぬが、實際問題としては、富貴不淫の方が、行ひ難いのではないかと思ふ。

死兒の齡

世の中で、無駄な繰言を述べるのを戒めて、死兒の齡を數ふるが如しと云ふ。あの兒が生て居たら、もうあの位になつて居よう——とは、娘を早世させた筆者が、よその年頃のお嬢さん方を見るにつけて思ひ出さずに居れぬ愚痴である。あの時あゝもしたら、或は斯うもしたらと、後からと出て來る下司の智恵を絞つて、返らぬ愚痴に胸を焦し、人を恨み、世間を呪ふのは、人間の弱點と云ひ乍ら、浮み上れぬ劣敗者の常で、死兒の齡を數ふるよりも罪深き墮地獄道である。前回の選舉に、辛くも當選した者が、今回の選舉に、惜しくも落選する。それが選舉の常で

あつて、運の好い時と、運の悪い時との差異は、人力を以つて如何共なし得ぬものである。筆者が、最愛の娘を失つた時も、醫師の誤診があり、某博士が自らそれを告白し、入院料は要らぬとまで云つたが、然し、僅かに十三歳の少女が、發病の前日、突然遺言めいた事を言つた不思議を思ひ、神の啓示、天の命數と諦めたのであつた。

昨日の事は夢の亦夢——で、徒らに死兒の齡を數へて見ても、今明日の役には立たぬ。それより奮發一番、今日に善處し、明日の計に工夫する事が肝要である。

デイ河の粉屋

昔、英國デイ河の畔に、水車で粉を製造する男があつた。朝から晩まで、粉を挽きながら楽しそうに歌つて居た。曰く「デイの河邊に住む我は、世界無類の果報者——」と。只それ丈の歌であるが、幸福な粉屋と云ふ評判が立つたので、國王のお耳に入り、或日行幸される事になつた。國王は、粉屋に拜謁を仰せつけられて「お前は何うして毎日愉快そうに歌つて暮せるか」と御下

問遊ばされると、粉屋は「私は妻や子を愛し、友達を愛します。彼等も亦私を愛して呉れます。只それだけで御座います」と答へた。國王は其答へに満足遊ばされ「お前の埃だらけの帽子は、朕が黄金の冠よりも勝つて居る」と仰せられた由である。

果實と人物

果實は、色づいて熟するに従ひ、中心の核が固くなり、周圍の肉が柔かくなる。人間も、修養が積んで來ると、外觀は彌々穩かになり、内心は確固たる信念で堅くなる。圓熟して腹が出來たのである。外見はぼんやりした様で、滅多に怒らず、表面溫柔であるが、内心何もかも承知して居る。さう云ふ人物が、何か爲る時は、必ず相當の効果を擧げるであらう。韓信が股を潜つた様に、馬鹿にされても直ぐには怒らず、徐に時機を待つて報復する。さう云ふ人間を「怖い人物」と云ふ。圓熟しても、霸氣を失つて、腹に締りのない人間は、熟し過ぎて酸味も甘味もなくなつた果物同様である。あつても無くても、社會の役には立たぬ。如何に老衰しても、幾分の娑婆つ

氣がなければ、生きた死屍同様であり、腐つた果物同様である。

人間は常に潑棘として、新しい果物の如き新鮮味が必要である。

超死の氣魄

先年、泉州の堺に遊び、蘇鐵で有名な妙國寺へ參詣した際、維新當時土佐藩の堺港警備隊が、無断上陸した佛蘭西の水兵を射殺せる咎に依り、此寺内で切腹を命ぜられた遺跡を見た。記録に依ると、佛蘭西の嚴重な抗議に遊び、責任者の土佐藩警備隊長箕浦猪之吉以下二十人が切腹する事になつたが、何れも壯烈な態度で割腹したので、立會の佛國士官が座に耐へなくなり、途中で忌避した爲め、十一人が切腹した丈で處刑を中止されたとある。下田氏は、此事件に就て「之は佛人が切腹の凄慘さに恐れをなしたのではなかつたに違ひない。其當時未開國視して居た日本に上陸して勝手に暴れ廻つて居た佛人の事であるから、日本入の死ぬ位は何とも思つて居なかつたに異ひない。それが耐へ切れぬ程に壓迫されたのは、死そのものではなくて「死を超ゆる氣魄」

に打たれたが爲である事に疑ひない」と書いて居るが、一見識と云ふべく、此點筆者も同感を禁じ得ぬ。

毅然たる氣魄

小さいものと、大きいものとの闘ひ、弱いものと、強いものとの争ひに於て、小さい、弱いものが大きい、強いものに壓迫を受けるのは當然であるが、假へ形態は小さくとも、物理的の力は弱くとも精神的に毅然として、死を超ゆる氣魄の烈々たるものあらば、所謂威武も屈する能はずで、大きく且強い相手と雖も、浮かり手を下す事は出来ぬであらう。大隈侯の開國五十年史を讀むと、明治維新の際我國は元寇以來の國難に遭遇して居た。當時一步を誤らんか。虎狼の如き露佛英米の爪牙にかけられる小羊の危さであつたが、我等日本國民が示した烈々たる氣魄は、列強をして侮り難く侵略し難きを思はせた爲め、印度や支那の蒙つた如き國難から免れる事が出来たのである。

伊太利の俚諺

伊太利には「高い樹の枝は折られぬが、倒れた樹は、枝ばかりでなく皮まで剥ぎ取られる」と云ふ俚諺があつて、青少年を鼓舞して居る。誠に、倒れた樹の惨めさは、枝は折られ、皮は剥がれ、幹は行人の土足に蹴られて、之が昨日まで天空に聳へて居た大樹かと怪しまれる様になる。倒れてはならぬ。倒れたが最後酷い目に遭はされる。それは實に伊太利の運命のみでなく、生とし生けるものは凡て、倒されぬ様に頑張らねばならぬ。

艱難と克服

艱難は何れの場合にも免れず、大は國家より小は一個人に至るまで、富めるも貧しきも、社會の凡ゆる方面に襲ひ來るのであるが、之を如何に克く耐へ、之を如何に克服し得るかに、存亡の

機を見るのである。使徒ヤコブが「我兄弟よ、汝等各様の試練に遭ふとき、只管之を歎喜とせよ。それは汝等の信仰の經驗は忍耐を生ずるを知らばなり。忍耐をして全き活動をなさしめよ。之れ汝が全、且備はりて缺くる處なからん爲なり」と云ひ「試練に耐ふる者は幸福なり。之を善しとせらるゝ時は、主の己れを愛する者に約束し給ひし生命の冠を受くべければなり」と云つたのは實際家と云はれた彼自身の體驗を語つたものである。

西班牙の話

アメリカ大陸の發見者、コロンバスの後援者であつた有名な女王イサベラ時代のスペインは、世界有數の富強國で「スペイン國旗の輝く處に太陽は没せず」と豪語されるほど、多數の植民地と船舶を有して居たが、今日では、歐洲の最も不毛な地域に躑躅する二流國となつて居る。

比律賓大學の寄宿舎、サンタ・リタスホールに、筆者が在宿した頃、アメリカ及びスペインの學生と同室したが、米人の潑刺たる元氣に反し、西人は消極的儉約家で少しも青年らしさが無い

ので、片言交りの英語で攻撃すると、彼は落ついた態度で「何處の國にも榮枯盛衰は免れぬ。今日本や米國は新興の意氣に燃えて居るが、スペインや支那は、既に盛りを過ぎて老境に入つただ。君等の國家も聽て我々の國家同様の老境が来るであらう」と、教師が生徒に教訓するが如く説いたものである。

斯様に、スペインの青年は元氣がなく、三百年以來領有した比律賓群島を米國に占領されても又後進の日本人に侮辱的議論を吹きかけられても、毫も口惜しがらず極めて平然たる態度であつた。

それほど、大人びた冷靜なスペイン人でも、左右兩翼思想の對立となると、毎日數千人の同胞を殺戮し合つて居るのである。

恐るべきは、階級思想の對立である。左翼と右翼の對峙、それは外國との戦争よりも更に恐るべき處の抗争である。

スペインには、小數の大地主と多數の貧農の外に、中産階級がないと云ふ。ロシアがそうであつた様に、穩健中正な秩序を支持する中産階級のない國家は、最も極端なる革命の慘禍に冒され

易いのである。

一病息災の説

息災とは「災が息む」と云ふ意味である。一病息災とは、一病ある者は要慎するから、他の災を未然に防ぐと云ふ事である。或書物で、淡路關治郎氏の「一病息災」説を讀んだが、其大要を摘記すると「學校を出て、最初の十年以内に早死する者は、大抵身體の病弱な連中であるが、中年以後になつて訃報を傳へられる者は、概ね身體の強健な元氣者が多い。即ち青年時代には、健康と壽命が一致するけれど、中年以後には、健康必ずしも恃むべからず、反つて元氣な連中が頓死するやうである。無病で健康な男が、徹夜で飲酒したり不養生しても何ともなく、妻君が青い顔すれば假病だらうと怒鳴り、病弱者に對する同情など出來なかつたが、生命保険に加入する爲の檢診を受けて、糖尿病に罹つて居る事が解り、急に心細くなつた矢先、元氣な友人の頓死を聞いてから、醫師の勧めで夜更しの悪遊びや大酒をやめて養生する氣になり、病弱な妻君にも同情

が出来るやうになつて、家庭も圓滿になるし、病氣も漸次回癒に向ひ始め、一病に依つて人生の幸福を招來した」と云ふ事である。

同病相憐の情

「人類は元來社會動物なり」と云ふ學說通り、人間が社會組織の才能に優れて居るのは、同類意識の感情が強い爲だと云ふ。而して其一つの現象は「同病相憐れむ」の人情に見られる。前文にもあるが、病氣を知らぬ健康な者は、概して他人の病氣に思ひ遣りがない癖に、自分が偶に病氣に罹ると、やれそれと大騒ぎする。之に反して病弱者は、自己の苦痛はぢつと辛抱し、同病者の苦痛に相憐むの情を寄せる。東京市民は、全國の寄り集まりだから、山の手の住宅では「隣は何をする人ぞ」と云ふ状態だが、本所深川邊では、長屋中が交代で他人の看病をする。生活に困つた経験のない人ほど何かあると大騒ぎで助力を求める癖に、出入りの者が難儀話を持ち込んでも一舉手一投足の勞さへ吝む者が多いやうである。

命の捨て處

御國の爲に、大君に捧げ奉りし斯身ゆえ、命を惜むにはあらねど、成るべく花々しい最後を遂げ度く、犬死はしたくない——と云ふ考へは誰にもあらう。然し、犬死を避けようとすれば勢ひ功利的になり、遂に適當なる死所を得ざりし場合は、臆病者と同じ事になる。近來、有名になつた葉隠れ論語には「假へ犬死と稱されようとも死を見る事歸するが如くあれ」と説いてある。此觀念に育まれた佐賀地方から、爆彈三勇士其他の猛者が輩出した。大楠公が、湊川に戦死したのを功利學の福澤翁は犬死と評した。亦大西郷は、僧月照と抱き合つて海中に投身したが、あの儘蘇生しなかつたら、維新の元勳になれず、所謂犬死に等しい譯である。其他大人物と云はれる者で、随分輕卒なる危険に臨み、命の捨て場所を撰まなかつた例を聞くが、天命を達觀して、生死を超越する氣概があつてこそ、大功業を成就し得るのではあるまいか。

昔の武士は、名ある相手と闘ふのを名譽とし、雜兵端武者の輩を相手にせずとの誇りを持した

けれども、大人物が死に場所を撰まぬのと同じ意味から云へば、假へ取るに足らぬ輩でも、相手にせずと避けるは臆病に似て居る。尤も、大事の前の小事を忍ぶは大勇の士にして行ひ得べく、木村重成や神崎與五郎の例は、餘りに有名であるが、これらは大義名分の問題でなく、單に自己の恥辱を忍べば足るのだから、お茶坊主や馬方の無禮を寛恕したのである。人も知る清水港の次郎長親分と云へば、海道一の俠客であつたが、いきさつに依つては随分貫録の違ふ相手とでも、命の遣り取りをした由である。即ち、單なる個人的毀譽褒貶と異り、條理の問題に就ては、利害得失は何うあらうと、成行次第で命を賭し名譽を懸けて、如何なる相手とでも闘ふべきであり、相手の身分を詮索して二の足を踏むが如きは、所謂義を見てせざるは勇なきなりで、眞の公人たる態度に非ずと信する。

厄年の迷信

女の十九と三十三、男の二十五と四十二を厄年と稱し、何か災難に遇ふ虞があると信ぜられて

居る。勿論、それは迷信に過ぎぬと云へばそれまでであるが、此迷信は民俗的に永い傳統を以て一般に信ぜられて居るので、此歳に該當する者が一層身邊に注意して、神佛に厄除けの祈願をするのは、必ずしも無意義の事ではない。厄年何ものぞと云ふ元氣で、迷信を排するのは好いが、身邊の注意を缺き、病難災難に見舞はれてから「成程厄年だつたわい」と遅播きに思ひ當るなどは、餘り感服出來ない。筆者も、矢張り其一人であつて厄年の迷信を嗤笑したものであるが、廿五歳の春は、柔道の寒稽古に左腕を折られて苦しんだし、四十二歳の春は職業を辭して上京、愛する娘を喪つたり、信用組合の理事になつて油を絞られたり、今から考へると、厄年の災難でなかつたとは云へぬ。西洋人は、十三の數を忌むので旅館に十三號室はない由であるが我國では、前記厄年の外に、七難九厄と稱して、七と九を忌む迷信がある。斯かる民俗的迷信には、種々の牽強附會した説が述べられて居るが、要するに、一定の年限に達すると、精神的又は肉體的に意外の變化が生じ易いので、神佛に祈願して敬虔なるなる精神を持し、身邊に格別の注意を加へて災難を除ける様に、要慎を警告するのに外ならぬと思はれる。

職業的罪業

軍人が戦場で敵兵を屠り、警察官が犯人を捕縛し、検事が被告を糾弾し、執達吏が強制執行をするのは、何れも國家の爲めに正義を行ふのであつて、假へそれが相手方から慘虐無慘に感ぜられても、法律的にも道德的にも何等非難される處のない正當の事であるが、然し、佛教や基督教の如き慈悲汎愛を旨とする宗教的見地からは、之をも一種の罪業視するのである。

俗に「悪い事をした俵は憎くなく、縛る警吏が恨めしい」と云ふのが人情であるから、反面それ等の職務に従事する人々にも、心の奥底で、大なり小なり、其職業的意識と宗教的罪惡感との矛盾に悩むのであるが、殊に宗教的精神修養に志す者には、其悩みが一層深いのである。

上杉謙信は、天下を治めるには武力ばかりでなく徳を以てせねばならぬと悟り、林泉寺の宗謙和尚に參禪した。

和尚は謙信に向つて「佛道に入つて道念一途に生きても、一生の修業を要するのであるから、

劍を執つて世に處する者は、三世の苦業を積まねばならぬ」と訓へた。

謙信は、兩刀を棄て、自己一身の佛果を得べきか。劍を帯びた儘三世の苦業を積むべきか。煩悶に煩悶を重ねた結果、和尚に答へて曰く「拙者ばかり佛になつても、家臣や領民が餓鬼道に墜ちて居ては何にもならぬから、兩刀と共に三世の苦業を積みます」と。

謙信に此修養があつたからこそ武將としても堂々の戦ひが出来たのである。即ち、敵國へ鹽を送つた美談は云はずもがな、宿敵信玄の死する時「我亡き後は越後の謙信と和睦して彼に頼れ」と遺言したと傳へられる程、敵將からさへ信頼されたのである。

我等新聞記者にも、職業的罪業の悩みがある。

自分では、正義と信じて書く事でも、忌憚なく筆を執れば、何人かを傷つける結果となり、八方に遠慮すれば、筆が鈍る。

筆を折つて、一身を完ふする事は容いが、筆と共に佛果を得んと欲するのは、凡俗の我等に至難の苦業である。

心構への話

藝春秋の新年號に、速水博士の「心構への話」と題する一文があつたが、流石に心理學の大家の説だけに、首肯すべを名論卓誰と敬服した。人間と言ふものは、心構へ一つで、何うにもなるものである。月給さへ貰へば充分だと思つて居た處へ、ボーナスを貰へば感激するが、二ヶ月分貰へると當にして居た處へ、一ヶ月分位のボーナスでは不平が起るのも、心構への問題である。他人と交渉する者は、相手の心構へを見透す事が何よりの成功の秘訣である。相手の心構へを、自分の心構へと一致さす事が出来れば、物事は凡て順調に運び、一國も、一縣も一會社も、一家も、浪風なく平和に治まるのである。

心のゆとり

琵琶湖渡りに英名を歌はれて居る明智左馬之助が、坂本の城に入つて、光秀の遺族や殘黨と共

に自殺する際、主家の寶物に目錄を付けて寄手に引渡したのは、床しき美談として傳へられて居る。同じ頃、松永彈正が信長と不和になり、討伐された原因は、名器松風の茶釜を、信長に所望されたのを斷つた爲だと云ふが、落城の際、城から投げ下し、滅茶くんに破壊して溜飲を下げたといふ事である。暴に報ゆるに暴を以てするのも人情の一面であり、暴に報ゆるに恩を以てするものも、人情の一面があるが、要するに、當事者に心のゆとりがあるか否かの差異でわると思ふ。

野中兼山の大計

土佐藩の家老野中兼山は、高知城の外廓に大きな空濠を堀らせたが、何の爲か分らず、無用の長物だと物の譬へにされて居た。然るに其後數十年経つて、或時海嘯が高知市を襲つた際兼山の堀らせて置いた空濠が役に立つて、生命財産を救つたので、謂ふ所の百年の大計とは斯うした準備を云ふのであらうと、衆人が始めて感服した由である。いつ起るか分らぬ不則の災害を防禦する爲、非常の準備をして置くと云ふ事は、極めて望ましい事ではあるが、餘程心掛けの好い人物

でない、と、仲々行へぬものである。

象山先生の遺徳

頃日、山林の事に精通した人を案内して、信州平穩温泉へ行つた處、其人が附近の山林を見て植林の見事なのに感服して居た。之は佐久間象山先生が、當温泉へ滞在中、地方民を指導して植林させたものであると云ふ。貨殖篇に「居る事一年なれば、即ち穀を播き、十年なれば樹木を植へ、百年なれば徳を施すべし」とあるが、野中兼山が江戸土産の蛤を友人に贈ると稱し、之を配布せずして郷里の海濱に投じた話は有名であつて、象山先生が平穩の村民に、植林を奨励したのと好一對の遺徳である。

穀、樹、徳

貨殖篇に「住むこと一年なれば則ち穀を播き、十年なれば樹木を植へ、百年なれば徳を施すべ

し」とあり、貨殖の道も、結局は住み良い人生を建設するに外ならぬと教へて居る。仁者は山を愛し、智者は水を愛すと云ふ。水が方圓の器に従つて移動するのは、智者が機に應じて對處するに似て居り、仁者の徳は泰山に似て敵なく、雨にも風にも不動の形容を示して居る。されど、山の高きを以て尊とせず、樹あるを以て尊しとする。山に樹木があつてこそ、旱天にも水が涸れず大雨も調節して水害を防ぐし、五穀の豊穰を助けるのだから、植林の徳は必ずしも十年の安住に止まらず、寧ろ百年千年の遺業と云ふべきである。

諸戸翁の遺訓

伊勢の諸戸精六翁は、米相場や株式の賣買で千萬長者になつた人であるが、晩年産を爲してからは子孫を戒めて、相場に手出しする事を禁じて、専ら山林事業を奨励したのである。諸戸翁の説によれば、「商賣人は儲ける事もあるが損もある。田を持つても作不作で小作人との關係が八ヶ聞しい。只、山林事業は所有者が大して努力せぬでも、天然自然に樹木が成長し、晝も夜も休

みなく財産が殖へて行く。故に子孫百年の長計は、山林事業に勝るものはない」由である。

日暮硯

日暮硯と云ふのは、今から凡そ百八十年前、寶曆年間に、信州松代藩主眞田幸弘公が、家老の恩田木工民親を信任して、疲弊の極に陥つて居た藩政を改革した實録であつて、二宮尊徳翁も常に之を推奨したと云ふ人生教科書である。信州松代藩は、今から約二百年前の元文時代に、藩主眞田信安の施政が宜しからず、藩の役人は私曲を行ひ、洪水其他天災地變の爲め、領地一帯は非常な不作で、藩民は塗炭の苦みに喘いで居た。此時、年僅に十四歳で、父信安の跡を繼いだ幸弘は、家老の中で一番末席の恩田木工を拔擢して、藩政改革を一任し、且事自力甦生の目的を達した。幸弘は、幼時から明敏にして思慮深く、慈悲に富み、且善い事を行ふ決斷力のある名君であつた。或時近臣が小鳥の飼育を勧めたので、大きな鳥籠を造らせて、其中へ勧めた男を入れ、喰べたい物を與へて檜禁し、近臣が弱つて出して貰ひ度いと歎願するに及び「狭い家に住む人間さ

へ、自由を失へば苦む。まして廣い空を飛び交ふ小鳥を、人間の娛樂の爲めに狭い籠へ入れて自由を奪ふのは、無慈悲の所爲である」と訓戒したのは、有名の話である。

斯かる名君に拔擢され、藩政の改革を一任された恩田木工といふ男も、幸弘に劣らぬ立派な人物であつた。四十歳の時、當時十七歳の少年藩主から、絶對の信認を受けて、上席家老の鎌原兵衛や矢澤帯刀等の先輩を超へ、藩の財政整理に當るや、先づ妻子及び家來を始め、親戚一同を集めて「嘘を云はぬ事、儉約を勵行する事。忠實に本分を盡す事」を誓約せしめ、若し違約する者があれば、直ちに義絶する旨を申し渡し、身を以て範を垂れ、一藩の役人や庶民に威信を示した。恩田木工の整理方針は、自身は極端に責めて、四十六歳で死するまで、飯と汁だけで生活したが、一般には無理を強ひず「嘘を云はずに約束を守り、忠實に職を勵み無益の濫費をせねば、娛樂として賭博をしても差支へない」といふ位寛大なものであつた。此爲め、領内で賭博が流行つて負けて産を失ふ者が出來たので、木工は更に「慰みの賭博に負けて難儀する者は救助するから届け出でよ」と布告し、勝つた相手を調べて召喚の上、取つた金を返せと命じた。相手が之に應ぜぬと「それなら商賣にしたのか。慰みなら許すが商賣の博奕なら罰する」と嚇し「慰みに勝

つたのなら返せ」と命じたので、勝つても得にならぬ爲め、遂に賭博の悪風は止んだ。斯くの如く恩田木工の施政は人情を無理に矯めず、自然に之を善導して、恩威並び施したので、人民も業を勵み、役人も中間で盗まなくなつた爲、五ヶ年経たぬ間に藩の財政は立直り、人民鼓腹して、平和な明るい甦生の喜びを迎へる事が出来た。大正七年十一月、聖恩枯骨を潤して、眞田幸弘に贈從三位、恩田木工に贈正五位の御沙汰があつた。墓は信州松代町長國寺にある。

大津事件回顧

明治の中頃、露國皇太子殿下が、我國御遊覽の途次、大津に於て、御護衛中の巡查津田三藏が突然拔劍して切つけ、御負傷せしめた事件は、當時我が國の朝野を震駭せしめ、畏くも、明治天皇陛下には、御親ら露戎の軍艦に行幸し給ふて御慰問遊ばされた程、宸襟を惱まし給ふたのである。犯人は、無論死刑に處すべしとの意見が天下の輿論となり、時の政府から、司法部へ嚴命が通達された由である。然し乍ら、裁判長たる大審院長は、法文を案じて、外國皇太子に對する不

敬罪は、極刑が無期懲役なる故に、之を死刑に處するを得ずとなし、如何なる彈壓に對しても、敢然所信を枉げず、飽まで法文を楯にして、遂に犯人は無期懲役と確定した。當時、某大官の如きは、此の裁判長の頑固を面罵して、「法文を守つて國家の危急を顧みぬ國賊」とさへ辱めたが裁判長は「外國に媚びて國法を左右する事が、國の危急である」との信念に據り、裁判官たるの良心を守り通した。元より、法律は時代に先立つものでなく、時代から浮游する事も出来ぬ。寧ろ敏感に時代の世相を反映すべきであるが、山法師の傲訴にも脅かされず、泣く兒や地頭にも負かされぬ裁判官の信念が、我國法の尊嚴を維持し來つたのであると信ずる。

誰でも爲る事

刑法其他の法令に所謂の規定があつても、違反者はそれ程の悪い事と思はぬ犯罪がある。假へば、選舉違反の如き、電燭盗用の如き、會社重役の商法違反及び背任等の事件は、普通の窃盜事件とは區別して考へられて居る。選舉違反の如きは、小泥棒などより、社會を毒する影響が大きい

いのに、違反者も社會人も、それ程の破廉耻行爲と思つて居ない。當局が如何に肅正運動に努めても、斯かる社會通念を一掃してからでない、効果は期待出来ぬであらう。電燈盗用も、一寸やり易い事である爲か、違反者はそう悪い事とは思はずに、つい犯す場合が多く、會社が発見しても、餘程悪性のものでない限り、表沙汰にせぬ場合が多い由である。會社重役の商法違反及び背任は、其會社が破綻を曝露した場合には、問題視されるが、平常に於ては發覺せず、發覺しても「誰でもする事だから」と軽く考へて居る様である。斯うした法律上の犯罪で、社會通念の上からは、大して悪い事と思はれて居らぬ事件程、法律の威信を損ひ、道德觀念を紊すものはない。

隠亡根生

人間の死骸を焼いて、其報酬で生活する火葬場人夫こそ、凡ての職業中最も不愉快な仕事であると思はれるが、それでも仕事の多いほど収入が増加するので、死人の多きを望む者が、必ずしもないと云へず、斯かる心理を隠亡根生と世間で賤しめる。數年前、鎌倉警察署へ詐偽事件の被

害者として出頭した際、被告の代理辯護士から示談の申込みを受けたので、穩便の取計ひを請願した處、係刑事が「我々は蜘蛛が網を張つて蝶や蛾を捕へるやうに、犯罪事件の多いのを望む者だ」と放言した。勿論冗談だつたらうが一種の隠亡心理かと思はれた。他人の不幸に依つて、生活費を稼ぎ、それが少ければ収入が減少する醫師や僧侶の如き職業の者と雖も、不幸の多からむ事を希ふ譯ではあるまい。けれども長野で名醫と稱せられた安藤醫師が公言したやうに、「醫を仁術と云ふのは、其業態を稱するので、醫師本人を慈善家と思はれては困る」に相違あるまじく亦僧侶必ずしも無慾の世捨人と限らぬから、世間でも「醫者が取らねば坊主が取る」とそれ等の心理を「隠亡根生」と諷して居る。

法人の人間味

一頃、金貸業者や家主地主等が、法人組織にして、個人では實行し難い厳格な督促を、法人の名義で勵行した事がある。此遺風は、今でも、銀行會社等法人の當事者が、法人なるが故に約束

の條項を一步も譲歩出来ぬかの如き口吻で、取引を接衝して居るのを見受けるが、甚だ奇怪な謬想であると思ふ。今日の事業は、大抵法人組織で經營されて居る。従つて、法人も亦個人と同じく、社會生活をして行かぬばならぬ。社會生活をするからには、定款の規定に準據して行きさへすれば、能事畢れりと云ふ譯にも行かぬ。多少は目的外と思はれる事の爲にも、出費せねばならぬ場合がある。然し、それは他日法人の利益になる場合があるから、一概に背任行爲と云ふ譯に行かぬのである。個人生活にしても、租税以外の寄附金や町内の交際費は、不用の支出であるがそれを頑固に拒絶すれば、人間味のない人間として、世間から指彈されるが、法人でも同様で、社會生活の單位として、人間味のある經營が望ましい。

嫌疑と反證

思ひ掛けぬ嫌疑を受けた場合に、大抵の者は、謬然答ふるを知らず、變な態度を示す爲、反つて相手の疑ひを深め易いのである。斯かる際には、努めて氣を落着け、相手の云ふ事を靜かに聞

き云ふだけの事を云はせて、然る後、徐に反對の證據を擧げ相手に誤解である事を納得せしむるが、最も望ましい態度である。日誌と金残出納帳とは、平常怠りなく記入して置くべし。何かの場合に、存外役立つのである。特に注意すべきは、自ら嫌疑を受けはせぬかと氣を廻して、問はれもせぬ事を、辯解の積りで喋々する事である。我に疚しい影がなかつたら、他人に何と思はれようと、殊更に辯解する要はない筈である。更に、好い加減の證人を引張り出すのは、不利益になる事が多いのを、注意すべきである。自分では、有利な證言させる積りでも、其人が何と云ふか？ 若し豫期に反して、不利益な事を云はれた場合、自己の立場が何うなるかを、前以つて考慮する必要がある。取りとめもない噂の如きは、敢て氣にせねばそれで好いが、放つて置けぬ場合にも、直接の辯解より、間接の反證に依つて、それとなく身の明りを立てる事が、最も効果的である。元祿の昔、上杉家の武士に猿橋右門と云ふ人があつた。其妻女が、若黨と姦通して居ると云ふ世間の噂を耳にしたが、事を荒立するは自己の名譽に關はるし、放任して置ては男が立たぬので、一計を案じて、病氣保養と稱し、若黨を同伴して山間の温泉へ旅立つた。途中人跡のない山中で、彼の若黨を詰問して、姦通の事實を確かめた上、命を助ける替りに男性のXXを切斷

せしめ、温泉で充分創痕を治療させて、幼時からの不具者の如く見ゆる様になつてから同伴歸宅した。而して、一夕親戚朋友を自宅に招き、病氣全快祝ひを催した席上、例の若黨に、餘興の裸踊り踊らせた爲め、彼が不具者である事が知れ、姦通は根もない噂であつたと立證されて、猿橋右門の面目は立派に保たれたのである。勿論、其後暫く經つてから、他の理由を附して、不貞の妻を離縁した事は、云ふまでもない。

斯うした悠長な方法は、慌たゞしい現代の世相に用ひられぬかも知れぬが、以て他山の石とすべきではないか。新聞記事に對する取消しの如きは、正面から抗議を申込んでも、餘り効果はない様である。曾て、某富豪の子息が、××と情死したと云ふ新聞記事の取消を要求されたに對して、東京朝日は、「縊死と報導したのは、服毒死の誤りに付訂正する」旨掲載した事がある。何は兎もあれ、七度調べて人を疑へとの諺通り、猥りに他人に嫌疑を掛ける事は、許し難い罪惡であると共に、他から疑はれた場合には、速かに誤解を釋く方法を講ずる事が、社會人としての義務であると信ずる。

消極的拷問

拷問と云へば、背肉を割つて鉛の熱湯を注ぐとか、石を抱かせるとか、問題の皮手錠其他種々あるが、そうした積極的手段でなく、消極的手段の拷問もある。源平盛衰記に、悪七兵衛景清の妾阿古屋は、岩永検事が積極的の拷問に掛るぞと脅かしても、泰然頑張るが、畠山判事の優しく論す琴責めに降参し「水責め火責めは厭はねど、重忠様の人情責めには包み隠しが出来ませぬ」と述べて居る通り、古來名判官と云はれた人達は、餘り積極的拷問を用ひなかつた様である。昔は如何に證據が整つても、口書爪印、即ち自白がなければ、重罪に處する事が出来なかつた爲拷問は正當の裁判方法とされた。死刑に當る罪で、充分の證據があつても、犯人が頑張つて飽まで自白せねば拷問に掛け、それでも自白せねば遠島位に處し、死刑に斷罪する事は出来なかつた。明治以來、人權が尊重されるに至つて、積極的拷問は不法行爲になつたが、それでも時に飯山事件の如きがあつて、仲々跡を絶つと云ふ譯には行かぬらしい。それにも増して、最近殊に行はれ

るのは所謂誘導訊問であつてしばしば公判廷で問題になるが、被疑者が前科者等の場合は辯解は採用されず、疑惑の儘で斷罪される事が多い。

前科者の悲哀

刑餘者の保護に就ては、福壽園其他、司法當局者と民間の協力に依る保護團體もあるが、前科者が若し再犯の嫌疑でも受けた場合は非常に不利益を蒙り、正義何れにありやと、事情を知る人々をして慨歎せしむる事がある。「假へ天地は亡ぶとも、正義を世に輝かさむ」と、青年時代には叫んだ事もあるが、今は傍觀者として、ソクラテスの曰へる「汝は裁き、我は裁かる、其何れが正しきかは、只神のみが之を知り給ふ」の言を翫味しつゝ、世相の推移を眺めて居る方が安全のようである。

背向きの辯論

法學博士小山温先生は、確信のつかぬ刑事事件の辯護は、幾ら頼まれても引請けぬと云はれる硬骨の辯護士であつたが、曾て左の如く語つた。

「辯護士中には、法律思想ある者の聞くに耐へぬ様な無罪論を主張して被告を喜ばすのを職責の如く心得る者がある。其無益な冗辯の打切りを裁判長が注意すると、法服の片袖を屏風にした蔭で背後を指さし、片手で拜む眞似をする者さへある。之を背向きの辯論と稱する」と。

辯護士は、被告から依頼されて辯護するのであるから、報酬を得る關係上、被告を慰撫激勵する必要もあらうが、さりとは餘りに職業化し過ぎる。

辯護士は、元來英國に於て俠客の義俠から發達したものであるが、立憲政治に於ける代議士と同じく、民衆の法權を擁護すべき公人として、良心的義俠的であつてこそ、始めて其辯論に權威が認められるのである。

頃日、長野地方裁判所に於ける選舉違反事件の公判廷で、中央の法曹界に錚々の名ある辯護士

が、被告の爲に熱辯を振つたのを傍聴した者の談に「流石に甘いもんでしたね。然しあの事件が無罪と罰金だけで済むんでしたら、永い間拘留された被告は人權蹂躪された事になり、大問題でせう」と。

我等は希ふ。某々有名辯護士の熱辯が、背後の被告や傍聴者を感動せしめたと同様に、裁判官の心證をも動かし得ん事を。

法律と處世術

筆者は、早稻田で政治經濟科に學んだが、卒業してから考へて見ると、茫漠として頭に何も残つて居らぬ氣がしたので、之では就職しても役に立たぬと思つて、更に法學部へ再入學し、英法科を卒業した處、今度は直ぐ日本石油から迎へられて、法律關係の事務を擔任させられたが、自信を以て就任する事が出來た。

政治だの經濟だのと云ふ學問は餘りに命題が大きいので、下級の會社員には役立たぬ爲め、大抵は封筒書き等の事務見習ひをさせられるが、法律には條文があるので之を解釋する力さへあれば、直ぐ役に立つ爲め、初任早々から相當の仕事を擔任させられても、間違つかずに處理出来るのである。

然し、其後段々と世渡りの道を體驗してから考へて見ると、法律觀念の強い者は、兎角理屈つぽい癖があつて、處世上何うも面白くない様である。専門の法律家なら仕方ないが、然らざる者は成べく理屈を云はぬ方が、結局得をする場合が多い様である。理屈づくで問題を解決しては、事後の關係が面白く行かぬ様である。

歴史を見ても、法律主義の者は頭腦明敏で相當の仕事をして居るけれど、反面敵が多くて、終りを完ふせぬ事が多い。支那で法家と稱せられた申不害、商鞅、韓非等は、何れも刑名法術の學に長じて治蹟を示したが、末路甚だ芳ばしからぬに反し、仁徳禮儀を治國の要諦と主張した孔孟の道は不朽の眞理とされ、法律萬能の羅馬帝國は亡びても、カイゼルの法律を否定した耶蘇の教へば世界の果まで擴まつて居る。

明治以來、我國の官界は、法科偏重の弊に陥つたと云はれ、法律萬能を排斥する聲も起つて居

るが最近の社會狀勢を見ると、一層此感を深うする。

警官の第六感

警察官が、第六感の暗示を得て犯人を逮捕すると云ふ事は、科學の進歩した現代に於て、餘り自慢にはならぬが、如何に科學的捜査方法が發達しても、矢張り精神の働きの鋭敏でないと、成績は擧らぬらしい。殊に、殺人犯の場合は、不思議にも、第六感の感覺鋭敏な警官が常に功績を示して居る。犯罪科學者の説に依ると、殺人犯人と云ふものは、必ず精神的に非常な影響を受けて居るもので、大抵の犯人が、殺害の現地から、餘り遠隔の地へは、高飛びする事が出来ぬ。不思議な暗の力に牽制されて居る由である。矢張り、人間の生命には、一種の神祕な威力があるらしい。

罪名の製造

地方の警察官が、罪人を製造すると云ふ非難は、屢々耳にする處であるが、それは大略二つに區別される。

其一つは、せぬ事を爲たと云ふ嫌疑をかける事で、前科者や選舉ブローカー等が、往々にして蒙る被疑であり、其二は、刑事々件にならぬものを、事件として取扱ふ苛察檢舉である。

第一の場合、せぬ事をしたと云ふ疑ひ、所謂濡衣又は無實の罪に就ては、公正なる裁判に依つて、黑白を明かにするより外に道はないが、嫌疑を受けた者に、疑はれるのを當然とする程の弱味がある場合の外、無罪の判決を得れば、未決拘留日數に對する補償制度もあるし、檢察官憲と雖も人間である限り、時に鑑識違ひのあるのは免れぬ事であるから、不當な人權蹂躪さへなければ、止むを得ぬ事である。

問題は、第二の場合、即ちせぬ事をしたと云ふ疑ひを掛けるのでなく、日常慣用の行爲で、法

律上犯罪なぞとは思ひも寄らぬ事や、普通の貸借關係で、或事情の爲め履行が延期し、又は履行不能となつたのを、詐欺の罪名で檢舉する事等で、云を罪名の製造といふ。

此第二の問題は、警視廳管内に於ては、人事相談で片附ける場合もあるし、大抵民事裁判所へ出訴する様に告訴人を諭すが、地方の警察官に限つて、商取引の手違ひまで、詐欺扱ひにする事が多い。

最近、長野市のカツフェ業者が店舗の譲渡に就て、譲受人との取引契約に不備な點があり、紛糾を生じた事件を、警察が干與して、詐欺横領傷害等の長い罪名で送局したが、検事局では傷害罪だけを起訴し、執行猶豫の判決になつた如き、被告人の行狀が悪かつた爲とは云へ、公平なる法律眼を以て見れば、警察の罪名製造と云へぬ事もない。

不誠實の商取引と、詐欺罪との差異は、殆んど紙一枚の表裏であるが、夜店の銘仙が人絹であつても、それは買手の不注意とされ、一流商店の商賣にも、若干の手心があるのは、社會の常識として容認さるべきであつて、若し之等を警察的に解釋すれば、商取引の何パーセントかは、詐欺罪を構成する事になり、刑務所の大増築をせねば、收容し切れまい。

大官と刑罰

明治以來、國務大臣にして疑獄渦中の者と見られしは、某官相を始め、大浦内相、箕浦遞相、小川鐵相、中島商相、三土鐵相、小橋文相等あり、更に目下進展中の鐵道疑獄事件の被疑者として、某前大官の身邊危しと傳へられて居るそれ等の内、宮中關係某大官の場合は、明治天皇の畏き御仁慈に依つて、悔悟自決した爲め其罪を問はれなかつたと傳へられ、大浦内相は隱居謹慎して不起訴處分に附され、箕浦遞相、小橋文相等は無罪、中島商相、三土鐵相等の事件は、今尙審理中である、小川鐵相のみは、一審で無罪の判決を得乍ら、檢事控訴で有罪となり、六十八歳の老軀で、二年の懲役刑に服せんとしつゝある。大官にして、勳章を褫奪された者に、賣勳事件の天岡氏があり、鐵道疑獄の小川氏之に次ぐ。國家に勳功ありし者も、庶民と同様に刑罰を課せらるゝ事は、現行法律の當然とする處であるが、昔は然らず、即ち、重きも自裁を許し、次に官位を褫奪又は下して遠流に處し、輕きは左遷の程度であつた。其何れにも、法理的根據はあらう

が、其罪を悪んで其人を悪まず。殊に國家に勳功ありし者の過誤に對して、稍寛大の處置があつても、敢て世道人を心戒むるの害にはなるまいと思ふ。然し乍ら、如何に大官と雖も、罪の疑惑を不問に附するは、絶対に許さるべきでなく、苟くも疑惑視される傍證があれば、飽迄之を檢察すべく、此結果有罪とされた場合に、勳功の大小を參酌して、相當寛大に處置さるべきが、穩當なりと信する。

死屍に鞭打たず

刑法で、死者の名譽を保護するのは、遺族の名譽を保護する趣旨であらうが、普通人の名譽毀損は事實の有無に關せずとあるのに、死者の場合は、誣罔に限つて之を罰するとあり、事實を事實として彈劾するのは差支ないとある。外國の法律では、事實であれば凡て名譽毀損にならぬが我國で事實の有無を問はずとしたのは、不具者でも不具を罵らるれば立腹して喧嘩になり、秩序を保ち難いからと云ふ法理である。若し然りとすれば、死者の場合にも、遺族の名譽と云ふ點に

於て區別なかるべく、實際問題として亡き尊族の名譽を辱められては遺族が黙止せぬ爲、紛擾を惹起する例が多いやうである。某地の奇僧が、葬儀の際故人の所行を弔文に認めて讀むのを例とした爲、地方の風儀が改まつた話もあるが、死屍に鞭打たぬのは我國民的襟度である。

時効の妙味

刑事訴訟法第二百八十一條に、公訴時効の規定があり、罪を犯しても、一定期間起訴されないで、無事に経過すれば、其後に犯人である事が發覺しても、檢事の公訴權消滅に依り、起訴されぬと云ふ特例である。

公訴時効の期間は、死に當る罪でも十五年、無期が十年、懲役禁錮十年以上に當る罪は七年、同十年未滿は五年、同五年未滿及び罰金刑に當る罪は三年、賭博犯や拘留料の罪は六ヶ月、選舉違反の罪は六ヶ月であつて、人殺しの大罪人でも、十五年間發覺せず居れば、良民と同様に社會生活が出来るのである。

起訴されて判決を受けた者でも一定年限間捕縛されなければ、刑の執行権が消滅する。但し此方は死刑が三十年、無期が二十年、有期十年以上は十五年、三年以上は十年、三年未満は五年、罰金は三年、拘留料料及び没收は一年で、前記の公訴時効より永い。

民法には、取得時効と云つて、他人の物や土地を、十年又は二十年の間、所有の意思を以て、平穩且公然に占有して居れば、所有権を取得する規定があり、消滅時効と云つて、借金しても、十年間請求されねば、法律上支拂ひの義務を免れ得る規定があり、旅館料理屋の宿泊料飲食代等は、僅か二年間の請求遲怠で時効が成立する。

斯くの如く、重きは殺人の重罪犯を始め、輕きは罰金科料の罪、及び民事上の土地所有權から飲食代の支拂義務まで、時効を定められたのは、無論犯罪隱蔽の獎勵でもなく、支拂義務不履行の擁護でもない。即ち、社會の秩序を維持し、社會生活を安定せしめる爲の法理に基くのである。

民事上に於ては「眠れる權利は保護せず」と云ふ羅馬法の原則があり、刑事上に於ては、假へ一旦誤つて罪を犯したで者も、既に悔悟して、相當年間平穩な社會生活を營む者は、普通良民と

撰び難く、且又犯人自ら良心の苛責を受けて處刑同様の苦痛を、充分味はつたであらうから、斯かる者に對して數年又は數十年前の舊惡を詮穿するのは、反つて社會生活を不安定ならしめる故に寧ろ法律的に忘れ去る方が、實際に適する爲であらう。

尙、法律の目的は、正義を保護するの外、社會の安寧秩序を維持するにある。而して、犯人に對しては、報復主義の懲罰を加ふるに非ずして「其非社會性を矯正し、善良なる國民たらしむべく、之を強制的に教導する」のであり、此法理に基いて、執行猶豫の特例が定められたが、其目的は、時効と同じく、社會生活の安定を期し、一旦の過失者を改善し、再起せしむるにある。人の噂は、社會人に對して一種の賞罰を行ふものであるが、それさへ、七十五日で時効にかゝる。

時効の妙味は、過ぎ去つた日の過失を深く咎めず、甦生再起せしむるにある。淮南子も「行年五十にして、四十九年の非を悟る」と曰ひ、人間は過去より、將來が大切である。

免れて耻なし

誤つて罪を犯し、運拙く囹圄の辱を受けても、衷心から前非を悔ひ、社會に對して何事かを貢獻せんと期する者と、惡計を企んで私慾を逞しうし、社會の多數者に大迷惑を掛け乍ら、偶然にも罪を免れて一身一家を完ふした幸運を有難しとも思はず、所謂免れて恥なきの徒と、何れが立派な人物であらうか。之を良心的に見て、亦社會的効用の上から比べて、結論の要はあるまい。然るに、社會の實相を見ると、免れて恥なきの徒は、悠々大道を濶歩するに反し、一旦の不運者が更に不運を招いて、再び起ち難き爲め、自暴自棄に陥り易い境地にまで追ひ込まれる。噫、天道是乎非乎の歎きは、斯かる世相を見て發せられるのであらう。

大岡裁判

講談で有名な大岡裁判と云ふのは、今日の法治主義から云へば、不都合な事になるが、法律は

死物であつて、之を活用するは人にありと云はれ、法律の細則を勵行する者より、義理人情に合致した大岡裁判の方が、民衆の間に人氣がある。罪を得て裁かれる者は、何うせ惡事を犯して居るに違ひないとしても、その善い方面を見て、酌量する寛大さが、裁く人の心にあつてこそ、初めて名判決が生ずるのであらう。

復讐と正義

「眼を潰した者に對しては、其眼を潰して復讐し、齒を折つた者に對しては、其齒を折つて報復する」と云ふのが、人間の先天的復讐觀念であつて、社會は此觀念を正義と認め、古代の法律は之を基準として定められて居た。然し、復讐を考へる者の心には愼恙が燃へ、狙はれる者の心には恐怖が湧き、更に復讐に對する復讐が連続する事になれば、双方共枕を高うして安眠出来なくなる。そこで、耶蘇は「汝等相争へば分厘までも償はなくては、其門を出る事が出来なくなるから、寧ろ敵を愛して、右の頬を打つ者には左の頬をも示し、相手の反省を求めが善い」と教訓

した。右の頬を打つ者に、左の頬をも示せば、果して反省するであらうか？ そんな事は、奇蹟であつて常識では考へられぬ——と云ふのが、正義派と稱する法律學者の説であつて、實踐派の道徳學者も亦「怨に報ゆるに徳を以てするなら徳に報ゆるに何を以てするか」と反問して居る。人類學者で法律學者のロムプロゾーは「犯罪者には、精神病的缺陷があるから、之を懲罰するよりも其非社會性を矯正すべきである」と主張し、我國の刑法は、此説を參酌して居るが、此結果、被害を受けた者の復讐心理は、満足出來なくなつたので、正義派學者間に非難が生じて居る。近來、世相が複雑になつて、純情の人間が少くなり、被害を受けても、それを最少限度に止める事の利益を考へ、復讐心が減退したのは、進歩と云ふべきか。退歩と云ふべきか。……思ふに、現代の國家的並に社會的平和をば、愛する礎としたものでなく、正義を叫ぶにさへ、利害の打算を出來ぬほど、人類が萎縮した爲め、紙一枚の差で保たれて居るのかも知れぬ。

長所と短所

「大は小を兼ねる」と云つても杓子が耳搔きにならぬのと同じく、物には凡て長所と短所とがあ

る。况んや人間に於てをやだ。周圍に氣を配つて、左顧右盼、只一身の過失なきを期するやうな人物は、守戒の適材かは知れぬが建設事業の役には立つまい。進取の氣象に富み、荊棘の道を切り開いて行く事業家は、概して決斷が果敢であるが、果斷は稍もすると專斷に流れ、周圍から反目嫉視されるのを免れ難い。チヨコ／＼と小まめな人間には事務の處理や走り使ひは出來ても此一番で起つか潰れるかと云つた大勝負は打てず、平常はぼんやりの如く、餘り小役に立たぬやうな人間がいざと云ふ場合に、存外の大事に當り得るものである。長所と短所とは、表と裏の如く並存するものであつて、凡そ如何なるものでも、長所ばかりあつて全然短所がないものはあるまい。故に先づ「寛大」でなくては、人の長は勤まらぬ。

縁の下の力持

世の中には、獨り善がりの功を焦つて、同志の迷惑を顧みぬ様な働き手がある。然し斯かる種類の働き手は、大局から見れば、寧ろ邪魔になる場合が多いのである。昔の戦争で、一番槍を賞

讚したのは、烏合の衆が卑怯に陥り易い爲め、勇氣を鼓舞する必要からであつたが、漸次兵制が整備するに従ひ、所謂抜け駆けの功名は嚴禁される事になつた。凡て、事を成すに當つて必要なのは、椽の下の力待ちである。全體の統制に従つて、何の様な割の悪い仕事にでも、黙々として忠實に服務すると云つた人物こそ誠に得難い功勞者で、味方の中に斯かる人物を多く集め得た首領は、勝つても敗けても、美事な戦ひを戦ひ得るであらう。

甘諸先生の墓

目黒不動の境内には、俗に甘諸先生と稱される青木昆陽の墳墓がある筈だと尋ねたが、平井權八と小紫の比翼塚には、五反田邊の花街から、粹な姐さん連の參詣が引きも切らぬに、往昔關東地方の飢饉を救ふ爲め、さつま藩栽培を奨励して、幾萬人の餓死を救つた厚生者の墓など、何處にあるやら知る者が無いとは情ない。やつと寺僧に問ふて詣つたが、餘り訪ふ人もないと思へ、東京府が建てた名跡指定の木標がなければ分らぬ程の小さく粗末な墓石であつた。平井權八と稱

する無頼の浪人が盗人強盜罪で刑死した後、その情婦であつた吉原の娼妓小紫が後追ひ心中したと云ふ、今ならば新聞の社會記事を賑はすに過ぎぬ悪漢娼妓の墓の方が、救世濟民の功勞者たる青木昆陽先生の墓より後世の大衆に印象深く追慕されると云ふのは、亦一面の世相を語るものである。

富士越の雲龍

有名な畫家が、富士越の雲龍を畫いて或成功者に贈つた。それが評判になつたので、某家の二代目當主が、自分にも畫いて欲しいと頼んだ處、畫家は富士越の雲龍でなく、明朗な富士山だけを畫いたので、注文と違ふ旨を詰られたに對し「あの人は一代の成功者である。だから富士山を越へる龍の如き意氣が必要だが、貴君は先代の衣鉢を繼いで、其家業を護つて行きさへすれば善い。生ぢつかの元氣を出すと、反つて家業を誤る虞れがあるから、此畫の富士山のやうに、穩健明朗な姿で、氣品う高く持ちなされ」と、訓戒した由である。

生前か死後か

死んで花實が咲くものか——と云ふ諺がある。死んで終へば、何んな人でも、朽木と同様であるから人間生きて居る内に楽しんだが得である。死んでから何ぼう讃められても詰らない——と云ふ思想がある。

大楠公は、今こそ別格官幣社に祀られて、國民崇敬の中心と仰がれては居るが、其生時は左衛門少尉兼河内守と云ふ低い地位で、今の聯隊長兼知事に過ぎず。故に折角の軍略も、御前會議の席上で高位の一公卿の反對に依り、採用されなかつた譯である。

斯うした場合に、普通の人なら切齒扼腕して不平を滲し易いのであるが、正成公は、靜かに我事の成らざるを悟り、一死以て君國に酬ゆるの道を撰んだのである。

生前に於て志を伸べ、歡樂を盡くすが幸福か。死後に神と仰がれて、永く人間の心中に生きるが有意義か。分り切つた事で、實は分り切らぬ事である。

功利主義の立場から、楠公湊川の討死に就て、異論を述べて居る者がある。

慶應義塾の創立者福澤諭吉翁は「正成が湊川で討死したのは、何の役にも立たぬ事で、下男權助が借金云ひ譯に窮して、首を吊つたと同様だ」と、極端に非難したが、斯うした功利主義的議論は、我國民性とは一致し難い。

楠公の軍旗には、非理法權天の五字が記してあつた。

非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は權に勝たず、權は天に勝たず。即ち、通常の場合に、理が非に勝つのは當然であるが、理があつても、法律上惡法も法なりで法には勝てぬ。法律も權力の爲め枉げられる例は、今日でも往々に見受られるが、その權力と雖も、天には勝てぬ時がある——と云ふ哲理を示したものである。天の時が來ねば、如何に善い事でも、行はれ難いものである。

正成は、此理を悟つて、敗死する最後に「七生滅賊」の遺言をし、生き替り死に替り、天の時を待つて、其志を遂げんと欲した。即ち、正成は「靈魂不滅」を信じた事になる。

英雄偉人の事跡は暫く措き、凡俗の輩が、生きて居る間に、觀樂を盡したいと希ふのは、當然

であつて、他人に迷惑を及ぼさぬ限り、必ずしも曲事ではない。然し乍ら、勢ひに乗じて、世間に不義理をし、他人の迷惑を顧みず、只自己の快樂のみを追求したのでは、死後は愚か、現世に生きて居る内から、世人の指弾を受けるであらう。

名將奇勝せず

堵博者は「素人に目の出た場合ほど恐ろしい事はない」と云ふ。玄人なら、堵博の定石を守つてかなり八分目の勝手で手を退くが、素人が偶然勝つと、幸運に乗つて何處までも打つ。だから其勝利は莫大である。然し、長追ひをして居る内に形勢が逆轉し、元も子も失ふ危険も多い譯である。楠木正成や、諸葛孔明のやうな名將は、決して奇勝を喜ばない。正成が天王寺に勝つや、敵の逆襲せぬ間に引揚げた如き、亦孔明が馬稷の軍略を却けた如き、何れも堅實なる兵法である。故に彼等は戦へば勝ち、攻むれば取る。けれども具に其戦果を見ると、奇勝もせず、大勝もして

居らぬ。夫れは勝ちに乗つて長追ひをしなかつた故だと思ふ。

名譽の不運

大奈翁が、ウオタルローに於て、英軍と對戦した時の作戦は、ネー將軍の別隊が、英軍突撃開始の五分前に到着してさへ居れば、立派に勝つたものであつたと、後世の史家は説いて居る。然るに、天は此英雄に加擔せず、前日の雨で道路が泥るみ、砲車の運搬に手間取つて、別働隊の到着が遅れた爲め、勝敗は逆轉したのであつた。不世出の英雄でさへ、天の運を如何共なし能はぬ。まして凡俗に於てをやである。されど、名譽は必ずしも幸運者の頭上を飾るものでなく、ウオタルローの古戦場に立てられた戦役記念の金獅像は、英將ウエリントンの名よりも、敗將ナボレオンの名譽の不運を追想せしめる。

裏切りと改過

舊恩者に敵對した者が、何かの動機で前非を悔ひ、舊恩に酬ゆる爲め、反逆者の同盟から脱退

して矛を逆にした場合は、裏切りと云へるだらうか何うだらうか？ 太閤記の十段目、尼ヶ崎陣屋の段は、誰でも知つて居る勸善懲惡の淨瑠璃であるが、それに依ると光秀の母が「主を殺して將軍職になるより、僅の扶持米でも忠臣と呼ばれる方が嬉しい」と、我子の叛逆を責める。妻の操も「せめて母御の御最後に、善心に立歸つたと、たつた一言聞かしてたべ」と口説くが、此場合に、若し光秀が「女童の知る事でない。惡虐非道の織田春長、我諫めを用ひずして横暴日々に増長する故、大義親を滅する譬、天に代つて討取りしは我手柄」など強辯せず、前非を後悔して翻意したとすれば、叛逆の血盟者からは、裏切り者と非難されようが、之を叛逆者の再反逆として、二重に責められる非行とさるべきか。それとも改誤遷善と見、前非の幾分を償ひ得べしとさるべきであらうか。

順逆二門無し

順逆二門無しとは、光秀の主張であるが、大徳寺の焼香が濟めば秀吉も亦織田家の忠僕ではな

く、結局勝てば官軍の世の中であつて順逆は方便に過ぎぬと思はせる。或善良な老夫婦が、一夜強盜に襲はれて殺害された。犯人は間もなく逮捕されて死刑に處せられたが、在獄中教護者の説諭で前非を悔ひて敬虔な佛弟子となり、従容として念佛を唱へ乍ら受刑した。佛教の説に依ると此死刑囚は懺悔の功德に依つて成佛が出来る譯であるが、一方殺された夫婦の方は、突然の危難に遇つて念佛の違もなく、苦悶怨恨の物凄しい姿で死んだから、修羅道に陥ちて無限の苦難を受ける事になる。此場合、善人は法律上からも、宗教上からも、救済される方法がないに反し、悪人は法律上は處罰されても、宗教上濟度される譯で甚だ不都合ではないか——と遺族が或雜誌へ抗議書を發表した。此話は、一寸菊池寛の「恩讐の彼方へ」の筋に似て居るが、更に順逆二門無し之感を深めさせる。

光秀の叛骨

石山軍記には「光秀浪人して任官を求め歩いた頃、毛利元就に面會した際、元就は光秀の骨相

を觀て、頭項に「喜怒哀骨」と稱するものがあり、叛逆の相があるとして召抱を拒絶した」とある。石山軍記と云ふのは、所謂稗史小説の類で、信を措くに足らぬが、爛眼なる元就の事だから、光秀が神經質で、些細の事に喜怒するを忌み、骨相に托して、求職を拒絶した事は、あり得ると思ふ。光秀に關する記録は、太閤記其他、秀吉の功業を讃へる引合ひに用ひられた爲と、封建制度の道德觀念を標準にした爲め、聊か不當に評價した嫌ひがある。現代に於ける學者の説に依れば光秀は立派な人物で、土岐源氏の正統を嗣ぐ家柄であり、軍學兵法は元より、文學の嗜みもあるから大義名分を辨へなかつた譯でなく、信長から屢々侮辱を受けて恨骨髓に徹して居る折柄、義理ある叔母まで犠牲にして攻略した所領を、書附一本で没收された爲め、遂に叛旗を翻へしたので、非は元より信長の不徳にある。只、惜むらくは、信長を討つた動機が、大義名分の爲でなく私憤の爲であつた事と、復讐に出て來た相手が、國民的英雄秀吉であつた事は、光秀の立場を實質よりも悪くしたのである。莫遮。淨瑠瑠にもある通り、又實録を調べても、其妻は貞淑な賢夫人であり、其家臣には、湖水渡りの明智左馬之助あり、其娘は細川忠興の妻として、烈婦の名を歴史に遺し、其一族からは有名なる春日の局が出て居る等、優生學の上から見ても、如何に立

派な家系であつたかを立證出来る。

光秀と三成

光秀と同じく、優秀な資質を持ち乍ら、天運非にして、天下分目の合戦に打敗れた不遇の英雄に、石田三成がある。三成に關する記録は、徳川時代の作であるから、矢張り徳川氏に都合の好い様に三成を奸物扱ひしてあるが、村上浪六翁の説に依ると、豊臣家唯一の忠臣であると云ふ。「三杯の湯を水にした關ヶ原」と云ふ川柳がある。三成は、幼時寺の小僧であつたが、秀吉に湯を献じた際、初めはぬるく、次は少し熱く、最後には熱い湯加減にしたのを、秀吉が感心して、給仕から祕書役に用ひ、後には書記官長から内務大臣にまで登用した逸材である。秀吉恩顧の大名は、加藤福島等何れも戦場の勇士であるが、三成だけは戦功が少く、後方勤務で出世した爲め、同僚からそねまれたが、決してお茶坊主式の奸臣ではなく、其家臣には有名な舞兵庫、島左近等の傑物あり、其盟友には、直江山城、大谷刑部、眞田昌幸等の英雄があるのを見ても、三成が尋

常一様の人物でなかつた事を、想察出来る。三日天下の惟任將軍光秀が、山崎の決戦に敗れたと同じく、西軍數十萬の總參謀長三成が、關ヶ原の決戦に敗れたのは、要するに、天運に恵まれなかつたと云ふの外なく、勝敗を以て人物を評するのは當らぬ。

美名の戒愼

佛蘭西革命の際には、自由の爲とさへ云へば、何ものをも犠牲にして顧みず、美名の下に、多數の無辜をギロチン臺上で殺戮した。最初は自由に憧れて革命を謳歌し、志士を掩護したマダム・ローレンも、遂は極左派に悪まれて斷頭臺に上つた時は、自由の女神の像に向ひ「自由よ。汝の名に於て如何に多くの生命が失はれた事であらう」と嗟歎した。正義の爲とか、國家の爲とか、社會の爲とか、人類の爲とか云ふ美名は、實に感激的で、以て青年の熱血を沸かすに足る魅力を持つて居るが、その濫用を慎まぬと、國家の秩序を紊り、社會の平和を破壊し、人類の幸福を奪ふような惡結果を激發し易いのである。故に我國の史實を見れば、假へ美名の下に道德的理由を

有しても法律秩序を破つた場合には、必ず嚴重な制裁を與へて居る。四十七士の切腹、佐倉宗五郎の磔刑等、後世忠臣義民と仰がれて國民道德の師表とされる人々をも、時代の秩序を維持する爲には斷然容赦せず、識者も之を是認した。古語にも「慷慨死に赴くは易く從容難に就くは難し」とある通り國難を打開せんとする努力よりも國難を耐へ忍ぶ努力の方が、更に困難なのである。

大義親を滅す

君子豹變と稱して、變説改論を屁とも思はぬ者が、親近者に背く場合、多くは「大義親を滅す」などと呼號する。が、「忠ならんとすれば孝ならず」と苦悶した平の重盛の如きこそ、始めて大義滅親と稱し得るのではあるまいか。

明治維新の際、徳川幕府の爲め最後まで節義を守つて、薩長土肥の官軍に反抗したのは、會津の松平藩だけであつたが、その言ひ分に依ると「忠孝は車の兩輪と云ふに、薩長の遣り方は、勤王の忠義を看板にして節義を紊つて居る。即ち水戸尾張紀州の三藩は、徳川の分家であるが、分

家に命じて本家を討たしめ、井伊本多酒井榊原の四藩は幕府の重臣であるが、臣に命じて其主家を討たしめ、又父に命じて其の子を討たしめ、弟に命じて兄を討たしめるなど、恰も保元平治の亂と異らず、斯くの如きは信節に背反し、人心に悪影響を及ぼして後日國家に患を遺すであらう」と官軍の痛い所を衝いて居るが、此會津藩士中から、明治時代に幾多の名教育家や廉吏を輩出したのも偶然ではないと思はれる。

武道の奥儀

塚原卜傳の無手勝流は、誰でも知つて居る有名な話であるが、明治時代の第一人者山岡鐵舟も劍禪一致を説いて居る。才と云ふ文字は、牙を止めると云ふ二字を一つにしたものゝ由であつて武道の奥儀に達した劍聖の説と合致して居る。

焚書の新解釋

幸田露伴博士の説に依ると、秦の始皇が學者を抗坑し、書物を焚いたのは、學問を嫌つた爲でなく、當時支那の文字は各地で意味が異つて居た爲め、法令を出す毎に學者が解釋を誤つて非議するので、命令統一を圖る爲め斷行したものゝ由である。大の虫を生かす爲に、小の虫を犠牲にするは、一殺多生菩薩道の暴君として居る。蓋し、民衆が強壓政治を悦ばぬからで、爲政者の心すべき點である。

正義の對立

正義は唯一つである——と、多くの人々は信じて居るが、實は二つ對立する場合がある。國と國とが戦ふのは、二つの矛盾した正義が對立した場合、双方共自らの主張が眞の正義なる

事を確立する爲である。双方の國民ば何れも自國の正義を確信するからこそ、命を捧げて戦ふのである。

國內に於ける正義の對立は、神聖なる裁判に依つてのみ決定されるが、裁判官と雖も神ならぬ身の時に誤審がないと限らず、誤審が誤審と決定されねば、誤審の儘で正義が不正とされ、不正が正義とされる事も、實際にあり得る。

正義は、一定不變の内容を有して居る譯でなく、時世の變遷と共に内容を變へて行く。故に昨日の正義が、必ずしも今日の正義ではなく、明日には亦別の正義が確信されるかも知れぬ。

此故に、正義の主張は、國際的にも、國內的にも、喰ふか喰はれるかの争ひであり、此争ひに勝つて始めて正義が確立するのであるが、此の場合必然的に附従する相手方への慘虐——即ち新なる不義に就て、神の審きを受くるの覺悟を必要とするのである。

世の中には、右の頬を打たれて左の頬をも示す者に對し、左右を續けて打ち、以て快を叫ぶ偏執的小人があるので、神の眞理よりも法律上の正義を重んぜざるを得ぬ事になる。

闘争の人生

人間が生きて行く爲には、不斷の闘争を續けねばならぬ。

先づ自然に對して、一寸油斷すれば、風邦に冒されたり、寝冷えしたりする。暑さ寒さに對しても、四季それ／＼の準備を要する。

而して、人間が自然との闘争に馴れて、永い間の經驗から、寒を防ぐに暖爐と毛布を用ひ、暑を凌ぐに扇風機と人造氷を造つて以來の所謂文化社會の住人は、自然との闘ひより、寧ろ人間相互間の生存競争に困難を感じて來た。即ち、寒暑の來襲を畏るゝより、それを防ぎ之を凌ぐに必要なる生活資材を獲得する爲め、同胞との競争に耐へ得るか否か、現代社會人の重大なる關心事となつて居る。

原始時代の人間は、自然の迫害を痛感して、より多く天を畏れたのであるが、現代の社會人は天より人を恐れ、自然との闘ひより同胞との戦ひに悩んでゐる。

今年の暑さは格別——と云ふのは例年の常套語乍ら、全く此頃の暑さは、東京市を灰にした大震災の大正十二年の夏と同様、例年よりきびしいようである。

然し、東京市民は、其暑さなど事とせず、某國飛行機の空襲に備ふる爲、防空演習に熱中したのであつた。

即ち、彼等の備ふるのは自然の迫害に對してではなく、人類の襲撃に對してであり、其闘はんとする假想敵は、最早自然を相手にせず人類が目標である。

斯くの如く、人間は自然を征服した積りで、空を翔り水を潜り山に登つて、自然に對する優越を感じて居るが、若し大自然の眼で之を觀れば、ガリバーの旅行記にある小人國の風景と髮髯たるものかも知れぬ。

大處高處から物を觀ると、馬鹿らしくて闘志を失ふが、佛教に所謂菩薩の如く、一階級身を墮して目標を卑近に取れば、生きて行く爲には、不斷の闘争を続けねばならぬのが、人生の常態であらう。

外柔内剛

芝居を見ても、始めに強がり云つて、下手に出て居る弱そうな相手を罵り辱める奴は、相手が勘忍袋の緒を切つて、愈々眞劍の勝負になると、存外他愛なく伸されたり、逃げ出したりする。道行旅路の花婿の鷺坂伴内や、義綱千本櫻の早見の藤太のやうな男は、日本人の面よごしである。早野勘平や狐忠信の如く外見は柔順に見え、始めは下手から出て成べく事を荒立てぬやうに、所謂不擴大主義で行く者が、一旦刀の鯉口を切つたとすると、恐ろしく暴れ廻り、忽ち死骸の山を築いて觀客の溜飲を下げさせる。外柔内剛こそ、眞の日本武士道であり、多年培養された我國民の中樞精神であると思ふ。

俎上の鯉

鯉は、俎の上に載せて、庖丁の背で三度鱗を撫ると、生身を割かれても騒がず、覺悟のよい魚